スランプ・マスター

青色一號

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スランプ・マスター

【Ｎコード】
Ｎ０１６４Ｊ

【作者名】
青色一號

【あらすじ】
山梨県のとある田舎町、自堕落で鬱屈したやるきのない日々を過していた男子中学生、津山サツキは手違いで病院から本来渡されるはずの薬と間違えて、ある薬を貰い受ける。だがそれは秘密裏に開発された国家機密の薬で、本来、防衛を目的とした化学兵器として計画されていたものだった・・・そしてそれを渡された翌日の朝、薬を飲んでしまったサツキは美少女になってしまった。
それから生活は一変し、サツキはいろいろと大変な目に・・・・。

プロローグ（前書き）

今回は初めて主人公視点で描いて見た！

プロローグ

これは一体どういうことなのか、何故俺はこんなことになってしまったのか分からない。
それはある日、突然なんの前触れもなく起こった。

まるで夢でも見ているかのような、夢なのか、それとも現実なのか。
何故このようなことになってしまったのか、これはもしや誰かが意図的に仕掛けた罠だったのか、それとも・・・・・・・・神様のイタズラなのか、分からない。

別に俺は恨まれるようなことなどした覚えもないし、何故自分だけがこんなことになってしまったのか。
とにかく、夢が夢であるようにまた、現実は現実なのだ。
人間の姿形がそうであるように、日常もまた、そうなのだ。

俺はいつもどおりのなにもないくだらない日常、その日暮しのくだらない生活を送っていたのだが、
もしあなたは、自分の姿形が変わってしまったとしたらどうするだろう。

何の前触れもなく、しかも突然・・・・・。

俺の名前は津山サツキ、何処にでもいるごく普通のゆとり世代の中

二の男子だ。
ただ、普通の奴らとは違うところは、俺はアニメやゲームの美少女をこよなく愛する、いわゆる「オタク」とよばれる種族の人間だということだ。

同然、彼女などいるワケがない。別に欲しいとも思わない。

俺の住む町は山梨県にある蓬莱町、周囲を山に囲まれた田舎町だ。
当然あたりは畑や田んぼが広がり、国道沿いには古い民家や商家などが立ち並び、交差点のところにはコンビニが一軒立っている程度の小さな田舎町だ。

そして唯一の交通機関はバスと電車くらいであろうか、電車は単線三両編成の私鉄が一時間に二本ぐらいしか来ない。

踏み切りを渡り、そこから少し離れたことろにある農家が俺の実家だ。
木造二階建ての瓦屋根の大きな母屋、その二階が俺の部屋だ。

両親は町内会で当てた福引の世界一周旅行とやらに出かけていて不在だった。

妹などはいない、俺は一人っ子だ。
今家にいる家族は俺とじいちゃんと墓の中で眠るばあちゃんぐらいだろう。

そして俺の通う学校、県立蓬莱中学校は国道の向こう側、住宅地の中に鉄筋コンクリート製の大きな建物がそうだ。
校舎の裏はすぐ田んぼになっており、体育館やプールもあるが、田舎なので生徒の数はそれほど多くはないが、俺はこの町が好きだ。
学校から少しはなれたところにはゴルフ練習場ほどの大きさの公園があり、家出したり暇なときに来ては原っぱで寝転がって昼寝をしたりゲーム機で遊んだりすることがあった。

しばらく親も返ってこないのでしばらくは俺様タイムを満喫できる。
好き勝手が出来ると思った俺は早速テレビのある部屋でゴロゴロしていた。
これが中学生の正しい休日の使い方である。と、思っているのは俺ぐらいのもんか。

だが俺はあることを忘れていた、それは今日が登校日であるということを・・・・・・。

「やべぇーッ!!今日登校日じゃんか!!」

一気に絶望の淵に立たされた、なにせ今日は気分的には家から出たくないきぶんだったから。
俺はすぐに適当に制服に着替えて玄関を飛び出した。

玄関の横に止めた俺の古い自転車、いまどき珍しいロッドブレーキ

の実用車はじいちゃんから貰って、通学に使っているのだが、フレームが三角になっていて乗るときは片足を上げるのですごく乗りづらいが、スピードは結構出るので気に入っている、でも俺の友達は「お前の自転車ってなんか爺様が乗ってるやつみたいだな」とからかわれることも時々ある。

俺の自転車には前カゴはなく、俺はカバンをリュックのように背負い、自転車に飛び乗るとそこからいっきに走り出した。
自宅からは少しゆるやかな坂になってるので少しこいだだけでも結構な速さで進んでゆく。

踏み切りが見えたので俺は一気にスピードを上げた、だが突然警報機が鳴って遮断機が下りたので俺はとっさに急ブレーキをかけた。

「やべぇ!!」

ブレーキの音とともに後輪が持ち上がって自転車はなんとかギリギリ止まった。
ここまで来るのに少し汗をかき、横っ腹が微妙に痛かった。これはおそらく俺の日ごろの運動不足であろう。両親が旅行に行ってからはあまり外に出歩くことが少なくなったおかげか。

ギリギリ止まったところで目の前を電車が通り過ぎていくのを待った。
警報機が鳴り終わり、遮断機が上がると同時にペダルに足をかけていっきに行こうと思ったその時、誰かが後ろから俺のことを呼んでいた。

「おーい！サツキ～！」
「あ？」

後から自転車でやってきたのは俺の友だちの中村ひろし。小学校の頃からの付き合いで、よく一緒に遊んでいる気の会うやつだが、唯一俺と違うところはコイツはオタクではないということだけだが結構いいヤツだ。

「よーひろ！」
「お前も遅刻か？」
「まだそう決まったわけじゃねーよ！まだ五分あるぞ！」
「急いでもギリギリ間に合うか、間に合わないか・・・・・・」

そんなことを話し合っていると、またも誰かがやってきた。

「おーい！サツキー！ひろー！」

駆け足でやってきたのは俺の幼馴染、岡崎ゆみ。
幼馴染とはいうものの、中二になってからはあまり顔を合わせる機械が少なくなった。
小学校の時もいつも一緒のクラスで、ひろと三人でよく一緒に山の中を探検したりして遊んだもんだ。

「はぁ・・・・はぁ・・・・二人ともおはよう・・・・・つかれたよ～」

「ゆみも遅刻か？」
「寝坊したの！」
「後ろ乗れよ」
「おー！ありがと～♪」

そういうとゆみはひろの自転車の後ろに乗って走り出した。
それはまるでカップルみたいで、いつの間にか俺は、俺の中に知らない間に闘争本能が芽生え、俺はなにも考えずに一気に自転車をこいでゆみとひろの乗った自転車を追い越していった。

なにが正しくて正しくないのか、それは俺がもっとも知りたいことの一つだ。

俺はうすうす気がついていた、ゆみとひろが付き合っていることを。
そもそもこの歳でそういう関係になるということはどうかしてるんじゃないか、まぁたしかにひろは俺と違って運動神経や成績は神に近い、俺はいつもその後ろにいた。
というよりは、後ろのほうが好きだった。地味だし、目立たないし、俺はあまり目立つことは好きじゃない。

中学に入ってからはゆみとはあまり合わなくなった。俺が家に引きこもることが多かったからだ。
だからゆみはおれがオタクであることは恐らく知らないことであろう。

くだらないことを頭の隅に置き、深夜アニメの録画予約を失敗した

とこを考えながらいつの間にかおれは教室に来ていた。どうやらギリギリまにあったようだ。

教室に入った俺はカバンを横に置き、そのまま机の上に頭を乗せて着席した。
そのとたんにチャイムが鳴り、俺は窓の外を見ながらため息をついた。

「はぁ～・・・・・なんか面白いことでも起きねぇーかなぁー・・・・。」

プロローグ（後書き）

つづく

一、さよなら俺（前書き）

プロローグの続き。

一、さよなら俺

俺はこのくだらない日常に、いつしかマンネリを感じていた。俺は別に成績がいいわけでもないし、けして悪いわけでもないが、勉強は好きではない。

何かをしようとかそういう感じにはなるが、なかなか出来ないでいるのが今の現状だ。

テストもそうだ、みんなはちゃんと予習をやるのに、俺はやらない。つーかやりたくない。やる気がおこらない。

だからテスト前日なんかは気にせず遊びまくった。その結果母親や父からうるさく言われる始末。

俺はなぜ両親から怒られているのか、ワケがわからない。

何も悪いことをしてるわけでもないし、俺はただその日をいつもとかわらず過していただけだ。

それなのに何故怒られる必要があるのか、俺にはまったく理解できない。

だから俺はたびたび家出を繰り返した。

成績が悪いからって別に死ぬわけでもないし、そんなことはどうでもよかった。

そんなくだらないことを考えているうちに授業が始まった。

俺はいつもどおり黒板に向かい、教科書を広げ、立て膝をついてや

る気のなさそうな顔でホーッとその時を過した。
ふと横を見ると、ゆみが座っていたのでどうやらギリギリまにあったようだ。
ちなみにヒロは中学に上がってからはクラスが分かれた離れ離れになってしまっていた。唯一、ゆみだけが同じクラスになったが、俺は彼女とあまり話すことも少なくなった。

ここはいい所だ、ただボーっとしてるだけで卒業できるんだから。
義務教育に感謝だ。

将来のことなどいままで考えたこともなかった。とりあえず、俺は農家を継いで自由気ままに好きなことをして平穏に生涯を迎えたいと思っていたからだ。
こんなご時世だから中卒は何処も雇ってくれないそうだが、別に俺はかまわない。別に企業に就職するわけでもないのだから。

アメリカじゃ高校まで義務教育があるらしいけど、日本はまったく違う。
だが俺はそれをどうこう言うつもりもないし、言ったところで何がどう変わるってものでもない。

政治もそうだ、いろいろ・・・・。

授業中は勉強以外でいろいろと考えるとこが多い、あの子は一体どんなパンツをはいているのだろうか、あいつもしかしたら他の星からやってきた宇宙人じゃないのかとか。

そんなこんなで授業が終わり、俺は今日の時間割を見るために後ろの黒板を見た。

「よかった・・・今日は三時間で終わりか・・・・」

まだ次の授業までだいぶ時間があるので、暇つぶしにいつもの場所に行くことにした。
その俺がいつも行く場所とは、学校の屋上である。
ここは眺めもいいし、めったに人が来ることもない。いわば、俺だけの庭、と言ったところか。

俺はよく昼休みになると雨の日以外はここに来て金網に寄りかかりながら昼飯のパンを食ったりしていた。

扉を開けて屋上に入った俺はとりあえず横の壁に寄りかかって体育座りで座った。

「あぁーぁ・・・・・・家帰りてぇ・・・・・」

教室にずっといても特にすることもないし、気の合うやつもいない。
ゆみは隣のひろのクラスに行ってるし、三人の中で唯一、俺だけが取り残された。
俺もあいつらとは長い付き合いだが、最近はゆみとひろだけがいつも一緒にいることが多くなっているけど、俺は別に気にしていない。

またくだらんことを考えてしまっていた。気がつけば次のチャイムが鳴っていた。

「あーぁ、またかよ・・・・・」

俺はこのチャイムの音が嫌いだ、なぜならこの音を聞くたびに自然と体が疲れを感じるからだ。
いやいや思いながら俺は重たい足取りで教室へ向う。

そして俺はいつもどおりやる気のない面で黒板に向かい、ただボーっと二次元のアニメキャラのことを考えていた。
それから授業が終わり、俺は帰り支度をしていた。
教科書や落書きだらけのノートをカバンに入れている時、教室にひろが入ってきた。

「よー！ゆみ、サツキ！」
「よぉ」

俺は適当に返事を返した。

「ゆみ、このあと暇？」
「うん・・・特に用事はないけど」
「一緒に帰るか？今日ゆみ自転車じゃないだろ？」
「そうね、いいよ！」

やれやれ、こいつらほんとにどうかしてる。
これ以上ここにいると俺の頭がどうにかなってしまいそうだ、厨房

でこの関係はまるで、某エロゲーの一シーンを現実に見ているかのような感覚だ。

「あれ？サツキも帰るの？」
「あー。」

教室を出て後ろを振り返ると、ゆみはひろの額にキスしていた。
それを見た俺はドン引きした。マジかよこいつら・・・・ありえねぇ。

俺はくだらないものを見た。まさしく現実に起こったエロゲーのラストシーン。
童卒か？童卒したのか？と俺は聞きたい。ひろはゆみとやったのか？
またもやくだらん妄想に俺の息子が固くなった。

これはいかんと思い、俺はその場からすみやかに逃げ出した。まるで某アニメの脇役キャラのような気分だ。

それからどういうわけか、気が向いた俺は久々に部室に立ち寄ることにした。
俺の入っている部活「ＵＦＯ研究会」は、通称「オタクの溜まり場」は、部員のほとんどがオタクである。そして俺もその中の一人だ。

部員は俺を合わせて四名。部活としてはこの学校ではほぼ最小人数で活動している。
俺はこの部活の帰宅部員の一人で、本当にたまにしか気が向いたときにしか来ない。
部員の友達は俺を「不良オタク」と呼んでいるが、決してみんなが思い浮かべるような、不良、ではない。

ただのめんどくさがりなだけなのだ。

部室のドアを開けると、俺の友達の藤木と部長の上野先輩がいた。

「ようサツキ！久々に来たな！！」

「サツキ、まちかねたぞ・・・・。」

「部長なにやってるんっすか？」

「見ての通り、藤木とトレーディングカードでデュエルしていたんだ。どうだ？サツキもやるかね？」

「いいや・・・・俺は遠慮しとくよ・・・・・・」

俺はあまり気が進まなかったので、とりあえずカバンを椅子の上に置き、俺は隣の椅子に腰掛けて近くに置いてあった缶ジュースを一本手に取った。

「あー、やれやれ・・・・・おーいこれ誰の？飲んでいい？」

「ああ、それ俺のだけどいいよ」

「サンキュー藤木！」

そういうと俺は藤木の缶ジュースの栓を開けた。

「飲んでもいいがその代わり今度みどりちゃんの新刊俺のぶんも買ってくれよ」

「まかせとけ！」

俺はいっきに缶ジュースを飲み干して、空になった缶をまるで屋台の居酒屋にいるオヤジみたいに机の上に叩きつけるようにして置いた。

一気に飲んだせいか、息が詰ってはきそうな気分になった。俺は軽くゲップを出すと、そのまま机の上に頭を乗せて藤木と先輩のデュエルを見守った。

「はぁ～・・・・・・」

もうワケわかんねぇよ・・・・・・。

心の中でそう呟いや。

時間は流れ、校内に下校の放送が流れた。メガネをかけなおし俺はようやくその場から重たい腰を上げ、軽くため息をつくとカバンを持ち上げて背負った。

「よっこらせっと・・・・・」

「おーいサツキ～、一緒に帰ろうせ～！」

「なんだよ藤木・・・・」

藤木はクラスが違うが、一年の頃の合同授業で俺と気が合うということで知り合った。

「なぁサツキ、例のブツは手に入れたのか？」

「ああ、すげぇぞ～！！」

「マジか！！お前もうやったのか！？」
「たりめーだろ！アレをやらずにいられるか！」

アレとは、俺がつい最近、ネット通販で買ったエロゲーのことだ。
俺は前から予約していて俺も藤木もずっと待ち望んでいたものだった。
藤木には買ったらやらせると約束をしてしまったので、今日帰って早速二人でやる予定だ。

いろいろ話しながら駐輪場へ向い、藤木は自分の自転車を取りに別のところへ行った。
俺は自分の自転車を出して校門の前で止めると、藤木が来るのを待った。

「ったく・・・・遅せぇな・・・・」
「おまた～」

ふざけた顔で自転車を押しながら藤木がやってきた。相変わらず何を考えてんだが知ったもんじゃない。

「なにしてたんだよ？」
「鍵が壊れてて開けるのにてこずってた」
「しょうがねぇな・・・・今度直してやるからその代わり今度ジュースおごれよ」
「お安い御用さ！」

そして藤木は家が近くなので途中で別れ、俺はまた一人、自転車で

自宅へと向っていた。
だが、このときすでに俺の知らない間に何かが変わろうとしていた。

自宅に戻ると玄関の前に自転車を止め、家の中へ入った。どうやらじいちゃんはまだ田んぼから返ってないみたいだ。
俺はそのまま階段を上がって二階の自分の部屋に入った。
そこは俺だけの楽園、俺だけの世界が広がっていた。

「ただいまぁ～ふたばちゃーん♪」

俺はまず、一番お気に入りのキャラクター、メイド魔法少女ふたばちゃんのフィギュアに挨拶をすると、すぐにパソコンを開いて掲示板の書き込みを見た。

一通り見たら俺は制服を脱いで着替えると、エロゲーのディスクを持って階段を飛び降り、そのまま玄関を飛び出すと俺は自転車に飛び乗って家を飛び出した。
腕時計を確認するが、あいにく俺の時計は電池切れで動かない。

坂道を一気に下り、踏み切りを通過してそのままドリフトして角のコンビニの駐車場に入った。
なんとか間に合ったみたいだ、藤木もまだ来ていないようだ。

俺はスタンドを下ろして自転車を止めると、国道を挟んだ横断歩道の向こう側から藤木が手を振っていた。

「おーい！サツキー！！」

「来るのがおせぇぞ！！」

信号が青に変わり、俺は自転車をその場に置いて藤木の下へと横断歩道を渡ろうとしたその時、俺はまだ異変には気づいていなかった。

突然、俺のすぐ近くで車のタイヤのスキール音が聞こえ、横を見た次の瞬間、目の前が真っ暗になった。
真っ暗な世界の中で、藤木と知らない人たちの声が聞こえたが一体何が起きたのか分からない。
だって真っ暗なんだもの、どうすることもできない。

人の声にまぎれて、かすかにサイレンのようなものも聞こえたが、その後、すぐになにも聞こえなくなった。俺は一体どうなってしまったのだろうか、ひょっとして俺は死んだのか？

誰かが俺の近くでなにか言っているのが時々聞こえたが、また聞こえなくなった。
ここは一体何処なんだ・・・・・。

一、さよなら俺（後書き）

つづく

二、一夜で俺、美少女。（前書き）

憂鬱な日々を過していた中学生、津山サツキは交通事故に巻き込まれ、病院に搬送され・・・・・。

二、一夜で俺、美少女。

ここは何処だ？

俺は一体どうなったんだ？

まったく状況が分からない、あの時一体なにが起こったのか。
目を開けると、そこには知らない天上が広がっていた。

気がつくと、俺はベッドの上に寝かされて片腕には点滴が刺さっていた。
俺は何とか体を起こすが、体のあちこちが痛い。
メガネを取り周りを見回すと、他には誰もいないベッドが二つ並んでおり、窓の側の方に車椅子が一つ置かれていた。

「ここ・・・何処だ？病院か・・・・」

どうやら俺は病院にいることが分かったが、あの時の記憶が無く、頭が少し混乱した。
しばらく窓の外を見ながらボーっとしていると、病室に一人のナースのお姉さんが入ってきた。

「あら、目が覚めた？」
「えっ？」
「さっきお友達が心配して来てくれたわよ」
「えっ？藤木が・・・・」

「それとお家のほうに電話したんだけど、留守みたいなのよ」
「はぁ・・・・あの、俺は一体どうなったんですか！」
「あなた何も覚えてないの？」
「はっ・・・はい・・・・」
「あなた交差点で車に撥ねられたのよ？あと一分遅れていたら助からなかったって」
「そっそうだったんですか・・・・・・」

やっとすべてのつじつまが合った、どうやら俺はあの時車に轢かれて一度死にかけたみたいだ。
あの時頭の中で響いていた音は救急車のサイレンの音だった。

「奇跡的よ、あんな大量出血で右腕の複雑骨折だけで済んで・・・・・」
「そう・・・・なんですか・・・・・・」

俺はようやく安心した、この歳で仏になるなんざまっぴらゴメンだ。
どうやらお姉さんの話では、俺は回復が早いらしいのですぐにでも退院できるらしいが、しばらくは学校を休むことになった。

内心、学校を正当な理由で休めるので嬉しい。

病院を出ると、正面玄関の前にじいちゃんが軽トラで迎えに来てくれていた。
その後、俺は軽トラに揺られながら田んぼの道を通って自宅に帰りついた。

だが、俺は家に帰ってからあることに気づいた。

学校は腕の骨折ぐらいでは休めないということだった・・・・・。
俺は一気に落胆し、居間の畳の上にうつぶせになって深くため息をついた。

「はぁ～・・・・最悪や・・・・・事故るは、学校は休めないわ・・・・・ついてねぇ・・・・・。」

俺はこの不幸続き（半分気持ちの問題）があって、今後も何かが起こるのではと予感した。
だがそれもまもなく現実に起こりうるとは、まだこのときは思ってもみなかった。

「はぁ～・・・やめたやめた！」

俺は体を起こし、そのまま自分の部屋に戻った。
そして医者から渡された薬を袋から出して手に取った。

「ん・・・なんだこれ？」

見た目は普通の白い風邪薬のような感じだったが、薬のパッケージには「極秘」と書かれたハンコが押されていた。
俺は不思議に思ったが、あまり気にせず薬を出してそのまま飲みこんだ。

なんか体がだるいので、今日はもうこのまま寝ることにしよう。
俺はそのまま布団の上にうつぶせになって目を閉じた。

まさかこんなことになろうとは、俺はまだこのときは思ってもみなった。

知らないうちにだんだんと眠気が襲い、俺はすでに布団に半分、頭を突っ込んで熟睡している状態だった。
すると突然、目覚まし時計のアラームの音がうるさく鳴り出した。
俺は眠たい目をうっすらと開け、目覚まし時計のスイッチを切った。

「んむ・・・・うるざい・・・・。」

流石に遅刻するわけにはいかないと、頭では分かっていても体が言うことを利かない。
これが人の性という奴だ。

メガネをとり俺は重たい体をなんとか起こし、匍匐前進で部屋を出ると、階段横の廊下に置かれたダンボール箱をつかんで杖代わりに立ち上がった。
普通の人なら、まずありえないだらしない光景だ、俺自身も自覚していること。

眠たい目をこすりながらあくびをこいて一階の洗面所に向う俺、流石に休み明け前日に事故って最悪な目覚めの朝である。

洗面台横のコップを手に取り、水を入れてうがいをした。
まるで、今にも胃の中のもの全て吐きそうなくらいのうがい、そして洗面台の鏡に映るいつもの顔。
顔？
って、なんか知らない人が鏡の前にいたようきがした。

俺は鏡をもう一度覗き込み、その姿に思わず持っていたコップが手から落ちた。

これは・・・・・一体どういうことだ？
俺はまだ寝ぼけているのか？

鏡の前にいるのは、俺と同じくらいの女の子だった。
だが、その鏡の中の少女は俺とまったく同じ動き、表情をした。

「ちょ・・・・・え？えぇ？？・・・・・こっこれってまさか・・・・。」

いや、ありえない！！この歳になって幻覚を見るなど、第一俺はそんなことに心あたりはないし、ネトゲは最近は深夜は控えてるし、これは一体どうなっているんだ？

もしや俺はまだ夢を見ているのか？そうだ！きっとそうだ！アニメでよくある「夢オチ」ってやつだ！
きっとそうに違いない！！

「そっそうさ！・・・・こっこれは夢に違いない！って、え！？」

声がおかしい、なんか高くなっているような・・・・・・
俺は恐る恐る自分のほっぺたをつねると・・・・・痛い。

これは夢なんかじゃない、鏡の前の少女は俺人身だ！
俺は女になってしまったのか！？

「夢・・・・・じゃない・・・・・・」

俺は頭の中が真っ白になった、あいた口が塞がらない。
少し出た胸、長い髪、そして股間に謎の違和感が・・・・・・。

「はッ！まッまさか！！」

俺は慌ててトイレに駆け込み、ズボンを下ろして見ると・・・・・・
・無い！
アレが無い！男なら必ずしも誰もが生まれながらにもっているアレが！！

俺は思わず悲鳴を上げてトイレから飛び出し、ケツ丸出しで廊下にずっこけた。

「痛て・・・・・・やっぱり・・・・夢じゃない！」

スレ落ちたメガネをあわてて直し、俺はひとまず部屋に逃げるように戻り襖につっかえ棒をして部屋には誰も入ってこられないようにした。
俺は布団を被り、混乱する頭の中を落ち着かせるためにじっとした。

「どうしようどうしようどうしよう！！？？」

落ち着くどころか、むしろ混乱する一方。

「そうだ、今日学校だった・・・・・・」

そう、今日は学校がある日だった。でもこの姿で学校に行けるわけがない。

俺は再び洗面台の鏡の前に立ち、改めて自分の姿を見た。

「これ・・・・・ほんとに俺か？」

しかし、見るに見るかぎりなんてかわいい子なんだ、おまけに骨折の怪我まですっかり治ってる。

一事、これが自分のだということを忘れてしまう、自分で自分にほれるってどういうことだ・・・・。

「それにしても、えらくかわいいな・・・・・胸がなんか微妙に出てるし・・・・・・髪長ッ」

俺は再び恐る恐るパンツの中を除くと、思わず鼻血が噴出し、ぶっ倒れた。

「ぶふぁッ！！」

さすが俺、あやうく自滅するところだったぜ・・・・・。

しかたない、今日はとりあえず学校に電話して仮病ということで休むか。

他にそれしか方法がない、

俺はとりあえず冷蔵庫から魚肉ソーセージを十本取り出し、さっさと部屋に逃げ帰った。
じいちゃんがいない時間でよかった、俺がまさか女になったと知ったら驚いて腰を抜かすだろうな。

布団を被り、口に魚肉ソーセージを銜えてノートＰＣを広げた。
とにかく俺は一刻も早くもとの姿に戻るため、ネットの検索で性転換についてグッた。
だが、何度やってもスペースをあけてやってみてもまったく違う内容のリンクしか引っかからない・・・・当たり前か・・・・・。

あきらめたらそこで終わりだ、俺は修造の言葉を思い出していつも行く掲示板に書き込んだ。

「いちかばちかやってみるか・・・・・」
「～もしある朝、起きて自分が女になってたらどうする？～」

するとすぐに返事が来た。

「～どうしたんだ急に？～」

俺はすがるような気持ちで返事をした。

「～いや、そういう夢を見たんだ。でももし実際にそんなことが起こったらどうするかなっと思ってな・・・・～」

「～夢オチじゃなくて?俺だったらまずはなぜ女になったか、見に覚えがないかまず確かめるな・・・・～」

「なるほどー・・・・・ん！」

その時、俺はあることを思い出した。それはあの病院からもらった薬であった。

そういえば、あの薬、パッケージに「極秘」って書いてあったような・・・・・。

俺はゴミ箱から空の薬のパッケージを取り出して箱を確認した。

「まさか・・・・・いや、そんなこと・・・・・まっまさかな・・・・ハハッ」

だが、それが俺のみに現実に起きてることだった、だからどうすることもできない。

俺はため息をついて枕に顔をうずめた。

「あぁーもうッ!!俺はどうすればいいんだぁーッ!!」

悩んでいるうちに突然、下の電話のベルが鳴った。

いそいで俺は布団を被りながら階段を降りて下駄箱の上で鳴る電話の受話器を取った。

「はい、もしもし・・・・」
「～もしもし、津山くんはいますか？～」
「えッ！せっ先生・・・・！」
「～お前津山か？今日は学校だけど大丈夫か？交差点でトラックに撥ねられたんだってな～」
「はッ・・・ええなんとか・・・・」
「～ん？津山、お前なんか声が変だぞ？～」
「えッ！そっそうですか・・・・・じっじつはあのあと風邪引いちゃって・・・・」
「～そうか・・・・今日はこれから来れそうか？～」
「すいません先生・・・・多分無理っす」
「～そうか、分かった。お大事にな～」
「はぁーい・・・・では」

受話器を戻し、俺はほっと一安心した。
とりあえず学校は二日ぐらいまではなんとか休めるが、問題は後である。
とにかく、この間に一刻も早く俺は男に戻らねば非常にまずいことになる。それだけは絶対に避けたい！

だが、どやって元に戻る・・・・方法など知らないし・・・・・・。

「そうだッ！病院！」

俺は事故ったとき運ばれた病院へ行けばなにか分かるかもしれないと思い、俺はサングラスをかけて玄関を出た。

辺りに人がいないことを確認した俺は、自転車に乗ってそのまま家を飛び出して病院へと向った。
自宅から病院のある隣町まではかなりの距離があったが、俺は全力でペダルをこいだ。

山道を自転車で登り、中間まで上ったところでバテた。
横っ腹を押さえながら自転車を押して前に進んだ。おまけに息も絶え絶え。

「ハァ・・・・・ハァ・・・・体力は・・・・全然変わらねぇーのな・・・・・・」

流石は俺、姿は変わっても体力は変わらず・・・・これはこれで変わらなくてよかったのか？

二、一夜で俺、美少女。（後書き）

つづく

三、決意。（前書き）

何処にでもいる平凡な中学生、津山サツキはある朝起きたらどえらい美少女になっていた。
元に戻る方法を探すため、サツキは病院へ行くが・・・。

三、決意。

なんとか病院の前に到着、だがここにきて俺はどうすればいいんだ？
とりあえず俺は受付を済ませてロビーのベンチに座って自分の足元を見つめた。
ビンボーゆすりが止まらない。息が荒くなる。

「（いったいどうなってんだ俺は・・・・つーか本当にあの薬のせいなのか？）」

俺は半信半疑だった、だが他に思い当たるふしが無い。
うつむいて貧乏ゆすりをしていると、俺のまえに白衣を着た医者の男が現れ、突然俺を呼んだ。

「津山・・・・くん？」
「はい？」
「ちょっと一緒に来てくれるかな・・・・」
「あッ・・・・はい！」

ベンチから重い腰をあげ、俺は医者に呼ばれ診察室の奥の部屋に通された。

「そこに座って」
「あっはい・・・・・・あッあの・・・・・」
「姿が変わってしまったんだね」

俺がまだ何も言い出さないうちに医者は俺のことを知っていて驚いた。
まさかこの姿で中身は男だとは誰も気がつくはずがない。

「えッ・・・どうしてそのことを・・・・まだ誰にも言ってないのに！」
「実は、言いにくいことなんだが・・・・薬剤師が間違えてまだ研究中のサンプルの薬をどういうわけだか誤って君の薬と取り替えてしまったんだ！」
「えぇッ！じゃ・・・・じゃあ俺がこうなったのってやっぱりあの薬が原因なんですか！」
「ああ、実はあの薬は新型ウイルスの抑制を目的に開発が進んでいたんだが、どういうわけか研究の過程で性別を変えてしまう効果が出てしまったんだ・・・・・。」

医者は俺に頭を下げた、だが頭を下げられても困る。
俺は一刻も早くもとの姿に戻りたいからだ。

困惑する中、俺はどうすればいいのかわからなかった。

「そっそれで、俺の体は元に戻るんですか？」
「そ・・・っそれが実は、まだ方法が分からないんだ」
「えぇ！！ちょ・・・・ちょっと待ってくださいよ！！それじゃあ俺はずっとこのままこの姿で余生を送らなきゃいけないってことですか！！？」
「本当にすまない！でももしかしたら一つだけ方法があるんだが・・・・」
「えッ！？」

俺はその言葉に反応した、１００％ではないが、もしかしたら一時的ではあるが元に戻ることが出来るという。

一気に俺の希望が戻った。

「そっそれって一体どんな方法なんですか？」

「それは・・・・強い衝撃を与えればもしかしたら元の姿に戻れるかもしれないんだ」

「強い衝撃を与えると・・・・？それってどのくらいの」

「君が交通事故にあったときと同じような衝撃だよ・・・・もちろん危険は伴うけどね」

「そ・・・そんな・・・」

再び奈落の底へご案内、もう死ねる。

俺がまたトラックにでも轢かれれば一時的に元に戻る？一時的じゃダメだ！

頭の中の考えが覆され、俺はしばらく言葉が出なかった。

重たい足取りで診察室を出る俺を医者は慌てて呼び止めた。

「ああッちょっとまって！！方法が分かったら真っ先に君に伝えるよ、あの薬は元々抗ウイルス剤だからもしかしたら近いうちに元に戻るよ」

俺は医者に軽くお辞儀を済ませ、病院を後にした。

帰り道、自転車に乗りながら俺は考えた。これからどう過すべきか、

もちろんこのままずっと永久に学校へ行かないわけにもいかない。
でもだからといってこの姿で行けば間違いなくパニックが起こるし、俺自身にも危険が及ぶかもしれない。

気が晴れない、俺は深くため息をついた。
ただ一つだけわかったのは、腕の骨折の怪我のことだ。これはどうやら医者の話によると薬の副作用で直ったらしいが、これはこれでよかった。

「はぁ～・・・・・まっ、なんとかなるか、そのうち・・・・」

家に到着し、俺はあわてて家の門の陰に隠れた。
縁側でじいしゃんかお茶を飲んでいたのだ。畑仕事から戻ってきたらしい。
どうしよう、この姿で家に入ると流石にじいちゃんも気づくだろうな。しかたないので裏口から家に入ることにした。

自転車を止めて自宅の裏へ回り、塀の前に置いてあるドラム缶の上に上り、そこから塀を乗り越えて家の裏庭に入ることが出来た。

「よいしょっと！よーし、なんとか進入成功～」

俺は物音を立てないように静かに裏の勝手口から家の中に入り込み、ドアを静かに閉めて冷蔵庫からまた魚肉ソーセージを二三本取って静かに階段を上がって部屋に戻った。
部屋の戸につっかえ棒をして部屋には誰も入ってこれないようにし、

俺は布団にもぐりこんでノートＰＣを広げた。

気が晴れないのでネトゲを始めることにしたが、いつもとは感じが違う。変な感じだ。

俺が今やってるのはこの間買ったばかりのエロゲー、やり始めて数十分股間が変な感じ。とっさに俺はＰＣを閉じて布団を被った。

「なッ・・・・なんなんだ?股間が変な感じだ・・・・・・」

まさか、俺は姿は変わってもやっぱり中身は男、恐らくこれは前の俺でいうなら、勃起、というやつなのか?

少女になってからまさかこんな体験をするとは思わなかたので再び頭の中が混乱した。

これは受け入れていいのか?だが俺の中での変なプライドとの葛藤。

俺は布団の中で抱き枕に抱きついてゴロゴロ暴れた。

つまり、女子が男子をいやらしい目で見てるのと同じ感覚を俺は身をもって味わったことになる。

もし俺が今、街中を歩いていてそれで変な野郎にナンパでもされたらたまったモンじゃない!

俺に絡んでくる男は全て、カマ野郎、ＢＬ、のように見えてしまうからだ。

男に告白されるくらいなら女に告白してその後すぐに樹海にでも行って死んだほうがマシだ!

ダメだ、これ以上考えると俺の頭がどうかしてしまう。

どうして俺はこんなくだらんことばかりよく真剣に考えるのか、誰かに教えてほしい。
こうなった次第、他にどうしようもない。

「決めたぜ！俺は・・・・百合に生きるぜッ！！」

心の中でもそう誓った。もうどうにでもなれと思い、俺は魚肉ソーセージをまとめてかじって食べた。

「美味い・・・・・。」

ちなみに俺の好きな食べ物はチーズ鱈とカステラ、この組み合わせは恐らく俺の中では最強。

三、決意。（後書き）

つづく

四、それなりに俺ピンチ！！（前書き）

美少女になってからいろいろと苦労が絶えない、

四、それなりに俺ピンチ！！

困った、非常に困ったことになった。
両親はまだ帰って来ない、爺ちゃんは畑仕事で朝が早いのでもう寝てるが、俺は困ったことになった。

それは、お風呂、の問題であった・・・・。

俺は今、この姿で風呂に入るとなると間違いなく俺は湯船のお湯を真っ赤に染めてしまいそうな気がした。
つーか貧血でぶっ倒れるかもしれない！俺は脱衣所でなかなか服を脱げないで立ち尽くしていた。

「どうしよう・・・・この格好のまま入ったら、間違いなく風呂場は血に染まる・・・・でもだからと言って入らないわけにもなぁ～・・・・・」

恐る恐る俺は上を向きながら慎重にズボンとパンツを一緒に脱いだ。
その次に一気に上も脱いで裸になった。
俺は洗面所の鏡を見ないように、ただ天井を見上げながらそーっと風呂場に入った。

「よし・・・っと、うあッ！！」

だが案の定、俺はそのおかげで下に目が行かずに置いてあった石鹸を踏んでずっこけ、湯船に頭をぶつけて悶絶した。

「いってぇぇぇーーーッ！！！」

俺の絶叫はまるで町全体に響き渡るかのような感じだった。
結局その日は天井を見上げながらシャワーだけ浴びてさっさと着替えて部屋に戻った。
頭には大きなたんこぶができて今も鈍い痛みが続いた。
いろいろ疲れた俺は布団の上にうつぶせになり、布団に顔をうずめてそのまま眠りについた。

そして翌朝、今日は珍しくいつもより早い時間に目が覚めてしまった。
気がつくと俺はありえない姿勢で眠っていた。

布団に包まって体半分が押し入れに入っていたのだ。
流石に自分自身でもかなり寝返りまくったことがよく分かった。そろそろ起きようと思ったが布団にはさまれ、身動きが取れない状態だった。

「うあッ・・・・・やべぇ・・・・動けねぇ！くッ」

かろうじて足だけは動けるみたいだったのでなんとか両足ではいずるように押入れから脱出することに成功した。
だが寝転がった状態では何も出来ない、とりあえずこの布団から脱出せねば。
とりあえず、転がって移動することは出来るので、転がって部屋から何とか廊下に出る事が出来た。

「くッ！なんとか出られたぜ・・・・・」

だがこれで全てが解決したわけじゃない、まだ俺の体はほとんど両足以外は布団に包まれて動かない。

俺は足で床を押すように壁に這い蹲るようにしてなんとか立ち上がることが出来た。だが布団の重みでバランスを崩した俺はそのまま階段の下へとゴロゴロ転がりながら落ちてしまった。

「うあああああー！！」

激しい物音とともに俺はそのまま玄関の下駄箱横の棚に突っ込んだ。棚の上の花瓶は床に落ちて割れてしまい、オマケに俺は昨日浴槽の淵にぶつけたたんこぶに当たり、悶絶した。

「いってぇぇー！！もう最悪やクソッタレ！！」

でもおかげで体に巻きついていた布団は取れてやっと体は自由になった。

だが昨日浴槽にぶつけてできたたんこぶに当たってさらに頭には鈍い痛みが倍になった。

頭に軽く氷の入った袋を当てながら居間の戸を開けると爺ちゃんがテレビを見ながら飯を食っていて驚いた。

俺はいつもより早い時間に起きたので実感がなく、驚くのもしかたない。

そっと見つからないように俺は頭を押さえながらそっと静かに階段を上がって自分の部屋に戻った。

「はぁ～、爺ちゃんいるのを忘れてたぜ・・・・・・」

しかたない。爺ちゃんが仕事に行くまで静かにインしてるか。

俺はとりあえず掲示板を見たあと、気晴らしに格ゲーをやっているとメールが一件届いてるのが分かった。

どうやら藤木からしい、どうせまたくだらんことでも書いてるんだろうな・・・・。

そんなことを思いながら受信ボックスを開くと、はやり俺の予感は的中した。

「やっぱり・・・・・」

軽くため息が出た、とりあえず開いて読んでみた。

サツキ～、無事かー？今度の１６日の午前中ぐらいにお前んちにいって例のエロゲ貸してもらうぞ！ｂｙ藤木

「最悪だーッ！！」

俺は思わず枕に頭突きをした、たんこぶがまだ痛くて踏んだり蹴ったりな気分だ。

今度の１６日に藤木がうちに来る！これは非常に不味い！！

とりあえずこの場はなんとか言い訳を考えて乗り過ごさなければ・・・・だがどういえばいいのやら・・・・。

「どうしよ・・・・・アイツ俺を殺す気か！！」

だが現在藤木は俺が美少女になったことなど知る由もないだろうに、まさかアイツに俺の姿がバレれでもしたら、それを考えると猛烈に頭の中が変な感じになる。

たしか藤木がウチに来るのは１６日のはす、俺はふとモニター下の端っこの日付を見て思わず頭の中が真っ白になった。

「１６日って今日じゃねーかぁーッ！！！」

しかも午前中に来るとかぬかしやがる、もう死ねる。

部屋の窓の外をカーテンの隙間から見るが、まだ玄関先には藤木の姿はない。

時計を見ると時間は７時を回っていた。

「やべぇな・・・本来ならもう登校時間だし、そろそろアイツが現れてもおかしくない」

時計を見ながら言っていると、突然下の方から藤木の声が聞こえてきた。

「おーい！！サツキー！！見舞いに来てやったぞー！！」

「やべぇッ！！アイツもうきやがった！！」

カーテンの隙間から下をのぞくと、藤木が俺の部屋の方を向いてい

た。
俺は思わず読みかけの漫画雑誌を片手に部屋を飛び出し、裏の窓から一階の瓦屋根の上に降りて裏から逃げることにした。
ここからはよく小学校のころ屋根の上に上って遊んだり花火を眺めたりしていたから屋根上りは慣れていた。

一向に姿を見せない俺を心配したのか、藤木が大声て俺の名前を呼んでいた。
もううるさいな！はよ学校行けや！

だが行く気配はない、藤木に気づいたじいちゃんが縁側に出来てきた。

「あっサツキのおじいさん！」
「おお、君はサツキのお友達かい、あいにくサツキは昨日から部屋に閉じこもって姿見てないねぇ」
「そうですか～、あのお邪魔してもいいですか？」

藤木が家に上がってきた、今世紀最大のピンチ！！

「あの野郎・・・クソッ！」

俺は急いでいったん自分の部屋に戻り、とりあえず窓からベランダに出た。
下から階段を上がる足音が聞こえてきてヤバイと感じ、俺はベランダのサンダルを履いてエアコンの室外機の上に上がり、いそいでそこから雨樋をつかんで俺の部屋の屋根の上に上がった。

「おーいサツキ～、見舞えに来て・・・・ってあれ?」

部屋の戸を開けた藤木だったがそこには誰も居らず、ベランダの窓が開いていて風でカーテンがなびいていた。

四、それなりに俺ピンチ！！（後書き）

つづく

五、秘密基地？（前書き）

俺は病院から貰った薬を飲み、その翌日俺は美少女になってしまった。

ある日、医者から電話があり、東京に俺に合わせたい人がいるというのだが・・・・・・。

五、秘密基地？

俺が美少女になってあれからもう三週間、流石にそろそろ学校に顔を出さなければならない頃だが、今この姿で行くわけにもいかず、俺は毎日その日暮らしの自堕落な日常を送っていた。

「サツキ今日も休み？」
「うん・・・そうみたい・・・サツキこの前交通事故で一日入院してから家から一歩も出てないみたいらしいのよ」
「どうしたんだろ・・・」
「私ちょっと心配だな・・・サツキ、どうしたんだろう・・・。」

いつもの朝の教室、空きの俺の机を見ながら心配そうにひろとゆみが話していた。
一方その頃、俺はといえば相変わらず、部屋の中で布団に繰るまいヨダレをたらしながら熟睡。
分かってはいるものの、この姿で学校に行くことは出来ない、だから俺は引きこもり人生を覚悟した。

だが、流石にずっと家族（じいちゃん）と顔を合わせないワケにもいかない。近頃は心配なのか、二階に上がってくるのでそのたび俺は押入れの中へと非難、中で丸一日うまいん棒片手にノートＰＣを広げて過す、というのがあたりまえの毎日になってきてしまってる。

この生活がずっと死ぬまで続くのか、それを考えると憂鬱な気分に

なってくる。
暗い押入れの中、パソコンのモニターの明かりだけが俺を明るく照らしてくれた。

あまりの不甲斐なさに軽くため息が出た、でももともと俺はこんな感じだったっけ？

そんなことを考えていると、下で電話のベルが鳴っていた。
大体検討はつく、学校からの電話だろう・・・。

だが、その電話はいつまでたっても切れない、もう俺のことは忘れてくれ！と言いたいところだが出ないワケにもいかない。

「はいはい・・・ったく出りゃいいんだろ！」

俺は押入れから出て、階段を駆け下りていやいやながらも受話器を取った。

「はい・・・もしもし、」
「サツキくんいますか？」
「えッ？あ・・・・」

だが電話の主は学校の先生とは違った、声は病院にいたあの医者の声だった。
俺は力ない声で返事をした。

「はい・・・俺です・・・・」
「よかったー、今家には君一人だけかい?」
「えッ?えぇ・・・まぁ、そうですが・・・・」
「いきなり急ですまないが実は君に合わせたい人がいるんだ、こっちまで来てくれるかな?」
「えッ!今からですか?」

特にこれといって他にすることがなかった俺は病院にいくとこにした。
医者が言ってたけど、俺に合わせたい人って一体誰なんだろう・・・?

もしかして元に戻る方法が分かったのか?俺の頭の中で勝手に話が進んでいった。
俺はとりあえず爺ちゃんがいないうちに急いで裏口からサンダルを履いて出ると、壁をよじ登って裏に止めたままの自転車に乗って家を後にし、再び隣町の病院へと向った。

だが病院へ行く途中、俺はふと学校の方へ立ち寄った。
校門の前で自転車を止め、校舎の方を見た。今頃はみんな退屈な授業を受けてるんだろうな・・・・。

俺はなんだか、あの退屈な教室が恋しくなった。あの頃がなつかしい・・・・。

なんだかまた自分で勝手に憂鬱な気分になっていた、俺は何も考えず、逃げるようにその場を後にした。ともかく今は病院へ行かねば・・・・。

俺は自転車をかっ飛ばし、いっきに山道を走りぬけて病院に着いた。
駐輪所に自転車を止めると、入り口の前であの医者が俺を待っていた。

「やぁ、サツキくん！よかったよ来てくれて」
「あの・・・俺に会わせたい人って誰ですか・・・？」
「ああ、今からその人の所にいくんだ、さ、私の車に乗って」
「は・・・はぁ・・・」

俺はそのまま医者の運転する車に乗り、そのまま高速道路に乗って東京へと連れて行かれた。

この医者、まさかとは思うが俺をこんなところまで連れてきて何をするつもりだ？
まさかセクハラ的な行為を俺にする気じゃ・・・・それを考えると、体に鳥肌が立ち吐き気が襲うようだった。

うえぇ・・・最悪や！このカマ野郎！俺が女になっているのをいいことに！

勝手な妄想を膨らませていると、突然医者が俺に話しかけてきた。

「そういえば、まだ名前言ってなかったね」
「えッ？」
「私は外科医の根岸宗一、まぁ外科医って言ってもそれほどいい仕事じゃないんだけどね」
「は・・・はぁ、」

こいつやっぱ違ったか、そんなわけなかった、俺は考えすぎだったな。

近頃の俺はこの姿になってからかなり思い込み激しくなってるようだ、流石にこの根岸って医者だってもともと俺が男だってことは知ってるし・・・・。

俺は安心してふと窓の方を向いて流れる景色を眺めた。

窓ガラスには俺の顔が反射して映った、俺はいまだに自分が美少女になってしまったことが信じられない、だが現に俺は窓に映った自分の顔が俺とまったく同じ表情、動きをする。

いつも眠たそうな、やる気のない感じの表情はまさしく俺そのものだ。

もういいや、俺は一生このままか、まぁあのアベックどもにばれなければ俺はもうどうなろうがかまわない。もうホントにどうでもいい。

流れる風景を見つめながら、どういうことだかふと俺は小学校の時のばあちゃんが死んだときのことを思い出していた。

俺はその時まだ小学校四年生ぐらいだったか、もともとうちのばあちゃんは寝たきりで隣町のあの病院に入院していた。夏の終りごろだったか、突然病院から電話があって俺と爺ちゃんと母さんは爺ちゃんの運転する車で病院に向った。

病室につく頃、すでにばあちゃんの容体は急変し、鼻にチューブが通されていた。

それを見た俺は当時まだ子供だったが、ただその様子を何も言わず思わず見守ることしか出来ないでいた。

当たり前だが病院なんかに来てもどうしようもないと内心、思っていたが俺のばあちゃんが今危険な状態なのに俺ときたら、こういう考え方に俺は自己嫌悪になった。

それからまもなくして俺のばあちゃんは亡くなった。その時俺は一人で病室外のロビーで近くの自販機で買った紙パックのイチゴ牛乳をうつむきながら飲んでいた。

なんで俺こんなこと思い出してんだ?

そんなこんなで目的地に到着、車を降りると地元では見たことのないでっかいビル、俺はぽかんと半口を開けてそのビルを見上げていた。

「でけぇ・・・・・」
「さっ、こっちだ!」
「うぇ?あっはい!」

俺は頼りなさそうな足取りで医者の後ろについて歩き、中央玄関からビルの中に入った。
広いロビーの受付横のゲートに来ると、医者は警備員みたいな人に証明書みたいなのを見せてそのまま中へと通過した。

「ずいぶんと警備が厳重なんすね・・・・・」
「ああ、ここは政府の特別研究機関で中には政府関係しか知らない研究や実験を行っている施設なんだ」
「はぁー・・・・・(なんか○イオハザードの世界みたい・・・)」

廊下をしばらく歩いていると、目の前にずいぶんと厳重そうな大きな扉が現れた。
扉には「関係者以外立ち入り禁止」と書かれておりその横にはパスワードの入力する電子ロックシステムの機械があった。

まるで秘密基地にでもいるかのような感じだ。これはすごい！
医者は扉の横にＩＤカードを差込み、パスワードを入力するとロックが解除されて扉が開いた。

扉の先にはこれまた長い廊下が続いており、俺と医者はその先へと進んだ。

五、秘密基地？（後書き）

はたしてこの秘密基地？の実態は明らかに！

つづく

六、遠方の同士（前書き）

病院から電話があり、医者に連れてこられたのは東京、政府の地下秘密研究施設。そこにいたのは・・・・・。

六、遠方の同士

長い廊下を歩いていると、横の扉に放射能のあぶなっかしいマークが貼ってあった。
相当ヤバイものを研究しているんだなぁ・・・・・・。

なんだかだんだん不安になってきた、やっぱり変だぞ！この医者まさか研究のためとか言って俺を実験台にしてモルモットのように扱うつもりじゃ・・・・・・。

「こっちだ」
「え」

しばらく歩くと、突き当たりにあるエレベーターに乗り込みそこから一気に地下１３回まで降りてきた。一方で俺は少し真っ青になっていた。
そしてエレベーターを降り、再び廊下を歩くと目の前にこれまたごっつい扉が現れた。

「これまたでっけぇ扉～！」

扉の横にはなにやらカメラらしきものが付いていた、すると医者がカメラの前に立って、下にカードを差込み、マイクを握った。
俺はその後ろで戸惑うような表情を浮かべて見ていた。

「藤崎さん？」

「～はーい！あら根岸君！～」
「例の子、連れてきたんだけど」
「～はい分かりました、今開けますね～」

するとすぐに扉のロックが解除され、扉はシャッターのように開いた。

「よーし、さっこっちだ！」
「えッえぇ？」

俺は言われるがままに中に入った、なにか俺はこの時点で不安とあまり周りを見ず、医者の背中にぴったり引っ付いて歩いた。

なんかだんだんもうなにもかもがめんどいなぁ・・・・・

「ここだ。」
「え？」

俺と医者がある部屋に入ると、中には大きな実験装置みたいなものがあり、そこには白衣を着た眼鏡の女の人がいた。

「よう藤崎！」
「ああ根岸君、誰にも見られなかった？」
「警備員には見られたけどね」
「そう、それならいいわ・・・・あれ、もしかしてそれが例の？」

白衣の女の人は俺に気づき、俺はもう何がなんだかワケが分からな

くなった。
次の瞬間、その女の人は俺に抱きついた。

「キャーうそ！カワイイ！！」
「！！？？」

いきなりの出来事に俺は真っ赤になった。
まさか俺みたいなキモオタにかわいいとか言って抱きついてきた。
こんな体験は初めてだ。

「あなた名前は？」
「へッ？」

キラキラした眼差しで俺を見つめる、この人ひょっとして百合（ロリ）属性でもあるのか？

「つ・・・・津山サツキ・・・です・・・・・」
「キャー♪サツキちゃーん！！」
「うあぁー！！」

今度は胸の谷間に押し込まれ、俺ピンチ！
それお見かねた医者が止めに入り、なんとか助かった。あと一秒遅れていれば俺はまた再び鼻血ブーになりそうだった。

「あ、あの・・・・・根岸さん・・・・俺に会わせたい人ってこの人のことですか？」

「ああ、そうだった！藤崎、アキラは今どこに？」
「隣の部屋です、いまつれてきますね！」

アキラ？って誰だ・・・・？それが俺に会いたいっていう人なのか？
つーか俺はこれからどうすればいいんだ？なんか疲れるなぁ～・・・・それにあの眼鏡の藤崎って人も・・・・。

そんなことを考えていると扉が開き、藤崎さんともう一人車椅子に乗ったこれまたカワイイ少女が出てきた。

「紹介しよう、君と同じ元は男の子の松下アキラくんだ。」
「どっ・・・・どうも始めまして・・・・・松下アキラです・・・・。」

恥ずかしそうにその少女はそう答えた。
えっ？

ええぇぇえええええーッ！！？？
俺は一気に頭の中が混乱した、こんなカワイイ少女が男だと！？信じられない・・・・。
これは一体どういうことだ？ますますワケがわからなくなった。

「アキラ、紹介しよう。この子が津山サツキくん」
「へ？あッあぁ・・・・どうも、つ津山です・・・・・」

俺はあせりながらそういうと、アキラは俺の手を両手でつかんで少し目に涙を浮かべた。

「あなたがサツキくんですか！よかった～！会いたかったですよ！！」
「えッえぇ・・・ああ！それはどうも・・・・・」
「サツキくん」
「あはい？」
「君に一つ頼みがあるんだが、いいかい？」
「なっなんすか？俺に出来ることがあったら」
「うん、これは君にしかできないことなんだが、見ての通りアキラはこんな体だから今まで友達がいなかったんだ。サツキくん、アキラと友達になってくれないか？」

するとアキラが俺のシャツの袖をつかんで、恥ずかしそうに俺に話した。

「あっ・・・あの・・・津山くん・・・・・もしよければ、その・・・・僕と友達になってくれないかな？」
「えっ？」

恥ずかしそうな顔で俺を見つめる、そんな顔で見つめられたんじゃどうしようもない。
俺はカワイイ子には弱い、だがこの子だって元は俺と同じ男！
でもそんなことはどうでもいい、俺と同じような目にあった同士が遠く離れたこの地にいたのだから、別に断る理由もない。
むしろ、俺自身も心細かった。

「ああ、いいよ！」
「ホントですか！！ありがとうございます！津山くん！」
「あっいや、サツキでいいよ！」
「はい！サツキくん！宜しくお願いします！」

案外礼儀正しい子なんだなぁ、おまけにカワイイし・・・・・って俺は一体何を考えているんだ！！
相手は俺と同じ中身は男だぞ！ダメだ！余計なことは考えるな！俺だって同じ立場なんだから。

アキラも俺を見て顔を少し赤くしてるということはコイツも同様に俺に一目ぼれっていうことか？
そうなのか？いや・・・普通に考えてもそれ以外に思いつかない・・・。

複雑だ、すごく複雑な気持ちだ、これ以上考えると俺の頭がどうかしてしまう。

だがそう言いつつも俺も現実にそいつに赤くなっている。まぁいいか、こうなった次第自分に少しぐらいは正直になってみても・・・・・。

って違うーッ！！

こうして俺とアキラは友達になった、多分コイツも俺と同じようなことを考えているに違いないが、それはそれでまぁいいか！
それから俺はアキラといろいろ話した。

「なぁアキラ、どうしてお前車椅子なんだ？足が悪いのか？」
「うんまぁね・・・僕、生まれつき体があまり丈夫じゃないんだ。」
椅子の背もたれを前にして体を寄りかかって話す俺にアキラはどこか寂しそうに答えた。
俺もその孤独さはなんとなくわかる気がした、俺自身は孤独に慣れ、そんなことなどすっかり忘れてしまっていた。

「そうなんだぁ～・・・・・ところでさ、お前の両親は？」
「えッ？僕の・・・・・」
突然、アキラは言葉を詰まらせた。
あれ？どうしたんだ？ひょっとして俺なんかまずいこと聞いちゃったか・・・地雷踏んじゃったか？
内心、あせりまくりの俺にアキラは笑顔で答えた。

「僕、実はお父さんもお母さんもいないんだ・・・・・。」
「えッ！あ・・・すまん・・・」
「いいよ、別に気にしてないから」
アキラの両親はまだアキラが幼い頃、出先で事故に遭いこの世を去ったそうだ。
まだ幼さなかったアキラはその頃すでに下半身が不自由で寝たきりの状態で、学校にも通うことが出来なかった。
両親の他界後、アキラは母方の親戚に引き取られ毎日を寝たきりと車椅子の生活だった。

そしてその母方の親戚も後を追うように病気で死んだ。その後、アキラは養護施設に引き取られた。そしてある日、医者から余命宣告を受け、ショックを受けたアキラは自暴自棄になりさらには自殺まで考えた。

だがそんなある日、医者はアキラに研究中の薬のモニターにならないか進められ、余命数日と宣告されて呆然としていたアキラは何も考えずに実験台になることを承諾した。

アキラが実験台になった薬というのは、サツキが病院から誤ってもらった研究段階のあの薬だった。
目が覚めると、自分の姿に驚き戸惑った。
医者から余命数日と言われていたが薬の副作用で奇跡的とも言える回復を見せた、ただ下半身は以前よりは少しだけ動くようになったが今でも車椅子が必要なほどだ。

俺は少しだけ同情した、こいつもいろいろと苦労していたんだなぁ、まだ俺のほうがマシだよな、体も自由に動くし、飯だって食える・・・・。

なんだかだんだんと自分自身の立場に不甲斐無さを感じた。

「ねぇころで君はどうしてあの薬を・・・・？」
「えッ？あッあぁ・・・実は病院の人が本来渡すはずの薬と間違えちゃって・・・・俺がこうなったのは事故なんだよ・・・・・。」
「えッ！事故だったの？」
「まったくな、なさけねぇ話だろ？そのおかげで学校にも通えず一

日中家でヒッキー生活さ」
「えっ？ヒッキー生活ってなに？」
「えぇッ・・・・あいや、なんでもないよ！ははは・・・・・」
あせりながら俺はそう答えた。

六、遠方の同士（後書き）

つづく

七、一つ壁の向こう（前書き）

サツキは夢をみた、美しくも素晴らしく、そしてどこか儚い夢を。
（中二病要注意！）

七、一つ壁の向こう

いつもの朝、そしていつもの時間。
枕元で目覚まし時計が鳴り響く、俺は眠たい目を開け目覚ましを止めて起き上がった。

ベランダの外から鳥のさえずりが聞こえている。他には何も聞こえない。

重たい足取りで、ため息をつきながら階段を下りる、目も半開きの状態で足をすべらせ、転げ落ちた。

「痛ッ！！」

ほんとにもう朝っぱらから最悪な気分、もう嫌だ、めんどくさい。
俺は洗面所で顔を洗い、レトルト食品の朝飯を食った後洗面所で歯を磨いた。

鏡の前にはいつもどおり相変わらずやる気のない感じの顔があった。

制服に着替え、シャツは外に出した状態で俺はカバンを背負い、自転車に乗って家を出た。
いつもどおりの日常、そして特に変わりようもないつまらない学校生活。

俺は全てに絶望していた。

楽しい学校生活、素敵な出会い。全てがばかばかしく思えた。

教室に入ると、俺はここで一人になる。もちろん回りには他の同級生達がいるいが、俺はその中でいつも一人ぼっちだ。
何もしゃべらず、ただ疲れた表情で自分の席に腰掛け、先生が来るまでそこで眠る。
これが毎日の日課である、もちろんそこで寝るのは単に眠いしだるいから、そして何より話し掛けてこないでほしいからだ。

もちろん、このクラスで俺に話しかけるヤツなんていない。
だって俺はいつも一人だから・・・・。

中学に入ってからは誰とも話さなくなった、小学校のころはいろいろと騒いだもんだ。
俺が小６の頃だったか、昔俺のクラスの一人の女子が隣のクラスのガキ大将にいじめられているのを俺が教室のパイプ椅子を投げ飛ばして助けたことがあった。
その後ガキ大将もその女子には手を出さなくなった、そして周りの奴らも俺を見る目を変えた。

普段は大人しいヤツがあんなことをしたのだから、無理もない。
でもまぁそのおかげで俺も奴らに絡まれることもなくなった。

それに比べ、いまとなっちゃ俺の周りには当時の俺の様子を知るヤツはほとんどいない。
他は引っ越したり他の中学へ行ったりとそれぞれの道をいった。

あの時助けたクラスの女の子も今は何処でなにをしているのやら、俺の知る理由もない。

もうなんかめんどくさいなぁ・・・・かったるいし・・・・。
そんなことを思っていると、教室に出席簿を持って先生が入ってきた。

「はーい、お前ら席に着けー！」

他の生徒達はいそいで自分の席に戻り、俺も重たい頭を起こした。
家に帰りたい・・・・そればっかりが頭の中にある。だが時間はそんなに早くは進まないものだ。

他の生徒たちも同様にかったるそうに黒板の方を向いていた。でもその中で一人、ゆみだけはちゃんと先生の方を向いていた。

相変わらず変なところで真面目だなぁ・・・・ゆみは・・・・・。

俺は立て膝をついてやる気のない顔で黒板の方を向いた。

「えー、これから出席を取るがその前に皆に新しい仲間を紹介しよう」

新しい仲間？なんやそれ？
もしかして、転校生のことか？そう思っていると、教室に一人の少女が入ってきた。
それを見た瞬間俺の中で電撃が走り、ビックバンが起こった。

「紹介しよう、今日からみんなと一緒にこのクラスで勉強することになった、青空ふたばちゃんだ」
「どうも！始めましてー！青空ふたばでーす！！」

何ィいいいいッ！！？ふたばちゃん！！
なんと、そこにいたのは俺の嫁、メイド魔法少女ふたばちゃんこと、青空ふたばだった。
するとふたばちゃんは俺のほうを見て優しい顔で微笑んだ。

その瞬間、俺の心は頂点に達し、世界（教室の中）は俺とふたばちゃん二人だけになり、周りは優しい光に包まれた。
そして二人だけの世界には桜の花弁が舞い、ふたばちゃんが俺に抱きついてきた。

「津山くーん～！！」
「うわッ！！」

なんだか不思議に最高な気分だ。まさか嫁が転校生だとは思ってもみなかった。
俺が思っていた楽しい学校生活がそこにはあったからだ。

「津山くん！」
「はいッ！」
「だぁーい好き！！」

そういうとふたばちゃんは俺にキスをした、その瞬間俺は目覚ましの音に気がついてはっと目を開けた。
目覚ましを止めると、そこにはいつもの天上が広がっていた。

鳥の鳴き声がベランダの外から聞こえた、どうやら俺は夢を見ていたようだ。

俺は机の上のふたばちゃんを見てため息をついた。

「・・・・夢か・・・・・・」

とりあえず俺は起きることにした、目が覚めてしまった次第ずっと寝ていてもしょうがないからだ。

しかたなく眠たい目をこすりながら階段を下りて洗面所で顔を洗った。

「あれ・・・・・また女に戻ってる・・・・・・」

夢の中の俺は男に戻っていた、でも何故俺はあんな夢をみたのだろうか。

まさか夢の中に嫁が出てくるとは思っても見なかった・・・・しかもキスされたよ！

でもキスされたところで夢から目覚めてしまった、もうちょっと嫁とたわむれたかったなぁ。

いっそ夢ならずっと覚めないで欲しかった。

俺は最高に幸せな気分だった、だがそれは目が覚めると同時にその幸せな気分もさめて消える。

まるで薬物依存症の人になったような気分だ。

つかの間の幸せ、快楽の果てには苦しみと絶望、そして現実、これ

しか他にないのだから・・・・。

薬が切れれば人は再びそれを求め、苦しみもがく。そしてその繰り返しの果てに待つものは死である。

俺も死ねばこの苦しみから解放されるのか？だが俺にはとてもそんな勇気はない、自分で自分を殺すことなど、そう簡単にはできないことだ。

前に医者が俺に言った言葉、死にかければ一時的に元の体に戻ることができる・・・・・。

もし、これで俺が元の姿に戻ったとしても、その時俺はもうこの世にはいないかもしれない。

俺は怖かった、死ぬことがじゃない、死というそのものが・・・・・。

人は死ねば葬式に出され、坊さんの前に寝かされひたすら耳にたこが出来るほどお経を聞かされる。

そしてその後は霊柩車に揺られ火葬場へと移動。

俺は昔、ばあちゃんが死んだときに火葬場に始めてきた。そこはうっすらと明るく、そして暗くもあり、隙間風がまるで最後のときを見送るかのように静かに吹き荒れる。

そして魂の抜けた肉体は棺おけに入れられたまま、炎によって焼かれる。

俺が始めて、死、というものが怖いと感じたことはこれまでなかった。

もちろん、魂は抜け肉体だけの体になっても、俺は焼かれたくはな

い。
ただ、なんとなくそう思うだけのことだが、俺はそれが怖い。

俺はいつも通り、くだらないことを考えながら爺ちゃんといっしょに居間で朝のニュース番組を見ながら朝飯を食らう。

とにかく、夢が夢であるようにまた現実も同じことだ、太古の昔からそうやって続いてきた。
いつもの朝のニュース、変わることのない日常、俺は朝飯を食い終えると、食器を台所に運んで水に漬けた。

「さてと・・・・どうすっかなぁー・・・・・」
「おいサツキ、そういえば学校はいいのかい?」

爺ちゃんが毎日学校に行かないことを不審に思ったのか聞いてきた。
無理もない、このまま学校に行けるはずがないのだから・・・・。

「えッ!あ・・・あぁ・・・いいんだよ!俺ッいや私は・・・・あははは・・・・」

俺は笑ってごまかし、冷蔵からペットボトル入りのコーラを一本つかむと、それを持って急いで自分の部屋に逃げ戻り、戸に孫の手でつっかえ棒をして戸をロックした。

「ふぅ・・・・これで良し・・・・と。」

だが、学校へ行けなくなるというものは流石に退屈でしょうがない。
だって、特にコレといってすることがないからだ。
でも学校に行ったとしてもあまり家にいる時とはあまり変わらないだろう。

何もかもがめんどくさくて、何もかもがかったるくて・・・・・。

俺はパソコンの電源を入れると、ベランダ側に寄りかかってちゃぶ台の上のパソコンをいじった。
とくになにもする事がない時は、きまって俺は無料オンラインゲームで暇を潰す。

だが、流石にずっと続けていると飽きてくるので掲示板の方を見てみたらいくつかレスがあった。

「～1よ、ニュー速に面白そうなサイトがあったからリンクここに貼っとくぜ～」
「～ｗｗｗ．ｂｅｎｚｙｏｋｏｕｒｏｇｉ．ｎｅｔ～」
「なんだこれ？」

俺は不思議に思いリンクにアクセスしてみると、そこには変なことが書かれていた。

「なッなんだこれは・・・・・？」
「～自動性転換装置の発明、特許出願中～」

俺は思わず目を疑った、だがこれはよくあるネタの一種であろう。

だって現実にそんなものがあるはずがない、もしあったとしたらそれはそれでノーベル賞モノの大発明であろう。

一瞬でも期待した俺が情けない、でもそうは思いつつも詳細ページをクリック。
そして俺の予想は的中、まったく違う内容のものであった。

「スペシャルエステクリニック・・・・ってそっちかよッ!!」

もう考えるのはやめ、パソコンを閉じてその場に寝転び、横に積んである漫画本の山から適当に漫画を一冊抜き取って読んだ。

俺は漫画を読んでいるときだけは何かを考えたりすることはない。
心が落ち着く。
特に、何もしたくないときにはもってこいだ。

だがその時、表の方から突然声がした。その声の主は言わずともあの二人の声だった。
俺は聞かなかったフリをして寝返って漫画で顔を隠した。

「おーい!サツキー!いるのー?」
「サツキー!」

最悪や!あいつらもう来た!!
そっとベランダ側の窓の隙間から下を覗くと、やはりゆみとひろの姿があった。

なんてこった、こんな姿見られたらどう思われるか！早く逃げなければ！
だが突然のことに逃げる準備などしているはずがない。漫画本片手に一人部屋の中で慌てふためく俺。
もう俺のことはほっといてくれ！早く学校に行ってここから消えてくれ！
だがそんなことを心の中で叫んでもどうしようもない。

「サツキー！いるのかー！！」
「私ちょっと中入って見てくるね！」

一向に出てこない俺にゆみが動いた、玄関を開けて家に入ってきた。
俺は思わず顔色が真っ青になった。

「やべぇ！！ゆみが来る！！ど・・・どどどうしよう！！？早く逃げないと！！」

絶体絶命のピンチ、爺ちゃんはもう畑仕事に出かけてしまっている・・・ということはこの家にいるのは俺一人だけ！？

「おじゃましまーす！サツキのおじいさーん！」
「誰かいた？」
「ううん、誰もいないよ・・・私ちょっと上見てくる」

なッなんだってぇーッ！！？
やばい、この時点で俺に死亡フラグが立った。だが、最後まで俺は

あきらめない。

部屋の戸にはつっかえ棒でロックをしておいたがそれだけじゃ不安だったので、俺はとっさに戸の横の棚をずらして戸を塞いでバリケードを作ることにした。

こっちに階段を上る足音が近づくにつれ、俺は必死になって棚を押した。

なんとかバリケードは完成し、俺は棚の前に座り込んだ。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

ちょうどそこへ部屋の前にゆみが来た、俺は声を出さないように口を手で押さえてじっと息を殺した。

「サツキいるー？いるなら返事してー！」

返事なんてできねぇよ！つかもうお前ら帰れよ！学校行けよ！

七、一つ壁の向こう（後書き）

つづく

花粉症辛いｗ

八、記憶の欠片（前書き）

学校に行かなくなってから三週間、ついに心配になったゆみとひろが俺の家にやってきた！

八、記憶の欠片

「ねぇサツキー！いるのー？」

ドンドンドンッ！

「サツキー？」

戸を叩く音が部屋に響く、俺はどうすればいいのか分からずパニック状態。
なんとか持ちこたえてくれ！そしておまえらは早くとっかに行ってくれ！

俺はただじっとしていることしかできない、無理に動けば怪しまれるし、まだ向こうは俺が部屋にいるのかも分かっていない。

「サツキー？・・・・・もう・・・・返事がないならここ開けるわよ！」

「・・・・・・・・・」

だが、戸をあけようとしたが俺が予め戸に孫の手でつっかえ棒をしておいたので開かない。

「あれ？・・・・くッ！あれ・・・・鍵かかってるのかな？」

いくら呼んでも返事はなく、ゆみはようやくその場を立ち去った。

「しかたない・・・・・放課後また来てみるか・・・・」

いいぞいいぞ！行け行け！

ようやく一安心し、俺は一気に息を吐き出した。ぶっちゃけこれはやばかった。ほんとに死ぬかと思った。

俺はベランダの窓から様子を覗い、二人が出て行くのを見届けると安心し、棚を元に戻してつっかえ棒を外して孫の手をその辺に投げ捨てると、ため息をついて畳の上に座り込んだ。

「はぁ～・・・・・・・・俺、なにやってんだろ・・・・・・」

しばらく沈黙した後、俺はふとそんなことをつぶやいた。

このままここにいればいずれあの二人に見つかってややこしくなるしなぁ、でもだからといってじっとしているわけにもいくまいし・・・・・。

色々悩んだあげく、俺は一つの提案を考えた。

そうだ、逃げるだ！逃げちゃえばいいんだ！

俺ってホントにバカだ、なんで今までこんな簡単な事に気がつかなかったのであろうか。

はッ！でも待てよ・・・・逃げるといっても何処へ逃げればよいのやら・・・・行く宛てなど何処にもないし・・・・。

俺は再び悩んだ、だがいくら考えても他に考え付くいい案はない。

とりあえず後でなんとかすることにして今はとりあえず漫画を読むことにしよう。
再び俺は読みかけの漫画に手を伸ばして寝転がって漫画にあきれば携帯ゲーム機で小一時間ほど遊びぐだぐだしていた。

気がつけばもう時間は十二時ちょっと前に回っていた。
ゲームに飽きてきた俺はなんだか少し腹が減ったので起き上がって部屋を出て階段を下りた。

気になった俺は玄関の戸を少し開けて表のほうを見たが、そこには人影はない。郵便配達のバイクか家の前を通り過ぎていったのが見えただけだった。
一応、今朝のこともあったせいか、俺は戸に鍵をし閉めておいた。

「さてと・・・・・今のうちに飯飯～」

そして俺は冷蔵庫を開けたが何もない！冷凍飯どころか魚肉ソーセージもない！
まずいことになったなぁ・・・・・だが悩んでいても仕方ない。
俺は流し台の下の収納を開けたがそこにはレトルトのカレーどころかインスタントラーメンすらない有様、もうやだ。

「はぁ～、なんてこった・・・・・嘘だろぉ～・・・・・」

食うもんがなんもない、あるのは調味料と冷凍のおかずだけ。
流石に昼抜くとなるとだるくなる、でもそれは一時的に慢性的なものだ。

でも少しは腹に入れておかねば、いざとう時に逃げ出せる活力が必要だ。

「しかたない・・・・・買いに行くか・・・・・」

もうこの時間帯ならあいつらは教室で授業中だろうな、ということは今の俺には敵無しってことか！！

そうだ、同い年の奴らが出歩いていないこの午前中の時間帯！外出するにはもってこいの時間帯じゃねーか！

一気にハイテンションになった俺、もはや外に出て怖がる必要もなくなったワケだ。

俺は早速自転車に乗って国道近くのコンビニに向った。

そして時を同じくして学校の教室、がら空きの席を心配そうにゆみが見つめていた。

「（いったいどうしちゃったんだろう・・・・・サツキ・・・・・。）」

「じゃあ次の問題をー、岡崎！・・・・岡崎ー？」

「えッ？あッはい！・・・・・」

サツキのことを考えていてボーっとしていたゆみは気がかりだった。

だが、そんな心配をよそにサツキはコンビニで大量にお菓子と漫画雑誌を一冊カゴに入れていた。

「１６７８円になります」

買い物を終え、俺は食料と雑誌の入ったビニール袋を自転車のハンドルに下げて家に帰った。
そしてその道中、近道に農道を走っていると畑で作業している爺ちゃんの姿が目に止まった。

「あっ・・・・爺ちゃん・・・・今日は中本さんと一緒なんだ・・・・」

中本さんは爺ちゃんの仕事仲間で時々よく家にお茶を飲みにやってくるお爺さんのことだ。
最近は酒の飲みすぎで医者から止められているらしいが、代わりにペットボトルに入った青汁をよく飲んでいる。その青汁をよく俺に勧めてるのだが試しに一回飲んでみたら吐いてしまった。

またもし無理やり飲まされたらたまらないので急いでその場から逃げようとしたが、今の俺の姿は違うので別にいそいで逃げる必要もなかった。

一つため息をついて俺はその場から走り、自宅へと戻った。
もしも、俺がこのままいなくなったら、当然爺ちゃんは心配するだろう、そして俺の両親も・・・・。
でも、だからといって部屋の中でじっとしているワケにはいかない。
そんなことをしていたら、いずれ俺の正体が奴らはおろか俺の両親にばれてしまう。

それを想像するだけで恐ろしくなった、俺は怖さをもみ消そうと自転車のスピードを上げて家へと急いだ。

そして学校はちょうど昼休みの時間になり、教室にサツキを尋ねて藤木がやってきた。

「おーっすサツキー！って・・・・あれ？また今日も留守かいな」
「あぁ、藤木！」
「岡崎～、サツキ知らない？アイツ全然学校来てないみたいなんだけど・・・・・」
「えっやっぱり藤木もサツキどこ行ったか知らないの？」
「どこ行くって・・・・サツキどっか行ってんの？俺最近全然姿見ねぇからな・・・・でも家にはいるみたいだけどな」
「えッ！そうなの？」
「あぁ、だって昨日の夜もネットの掲示板でいるの見かけたし・・・」
「今朝私とひろとで家いってみたけどいなかったみたいだよ、部屋は鍵かかってたみたいだし、返事もなかったし・・・・・。」
「たぶん午前中はどっか出かけてんじゃね？」
「いったい何処に行ってるんだろう・・・・学校黙って休んで・・・・サツキ交通事故の後から学校こなくなっちゃって」
「私もちょっと心配だな・・・・・」
「えッ？」

サツキの席の隣の女子が答えた。

「かおりちゃん・・・・」

彼女は宮野かおり、窓側のサツキの席のすぐ隣の席にいるクラスメイトだ。
普段はサツキとはあまり会話を交わしたりはしてはいなかったが、彼女も最近隣にいるはずのサツキがこなくなってからは気になっていた。

「あの前の日はとくに変わってるところもなかったし、いつも机にふさがって寝てたけど・・・」
「かおりちゃん、意外とサツキのこと見てるねぇ～」
「えッ？あッや・・・そっそんな意味じゃなくて・・・・！最近あんまり見かけないからどうしたんだろうって思っただけです！」
「またまたぁ～、そんなこと言って～ｗ」
「ちッちがうったら！」

ゆみの発からかいにかおりは顔を少し赤くして答えた。
するとその時、藤木の脳裏にあるこが浮かんだ。

「あッ！！もしかして・・・・・」
「藤木くん・・・・？」
「サツキの奴、新作のゲームと同人誌買いに現地へ・・・・・・・！！」
「えッ・・・・・？」

ゆみは一体なんのことだかさっぱり分からなかった。

「藤木くん現地って？」
「東京の秋葉原だよ」
「えぇッ！？じゃあ津山くんはゲーム買いにわざわざ東京へ・・・・・」
「あきれた・・・・なんでそんな遠くまで行って買う必要があるの？」

あきれるゆみに藤木はかっこつけるようにしゃべった。

「そういうもんさ、漢って奴ぁ・・・・」
「いや・・・かっこつけて言われても・・・・。」
「なんでそんな遠くまで買いに行くの？地元のお店行けばいいのに」
「数量限定の商品で通販じゃ買えないんだよ、俺も前にサツキと秋葉行ったことあって限定販売されるフィギュアを買いに夜明け前から店の前で座り込んで並んだもんだよ」
「もしかして津山くんってオタク？」
「当たり前だろw俺とサツキはオタ友だぞwあーでもサツキはどっちかといえば二次元派かな・・・・」
「にっ二次元派？」
「あッいや・・・なんでもないよ！ってかそんなことよりサツキマジでどこ行ったんだぁー！！くそッこうなったら放課後に奴の家に行くか」
「私今日放課後ひろと一緒にまた行ってみるけどかおりちゃんも来る？」
「ちょっと気になるし、私も行ってみる」
「ってことはやっぱりかおりちゃんて・・・・」
「だからちがうってば！！」

俺の知らない間で運命は大きく動いていた。

常に時は人々の都合などお構いなしに進み、そして避けることのできない現実へと突き進んでゆく。

そして俺もその運命の被害者の一人でもある。すべての未来、そして過去もそうだ。

だが俺は記憶の中で忘れかけている、もう一つの真実に近い未来気づくことになろうとは思ってもみないことであった。

八、記憶の欠片（後書き）

つづく

寒い！

九、魔法少女になった馬鹿者（前書き）

病院から渡された薬を飲んでしまったサツキは、翌朝美少女になっていた！
それからサツキはここから逃げることを考えた、だが・・・・。

九、魔法少女になった馬鹿者

昼下がり、買い物から帰った俺はそのまますぐに部屋に戻ると、テーブルの上にお菓子やらなんやら買ったものを袋から出してぶちまけ、俺はスナック菓子の袋に手を伸ばした。

パソコンの電源を入れ、起動させる間俺は買った漫画雑誌を読みながらお菓子を食った。

「やっぱりメイド忍者は何度見ても面白いなぁ・・・・・」

だが流石にずっと塩分高いものを食べているとのどが渇いてくる。
でも俺としたことがいつもの特大ペットボトルのジュースを買い忘れるなんて・・・・なんという失態!!

そんなことを思っている間にＰＣが起動した。
画面には壁紙にステッキを構えるふたばちゃん（俺の嫁）、俺は彼女の姿を見るたびに希望がわいてくる。

「・・・・そうだな・・・・・このままじゃいけないよな・・・・・。」

でもこれからどうやっていくか、俺には考える余地すらない。
信用できるのは自分だけ、お金もあまり使えないし・・・・・・・。

「はぁ～・・・・俺はぁどうしたらいいんだ・・・・・」

ふとそんなことをつぶやいていると、階段下の黒電話が鳴った。
流石にずっと連絡なしというワケにもいかないので俺は恐る恐る受話器を取り、力ない声で答えた。

「はい・・・・もしもし・・・・？」
「～もしもし？サツキくんですか？～」
「えッ？」

なんと、電話の主はアキラだった。俺は突然のことに少々驚いていた。

「あッ・・・アキラか？どうしたんだ一体・・・・・？」
「～うん、いやたいしたことじゃないんだけどね・・・・最近どうしてるかなって思って・・・・大丈夫？元気ないみたいだけど・・・・僕でよければ相談に乗るよ？～」
「あッいや、なんでもないよ！なんでも・・・・あははは・・・・・・」
「～そうなんだ・・・・それならいいけど・・・・サツキくん、まだ学校とかには？～」
「ああ、まだ行ってないな・・・・・なんか憂鬱で・・・・・・。」
「～僕もまた学校行ってみたいな～」
「えっ？やめときなよ・・・・かったるいぞ？退屈だし、つまらないし・・・・とは言っても、アキラは学校あんまり行ったことないのか・・・・・」
「～うん・・・・・今は病室で勉強してるの～」
「そっか、まぁお互いがんばろうや」
「～はい！サツキくん！ところで・・・・・～」

「ん?どうした?」
「~サツキくん、今度はまたいつ会えますか?~」
「あーそうだなぁ・・・・俺も近いうちにまた行きたいとは思ってるんだがなぁ・・・・」
「~なにか用事でもあるんですか?~」
「いや、用事も何も・・・・暇ならあるが・・・・はッ!」

だがそのとき、俺の腐れ脳に激しい電撃が走った。

逃げる、逃げ延びる!
そうだ!行く宛てがあるじゃないか!

ふと俺はにやりとふてぶてしい笑みを浮かべた。

「~サツキくん?どうしたんですか?~」
「へッ!あッいやいや・・・・それじゃあ近いうちにそっちにまた行こうかなー」
「~大丈夫ですか?用事とかは・・・・~」
「OKOK!毎日暇つぶしに忙しいだけだからよ!」
「~それならよかった!それでいつ来れます?~」
「えー・・・・いつ頃って言われてもなぁ・・・・・」

具体的にどうするかまだ決めてなかった、でもこのままここにとどまればいずれ俺の招待がばれてしまう。
逃げるなら早めのうちに雲隠れした方がよさそうだな・・・・・。

考えた俺はすぐにでも行こうと決めた。
だがその前に東京まで行く資金を調達せねばならない。

「そだなぁー・・・今俺金ないし、・・・・まぁ金が何とかなればすぐにでも行こうとは思ってるけど・・・・・うん、分かった。はーい・・・・それじゃあ」

俺は意気消沈で受話器を戻した。
行きたいとい言ったものの、どうすればいいのかもわからない。俺は頭を抱えた。

「ああぁーもう!!どーすりゃいいんだよ!!」

ため息をつき、俺は洗面台の前に立って自分の姿を見つめた。

「うーん・・・・どうしたもんかぁ・・・・・」

そんなことを言いながら俺は鏡の前に立ち、手を頭に当てていた。
俺の飲んだあの薬には期限がないのか?薬はいつかは効き目というものが切れるはず、でも俺はあの薬を飲んでから三週間、一向に元に戻る気配はない・・・・。

「あーもう!どーでもいーや!!」

開き直った俺は仕方なくヲタ美少女（百合属性）として生きることにした。
もちろんとりあえず生活はいままでどおり・・・・・にはいかなそうだけどそれなりに自信があった。
今信頼できるのは自分と二次元!これだけや!

俺は早速部屋に戻り、部屋からあるものを取ってきてまた鏡の前に戻ってきた。
俺の手にはいかにも見た目からして魔女っ子アイテム的な棒、俺はそれを構えると鏡の前で決めポーズを取った。

「魔法少女あおぞらふたば！参上！」

・・・・・・・・・・・・・・・

「ひゃーｗｗｗｗたまんねぇ！！我ながら可愛い声ｗｗｗｗ」

調子に乗って俺はさらに棒をくるくると回し、攻撃のきめポーズをとった。

「くらぇッ！！必殺！チョコレートフラッシュ☆！！」

って・・・俺は一体なにやってんだ・・・・・。
俺は鏡の前で挫折した。それもそだ、いい年してチョコレートフラッシュ☆って・・・・・・。
しかもジャージの下にTシャツって、なんか雰囲気違うな・・・・・。
まぁ俺にはコスプレの趣味はないし、前に藤木が学園祭でアニメ、まじかる☆ゆかりちゃんのセーラーコスをしてて、それを見たときは流石の俺も体全身に鳥肌が立っておまけに吐きそうになった記憶が・・・・。

あ、いやなこと思い出しちまった・・・・もし藤木にばれて無理やりコスプレでもさせられたらたまったモンじゃねぇ！それこそ大惨事になりかねない！

「おげぇッ・・・思い出しただけで吐き気が・・・・」

って・・・いかんいかん！何を考えてんだ俺は！
でもホントにどうしたらいいか、アキラがここに居れば心強いんだがなぁ～。

アキラ？・・・・ハァハァ・・・・アキラちゃん・・・・！

「うあぁーッ！！って何考えてんだ俺！！・・・・いかんいかん！！変な妄想にとらわれるな！」

まァでもあれは三次元でもなかなか可愛いかったけど・・・・って違ーう！！
頭を抱えて妄想をかき消しているその頃、学校が終わり校門の前でひろとゆみと藤木が話しながらかおりが来るのを待っていた。

「藤木お前何か聞いてないのか？」
「まーの、拙者はあれから一度もサツキ氏とはあってないお」
「ゆみは・・・・そうか・・・・サツキホントどこ行ったんだ？」
「お待たせー！」

ちょうどそこへかおりがやってきた。

「かおりちゃーん」
「それじゃあ行くか、」
「なァ藤木、あれから音沙汰ないか？」
気がかりだったひろが藤木に聞いた。

「いや、そういうわけでもないみたいだけど・・・毎晩掲示板とかにも書き込みがあって家にはいるみたいだけどの・・・あッ！そういやあいつ最近掲示板で奇妙な質問カキコしとったな」
「奇妙な書き込み？それって何だ？」
「あぁ、それが性転換がどうのこうのとか病院の薬がどうのこうのとか・・・」
「なんだそれ？」
「拙者にも分からんのよ、まったく意味不明だ・・・それとも何かの暗号か？」
首をかしげる藤木に話を聞いていたゆみはそれと結びつけて考えた。

「暗号か・・・でも一体どういう意味なんだろう？」
「とにかく行ってみれば分かるよ」

ひろはそう言い一向は俺の家へと向かった。
その頃、俺はといえばテレビのある居間で座布団を枕代わりに一人アニメのＤＶＤを見ながら畳の上で寝転がってすごしていた。
分かっている通り、俺には何もすることができない。ただそこに居てボーっとアニメを見るだけ。

この時間帯はあまり面白い番組やってないし、まぁ田舎だからしかたないか・・・・・。

「はぁ・・・・・」

俺は軽くため息をつき、アニメを見ながらふと考えた。

アニメの世界ってすばらしいよな、毎日が楽しそうで、それでいて時々切なくもあって。

そういえば、前にどこかのスレッドで二次元のアニメの世界に行ける方法があるとか、そんなカキコがあっけか？

ありえないことだそんなこと、現実的に考えて人間が二次の世界に行くなんて・・・・そんな漫画みたいなこと・・・・・・。

でも現に俺はありえないことだが現にこうして性別が変わってしまったり、夢の中でもアニメの好きな女の子と一緒になれたり・・・・・。

はッ！はてよ・・・・夢の中ではアニメの世界に行けたってことは、ずっと寝ていれば夢から覚めない限り俺はずっとあの子と一緒！楽しい学校生活が送れる！！

つまり、ずっと布団の中にもぐっていればいいわけだ。でも目が覚めてしまったら再び寝ようとは思っていてもそんな簡単にはすぐに寝ることはできない。

俺は考えた、どうすれば夢からずっと覚めずにすむのか。

「死ぬ・・・・か。」

考え付いたこと、それは死ぬということ。
だが一言にそれを言っても俺にはとても死ぬ勇気はない。だからどうすればいいか・・・・。
死にかければ体は一時的であはるが男に戻れる、それにその間は俺は夢の中で嫁とあーんなことやこーんなこととか・・・・。

俺はまたも不適な笑みを浮かべた。自分で言うのはあれだが、俺は相当な変体馬鹿野郎だと思う。

別に死ななければいけないわけでもないし、正直俺は少しでも長い間、嫁と戯れたいだけだ。
でも死にかけることってきっと痛いだろうな・・・・でもそれしか他に無い。

「はぁ～・・・・」

深いため息をついて俺は立ち上がった、軽くめまいがしたので体を伸ばして一つ息を吐くと、俺はテレビを消して自分の部屋に戻った。

「やってみなけりゃ分からねぇよな・・・・死にかけてみっか。」

九、魔法少女になった馬鹿者（後書き）

つづく

おまたせしやした！

十、生きている意味（前書き）

じゃがバター、もうヤダー

十、生きている意味

「さて・・・・とは言ってみたものの、どう死にかけるか・・・・」

流石にそこまでは考えてなかった俺、どうするか悩んでいた。
俺はとりあえず台所の流し台の前に立って腕を組んで立っていた、
そしてその前のまな板の上には包丁が一つ、それを見つめながら考え込んでいた。

「やっぱり・・・・いやッでもなぁ～・・・・・。」

そんなことをぶつぶつと呟きながらも俺は包丁に手を伸ばした。
ずっしりとした重さに思わず俺の手が少しだけ震えていた、だが本当にこれが正解なのか?
自問自答に俺は包丁を握り締め、唾を飲んで左腕の手首に刃を近づけた。

とりあえず、リストカット的なことなら死にはしないだろう、おそらくは・・・・。
でも実際斬ったらどうなるんだ?やっぱり血管とか多いから斬ったとたんに血が噴水のように噴出すのか?よくスプラッター映画とかでよくあるけど、昔、なんかのホラー映画で日本刀で斬り殺したときに血のりが噴水のように噴出してたけど、ああいうような感じになるのか?

「なんか怖いなぁ・・・・・いや、でもなぁ」

自らリストカット的なことをやろうとしている自分、躊躇するのも無理も無いことだ。
だって、生まれてこの方一度もリストカット的なことなどこれまで一度もしたことが無かったのだ。
まぁしなかったことだけ幸いなのだろうが、今の俺はどうだ？ますます惨めに見えてきた。

よっぽど自分自身が情けなく見えた、だがどうすればいい？

まるでその時間がとても長く思えた、そして俺は決意を固め手首に刃を当てようとしたそのとき、突然誰かが戸をたたく音が聞こえた。

ダンダンダンッ！

「！？」

俺はとっさに包丁を手から離して玄関の方を見た。ガラス戸の前に誰か四人が立っているのが見えた。
突然のことに俺はとっさに居間に入って襖を閉めると縁側のガラス戸を音を立てないようにそっと空けて玄関側の方を覗うと、なんとそこにはゆみとひろ、そして藤木となぜか俺の隣の席の宮野までいるではないか。

「なッ！？」

俺はとっさにガラス戸に鍵をかけて障子を閉めると、急いで台所の勝手口から裏庭に逃げ出した。

「やべぇ!!てかなんでアイツらがいるんだよ!!」

「おーい!サツキー!!生きてるかー?」

「サツキー!」

「ダメだ、鍵かかってるよ」

「マジか・・・・」

「これじゃあ家ん中入れないよなぁ～」

「どうするのヒロちゃん?」

「うーん・・・仕方ない、裏から回ってみるか!」

ヒロのその言葉に影から見ていたサツキは顔が真っ青になった。

一刻も早くこの場から逃げ出したい、だが奴らがこっちに来たら俺ピンチ!どうする!どうするよ俺!!

「っく!・・・・・」

俺は一時的ではあるが再び勝手口から家に入り、ひとまず居間の掛け軸の横の押入れに逃げ込んだ。

音を立てないようにそこでじっと息を殺してわずかな隙間から外の様子を窺った。

するとちょうど台所の方で音がしたので奴らが入ってくるのが分かった。

ガチャッ・・・・

「おじゃましまーす・・・・・」

「ねぇ、本当に勝手に入っちゃって大丈夫なの？」
「平気だよ、だって小学校の頃なんかよく出入りしてたじゃんか」
「それはそうだけど・・・・・」
「おーい！サツキいるのか？」
「私ちょっと二階見てくる」
「あぁ、俺も行く」

その話を聞いたサツキは思わず顔が青くなった。

「まッ！まずい・・・・さっきエロ同人誌読んだまま畳の上に！！・・・・」

俺はどうすればいいか分からなかった、でも今から二階へ行くことはそれこそ自殺行為！（精神的に）
それだけは絶対に嫌だ！だがうっかりしたことか俺は証拠隠滅すら出来ない・・・・・。
だがいつまでもここでじっとしているわけにも行かない、奴らが二階へ行っているその隙に俺はそこから抜け出し、ガラス戸を開けて縁側から置いてあったサンダルを履いて外に出た。
一方で俺が倉庫から自転車を出している頃、二階へ上がっていた四人は俺の部屋に居た。

「ここがサツキの部屋・・・・・」
「まっまぁ俺もある程度は予想してたけど、まさかここまでとは・・・・」
「すごい・・・・・・」
「すごい数の人形ですね、わーこれ可愛い・・・・・」
「なんか机の横にある物騒なモノは一体・・・・・」

「何驚いてんだおまいら、拙者からしてみればコレぐらいは普通の部屋にしか見えんぞ？」
「藤木よ、お前が妙に最近サツキと一緒に居る意味がやっと分かったよ」
「えへへ、そうか？」
「褒めてねぇよ！」

ヒロはサツキの敷きっぱなしの布団にさっきまで寝ていたような跡があることに気づいた。
敷きっぱなしの布団や空のお菓子の袋を見たゆみとかおりは呆れていた。

「布団がまだ暖かいってことはさっきまでサツキがここに居たってことか・・・・」
「もう！サツキの部屋汚すぎ！」
「枕元にも拳銃とか置いてあるよ・・・藤木君これ本物？」
「まさかwそれはサツキが全部違法改造を施したモデルガンだよ」
「違法改造って、それでも十分に危ないよ・・・・」
「これはなに？」
「あッ！！それは・・・・・！！」

足元に落ちている表紙がランドセルを背負った少女の絵の表紙が目立つ同人誌に気づき、それをゆみが拾い上げた瞬間に藤木があわてて制止に入ったが気になるあまりゆみは同人誌をめくってしまった。

「あッダメ！それ見ちゃ・・・・・！」
「え？」

その瞬間、ゆみはそのページを見るなり顔を真っ赤にしてあわてて同人誌を閉じた。

「もうッ！サツキのドスケベッ！！」
「どうしたのゆみちゃん？」
「なッなんでもないわよ！」
「あッ可愛い～、これなに？」

かおりがちゃぶ台の上の同人誌に手を伸ばそうとした瞬間、とっさに横からゆみが同人誌を取った。

「みッみちゃダメッ！！」

顔を真っ赤にしてゆみはそう叫んだ、だがそうは言うものの気になるゆみはもう一冊の方も恐る恐る開こうとした。

「あッあの岡崎サン？」
「一応気になるから・・・ちょっとだけ見るだけよッ！」

そっとめくったその同人誌は百合全開の内容で美少女二人がキスをしている模写のページを見たと単に再び顔を真っ赤にして見入っていた。

「あ・・・あの、ゆみちゃん？」
「頭から煙が・・・・・」
「流石、これが百合のチカラというやつか・・・・・・顔が赤いぞ

岡崎さんよぉ」
「うっさい藤木！！」
「あれェ～？もしかして岡崎って・・・・百合～？」
からかう藤木に顔を真っ赤にしながらゆみが思いっきりアッパーを食らわした。

「黙れこの変体キモオタ野郎ーッ！！！」

ドゴォッ！！

「ぶべらッ！！」

そのまま藤木はＫＯ、口から血を吐いてもはや虫の息、それを見たヒロは何も言わずそっと手を合わせた。
そしてその頃、自宅を脱出したサツキは自転車で大きな市民公園まで着ていた。
公園内の自販機でジュースを一本買い、近くのベンチに座ってちびちびと飲みながらうつむき、ただ一点だけを見つめていた。

「はぁ～・・・・俺、何やってんだろ・・・・・・。」

もうなんだか自分が一体なんなのか、なんのために生きているのかすら分からなくなってきた。
何故俺がこんなことになってしまったのか、何故俺ばっかりがこんな目にあわなけりゃいけないのか。
もはやすべてが暗黒だった、悲しみを通り越してしまった俺にはもう何も無い、ただそこに死ぬまでたたずむだけ・・・・。

GWが明けてからというもの、相変わらず俺は一人ぼっち。

俺は自分が分からない、俺の生きている意味って何だ?これまで何かを追い求めてきたのか俺は?

大好きなことなら命がけで追い求めた、アニメや漫画、同人誌そしてギャルゲー。

他の普通の一般人とは少しかけ離れた存在であることは自覚していた、だって俺はそれが大好きだったから、俺が唯一心を許せるものがそこにはあったから・・・・・。

だから俺は生きてこられたんだ、今までもこれからも。

「フッ・・・・フフッ・・・・」

俺はふと薄ら笑いを浮かべた、自分がどれほど愚かでくだらない存在なのか、だが俺はそれがかっこよく素敵に思えた。

だってオタじゃない奴らってどうだ?リア充ってどうだ?当たり前のような毎日決められた毎日、支配された毎日をただ屍のように過す愚かさ、俺からしてみればリア充がよほど愚かで醜く見えた。

でも俺はどうだ?勉強はまるでダメ、毎日寝ながらエロい妄想に浸り、ネット廃人とまで呼ばれた。

それと同じ立場に今自分がいるということ、結局オタもリア充と変わらねぇじゃんかよ・・・・。

「それじゃあ・・・・俺の生きている意味ってないじゃんか・・・・・ハハハ・・・・・」

もうこのままいっそ家には帰らないでどこか遠くへ行ってしまおう

か、でも金もそんなにない。
それともいっそのこと消えてしまおうか、でもそんなことをしたら帰ってきた両親が悲しむだろうな。

自分が自分のようで自分でない、だって俺は今美少女、あんな薬を飲んだおかげで。
だったらそれでもいいじゃないか！美少女！それでもいいじゃないか！
だって美少女だぜ！すごくね？中身が男だなんて誰も思いつきもしねぇことだろ？

はッまてよ？てことはこれは逆に考えればある意味チャンスではないのか？
だって堂々と平気で女子トイレや女子風呂に入れるってことはこれはある意味いいかもしれん！

「ウヘヘヘ・・・・ヘヘッ」

不気味な薄ら笑いを浮かべて俺は缶ジュースを一気に飲み干し、横のくずかごへ空き缶を投げ込んで立ち上がった。

もう俺にはなにも怖いものなど無い、もはや俺は無の境地に居るのだから。

十、生きている意味（後書き）

つづくぞー

十一、影の存在。（前書き）

サツキが逃げ回る生活をしているその頃、誰も知らない間に一人のある男がなにかをたくらんでいた・・・・。

十一、影の存在。

気がつけば俺は一人、公園内の公衆便所の横の壁に寄りかかって立っていた。
まさか自分がこんなことをする日が来ようとは、でも俺にはそんな下らん勇気はない。
俺は三次元をただ見ただけじゃ勃たないし何も感じない。だが何故俺はこんなことをしようとしているかと言うと、俺は美少女。見た目だけでなく声もそう、だが中身だけはちゃんとした男であること、キモオタ変体野郎とは言うまでもない。

ではなぜ、俺が女子トイレに入ろうかと言うと、それはいわゆる「お約束」というやつだ。

「誰も居ないか・・・・」

中に入った、流石は女子トイレ、男子便所とはえらい違いだ。
まず驚いたのは立小便機がないこと、なるほど、大も小も大便の方でするのか・・・・初めて知った。

「何だ・・・誰もいねぇーのか・・・・・」

中には誰もいなかったので俺は仕方なくそこを出て公園を後に、他に居場所もなく俺はただひたすらに川沿いの河川敷を自転車で突っ走っていた。

「はぁ～、これからどうすっかなぁ・・・・・金もないし」

今から家に戻ってもまだあいつらが居るだろうし、もし出くわしたりしたら混乱を招くかもしれない。
そうしたら一番めんどくさいことになるのは俺自身だ。

俺が河川敷を走っている頃、事態はさらに大変な方向へと向かっていた。
東京霞ヶ関、例の薬品の取り間違い事故で今根岸博士らが会議で責任を問われていた。

「今回の事故だがなぜ我々が開発途中の薬が病院に流れていたのだ？」
「それはその・・・担当していた患者に投与する予定だった薬品と誤って研究所の関係者が持ってきものと誤って取り違えてしまいまして・・・・」
「あの薬品は国家機密だぞ！公けに知れたらどうなるかは分かってるだろう！」
「地元の少年が一人薬を飲んでしまったと・・・・・」
「で、対策は出来ているのかね根岸くん？」
「それがその、まだ対策方法を現在模索中でして」
「なるべく早く頼むよ、もしあれが悪用されでもしたら大変なことになるぞ。」

だが、この会議で一人ある人物がそれを利用しようと考えていた。
誰も気がつかず、ただその男は微笑んでいた。

「先生、どうするんですか？結局・・・・」

「とりあえず彼には伝えておくべきなのか、でもかえって不安を与えてしまうかもしれないし」
「アキラちゃッあいや！、アキラくんのこともありますし、あの人たちの言うとおりもし公けに知れたらアキラくんどころかサツキくんも危ないかもしれませんよ？」
「分かってるよ藤崎、その前に対策を考えなければ・・・・」

廊下の影で二人の話を一人の男が聞いていた。
その男は携帯を取り出すと、どこかへと電話をかけた。

「もしもし私だ、ああ、どうやら例のあれを実験体の他に飲んだヤツがいる、あぁそうだ、もちろんタダとはいわん、それなりの報酬も用意しよう、それじゃあ。」

影で微笑むその男は何かをたくらんでいた。
そしてそんなことも知らずその頃俺はといえば、家のすぐ近くまで帰ってきていた。

流石にもう結構あれから時間が経ってると思うが、油断は出来なかった。
でもまぁ別によくよく考えれば別に帰って奴らに出くわしたとしても、誰も俺だと、津山サツキだとは思わないだろう・・・。

そんなことを考えたがいざ行くとなると、やはりまだ躊躇いというものがぬけない。
俺は恐る恐る自転車を押して庭に入り、玄関の横に自転車を止めてそっと玄関の戸を軽く引くと戸が開いた。

鍵がかかっていない、たぶんアイツら出るときそのままにして出て

行ったのか？
まぁそれは仕方ないか、家の合鍵の隠し場所は家族しか知らないし・・・。

だがそれだけで安心していた俺だったが戸を明けた次の瞬間、玄関の前に靴がたくさんあるのを見て俺は思わず驚いてしまった。

「えッ！・・・・アイツらまだ居るのか・・・・・」

すると部屋の奥から玄関の戸が開く音に気づいたヒロが返事をした。

「サツキかー？」
「帰ってきたのかな？」

俺は思わず顔が真っ青になり、あわてて家の裏手に逃げ込んで体を小さくして隠れた。
刹那、半開きの戸をあけて表にヒロが出てきた。俺はそっと影から様子を見た。

「サツキー！」
「ヒロどうしたの？」
「おっかしーな・・・・・たしかに誰か来たと思ったんだけどなぁ・・・・」
「えッ！サツキ来たの？」

後から出来てきたゆみも周囲を見回したがサツキの姿はなかった。
それもそのはず、俺は今あの二人のすぐ近くに居るのだ今ここでこ

の姿を見せるわけにはいかない。

「サツキのやつ、ほんとにどこ行ってるんだ？もう夕方だっていうのに・・・・・」

「あッ！」

「どうしたゆみ？」

「この自転車ってサツキのじゃないの？」

やべぇ！！俺としたことが、うっかりして現場に証拠を残してしまった・・・・・。

まるで一派向けマンネリ探偵アニメの犯人になった気分だぜバーロ！！

なんという失態、こんなことなら裏に止めておけばよかった。

「ほんとだ！でもなんでここにサツキの自転車が・・・・・」

「一度帰ってきたのかな？」

「どしたー？」

二人の様子に気づき、中から藤木と宮野が出てきた。

「ああ、表に今自転車だけあってサツキの姿がないんだ」

「サツキ帰ってきてたのか？」

「それが姿がなんだよ」

「さっき私たちが来たときはなかったのに」

「怪しいわね・・・・・」

「ゆみ？」

ゆみが不思議に思うのも無理もないことだ、最近の俺の行動パターン、動きが怪しいとは思っていたがサツキが何故あれから姿を現さないのか。

「だっておかしくない？最近のサツキの行動！まるで何かから逃げているみたい・・・・」
「そうね・・・そういえばたしかに、なにか人には言えないことでも・・・・・」
「人には言えないことって・・・・？」
「あの部屋の銃・・・・もしかして殺しかなにかやってるんじゃ・・・・・」
「バーカ！さっきも言っただろ、あれは全部モデルガンだっつーの」
「ちょっと藤木！馬鹿とはなによ！馬鹿とはッ！」
「喧嘩すんなよ二人とも・・・・」

藤木とゆみがもめ、ひろがなんとか仲裁に入った。
二人の喧嘩に俺は口を両手でふさいで笑いをこらえるのが精一杯だった。

「まったく！キモオタのくせに！」
「なんとでも言うがいい！この一般人が！」
「なによやる気！」
「あーあ、まったくこれだから三次元は・・・・」
「ちょっとやめろって二人とも！」
「だって・・・・」
「とにかくさ、今はとりあえずサツキを探さないとよ、自転車があるってことは多分まだこの近くに居るってことかもしれないし」

「でもどこを探すの？」
「とりあえず家の裏見てみるか」
一方で裏手に回ったゆみとヒロたちだがそこには誰も居なかった。
いそいで裏の台所の勝手口を開けて家に入った。
俺は一刻も早くこの場から逃げたかった、すぐに俺は家の裏に回り、
なに！？奴らが動き出した！

「おっかしーな・・・・・」
「怪しいわ！さっちゃんやっぱりなにかあるのよ！」
「私よくわからないけど、ここのところ姿が見えないってことはなにか隠し事とかしてるんじゃないのかな？」
「それよ！かおりちゃん！！アイツ（サツキ）私たちに人には言えないようなこと、隠し事とかがあっるのよきっと！！」
「隠し事！」
「まさか・・・・痴漢とかしてるんじゃ・・・・・・・」

ゆみの頭の中によだれをたらしながら美少女を襲うサツキの姿が浮かんだ。
呆れた藤木がまたもゆみに絡んできた。

「お前馬鹿かよ！！エロ本読んだくらいでレイプするようなやつが居たらとっくに日本は終わってるてーの！！」
「誰が馬鹿よ！この変体野郎！」
「うっせー！そういう岡崎だってさっきサツキの同人誌みて顔真っ赤にしてたセクによー！」
「あッあれはちょっと驚いて動揺しただけよ！！」
「ふーん・・・・ホントかぁ～？」

「しつこいわよバカ藤木！！」
「だからやめろって二人とも！！喧嘩してる場合じゃないだろ！」
表の方からアイツらの声が聞こえた、俺は勝手口の扉の前で座り込んで固まっていた。
これからどうするか、まさかこんなに早くアイツらに気づかれそうになるとは思わなかった。

「はぁ～・・・もう、俺はどうしたらいいんだ！！」
頭を抱えて俺は悩んだ、死ぬことも出来ずただその場でじっとしていることしかできないのか？

逃げるなら今しかない！俺はすぐに自分の部屋へと向かい、部屋の押入れにもぐりこんで奴らが帰るまでそこでじっと息を殺していた。
そのうち俺はその中で深い眠りへと落ちていった。

「さっき参謀から連絡が入った、例の薬を飲んだ少年が山梨にいるそうだ」
「そうですか・・・フフフ、ではその少年を捉えろと・・・」
「そうだ、一人は研究所にいる松下アキラという少女、いや、性格には少年だ。」
「ややこしいですね？この際少女でいいんじゃないですか？」
「とにかくだな、松下アキラともう一人の少年、いや・・・少女を連れて来いとのことだ。」
「それでその男の娘の名は？」
「名前は津山サツキ、１４歳。山梨県笛吹市蓬莱町在住、山梨県立蓬莱中学校二年生。」

「すごいですね、よくそこまで調べられましたものですねぇ」
「たいしたことはない、この手の情報は内通者から簡単に調べはつく、いいか！ターゲットは松下アキラと津山サツキ、捕まえてここへつれて来い。ただし危害は加えるな！」
「了解しました。総帥・・・・・この私、ドクターミルスにお任せを」

人々が知らない間に運命は大きく動こうとしていた。

十一、影の存在。（後書き）

つづく

十二、蒼白（前書き）

「私の名は変体仮面、愛と真実！そして友情！世界の平和は私が守る！」

「現れたな変体仮面！貴様を倒し、この世界をわが手中に収め、すべてを支配してくれる！！」

「そうはさせるかーッ！くらえ！変体アタァーック！！」

「ぎゃあああああ！！」

「変体スプラッシュ光線！」

「あべし！」

「変体スーパーＤＸサンダーッ！」

「ひでぶ！」

十二、蒼白

二階の部屋、襖の中から不気味に片足だけが飛び出していた。
そこには上半身を布団の中に突っ込み、いびきをかいて眠る少女の姿があった。

少女の名は津山サツキ、交通事故に会い退院後病院で誤って渡された薬を飲んでしまい、その翌朝美少女になってしまったという元男子中学生だ。
今日もこれからどう過すか、いつになったら男に戻ることができるのか。
そんなことを考えていた。

「ＺＺＺＺ・・・・・ＺＺＺＺ・・・・んん・・・・」

相変わらすの寝起き、俺は起き上がり早速棚に頭をぶつけてたんこぶを作っていた。

「痛てッ！・・・・・・くそォ・・・・・」

ぶつけたところを抑えながら俺はよれよれとした足取りで階段を下りて洗面台へと向かった。
そして俺は洗面台の前に立って顔を荒い、タオルで拭くと俺はまた自分の面を鏡で見つめていた。

「はぁ・・・・」

何故だか不思議とため息が出た。ため息はいつものことだろうけど何かが違っていた。
なんとなくではあるが、なにか嫌なことが起こりそうな気がしてたまらなかった。

とりあえずその後はテキトーに飯を済ませ、部屋に戻ると一人パソコンを開いてゲームをしていた。
今から逃げてしまおう、でもなにか嫌な気配がした。とりあえず今日は表に出ないことにしよう。俺はそう考え、東京への高飛びはまた今度にすることにした。

どうしたもんか、ゲームをしている途中突然メールが入ってきた。

「なんだ?」

なんとそのメールは藤木からだった、思わず俺は驚いた。

「ふ・・・藤木から・・・・なんだ?」

恐る恐るそのメールを開いた。
内容は生存確認だった。

「~サツキ、どうしたんだ?いるなら返事しろ!お前昨日家いったのに居なかったから心配したぞ、居るなら早く学校来いよ!~」

そんなこと、無理にきまってるだろう。

今の俺は俺じゃない、だから行くわけにもいかない。もしこのまま学校へ行ったとしても多分誰も信じてはくれないだろうし、後々なにかと面倒なことになりそうだったからだ。

俺はその後、ただ黙って画面を見つめていた。でもこのままなにもしないわけにもいかないし、皆が心配しているのは十分に分かっていた。

とりあえず俺は無事なことを藤木に返信した、その後はなにもやる気がしなかった。

その後は万年寝床に寝転がって天井の蛍光灯の揺れる紐を見つめていた。

今の俺には何もすることは出来ない、ただ俺はその時をひたすらに生きてゆくだけ。

それ以外他には何もない。だってそんな当たり前のようで、俺の中ではそれは幻想に過ぎないのだ。

俺は一体何者なんだ?もしかして俺はもともと少女だったのではないのか?

自分自身には気がつかなくて、俺は自分を男だと思い込んでいたというのか・・・生まれてこの方。

だとしたら俺があの薬を飲んだことによってその幻覚が取り払われ、俺は本来のあるべき姿に戻ったということなのか?

でももしそうだとしたら、それにしては趣味や行動が男勝りである。

「あぁぁーもうッ！！わっけわかんねぇーッ！！！」

俺はやけになり頭をかきむしった、だが結局事態が変わるわけでもなく、ただただ時間だけが無常に過ぎ去っていった。

俺だけしか居ない部屋に、ただ振り子時計の音だけが聞こえていた。

それからしばらくして学校の方では早速ゆみたちが俺をとっ捕まえるための作戦会議を開いていた。

そんなことを始めるのも無理もないことだ。だがこの時点で危険が俺の身に迫っているなんて表も見ないことだった。

休み時間、かおりとヒロと藤木は教室に集まってゆみが仕切る形で黒板の前に立っていた。

藤木は鼻くそをほじりながら座っていた。

「よーし！これよりサツキ、および、津山サツキ捕獲作戦会議を開く！」

「捕獲って、なんだかサツキが脱獄囚みたいな言い方だな・・・・」

「腹減ったなぁ～・・・・」

「ゆみちゃん、それでどうするの？」

「うん、まずはいつも私たちが行くと居なくなっている、もうこれは絶対になにか隠しているのは確か」

「何かってなんだよ？」

「それはまだ分からないわ！だからこれから作戦を立てるんでしょうが！」

「つーかサツキを捕まえないと全然話が進まないぞ？」

「そうよね、でも津山くんの居場所が分かれば・・・・・・」

「なぁ藤木、お前サツキとよく一緒にいただろ、あいつがよく行くところって知らないか？」
「えッ？うーん・・・・そうだなぁ～、まぁしいて言えば国道沿いの本屋か交差点のコンビニ、それか甲府のアニメショップかゲーセンぐらいか・・・・・」
「他には？」
「うーん・・・他には・・・・・・あッ！そうそう！南町の方にある大きな公園だッ！！俺とサツキでよくどちらかが家出したときや動画撮影の時にもよく来たな」
「動画撮影？」
「ああ、俺とサツキで暇なときに時々なんか面白いことやって、その様子をサツキがビデオで撮ってそれをネットの動画サイトに投稿するんだよ」
「面白いことってどんなことだ？」
「そんなこと聞いてどうすんだよ中村」
「いやなんか気になってな」
「ふーん、まぁよくやるのが俺のケツに爆竹入れてサツキが火つけたり、あと上半身裸でコーラを飲みながらひたすら公園の中を自転車で走り回ったりいろいろやってるぜ」
「ず・・・ずいぶんくだらないことしてるのね・・・・アンタ達」
「下らないとはなんだ！下らないとは！何もせんよりはマシだろ！」
「いやいやいや、何もしないよりってか他にすることがあるだろ！」

そしてその頃、俺はといえば誰も居ない家で一人あいかわらずいた。とりあえず昨日のようになりそうになったら怖いので外出は控えるようにしないと・・・・。

腹が減って仕方ない俺はとりあえず冷蔵庫にあるもので適当に昼飯を作ることにした。
だが昼飯といえるほどの物は出来るかどうかはわからないが俺は一

人台所の前に立って適当に料理を始めた。

下にレトルトのカレーが一つ残っていたが昼真っからカレーを食う気にはならないので変わりにあったそうめんを使うことにした。

鍋に水を入れてまとめて麺と適当に斬ったねぎを放り込んで火をつけ、そのまま放置。煮立つまで俺は一人居間でテレビを見ながら待った。

それから少し経って、鍋のふたがカタカタと音を立てたので俺はあわてて火を止めた。

「うあ熱ちッ！！」

中身を移すためにお椀を探したが無く、めんどくさくなった俺はそのまま鍋ごとそのまま食うことにした。

でもまだこのままじゃ熱過ぎるので氷を三四個ぐら投入し、最後にめんつゆを流し込んで完成。

見た目からして、とても美味しいとは思えない、自分が作ったとはいえ・・・・・。

でもせっかく作ったのだから全部食べなければ・・・・・俺は一体何がしたかったんだ？

途中で自分を見失いそうになりながらも、俺はその鍋に入ったそうめんのようなものをとりあえず残さず食べた。

「うゥ・・・・おえぇ・・・・・ゲロ不味ッッ！！」

その後は気分が悪くなり、部屋に戻りお腹の上に毛布を被せてボーっと天井を見つめていた。
天井の模様を見つめながら俺は一人、今後どうするべきかを考えた。

このまま姿をくらますか、あきらめずに元に戻る方法を考えるか、もしくは・・・死んでしまうか・・・・。

最悪の状況が俺の頭の中をよぎった、だが俺はヘタレだし、ヘタレの俺にそんなことができるはずもない・・・。
時間はあっという間に流れ、下校の時間になった。俺の家からでもかすかに学校のチャイムが聞こえた。
学校ではゆみたちが会議を終え下校をしていた。

「ゆみちゃん、今日もいく？」
「ごめん、今日私塾があるの」
「あッそうか・・・それじゃあ明後日またみんなで」
「じゃあな岡崎！」

そういうとゆみは一人自転車に乗って帰っていった、その場に居たのはヒロと藤木の二人だけだった。

「あれ？かおりちゃんはどうした？」
「ああ、宮野なら店の手伝いがどうのって先に帰ったぜ？」
「そうか」
「さてと、俺はサツキに借りてたギャルゲー返しに行かないとなぁ、中村も来るか？」
「いいや俺もこのあと用事あって行けないからさ、もしサツキに会

ったらみんなが心配してたって伝えておいてくれないか？それじゃあな」

「ああ、分かった・・・・」

ヒロが帰った後、一人藤木はサツキのうちへと向かった。

藤木はサツキに気づかれないようにそっと門を開けて庭に入り、玄関の戸が開いているのを確認すると、そっと家の中に進入した。

「よーし！進入成功！サツキは二階か・・・一階には気配が無さそうだし」

藤木は単独でサツキを確保しようとたくらみ、一気に階段を駆け上がってサツキの部屋の襖を開けた。

「サツキーッ！！」

「えッ？」

その瞬間、藤木と目が合った俺は一気に頭の中が真っ白になった。

そして世界も真っ白になった。

十二、蒼白（後書き）

終に見つかってしまったサツキ！さぁどうする！

つづく

十三、死ねばいいのに。（前書き）

油断していたサツキ、終に藤木に見つかってしまった！
だがまだ正体はバレてはいないが・・・・。

十三、死ねばいいのに。

近頃、俺はもしかしたらもともと女だったのではないのかと思うようになった。
自分では自覚していない、気づいてはいないだけで自分でそう思い込んでいたのではないのかと・・・・・。
そんなことを考えながら掲示板にレスを書き込んでいたその時だった、突然部屋の襖が開き、そこを向くとそこには悪友、藤木の姿があり、俺と藤木は目が合ってしまった。

「サツキーッ!!居るかぁー!!」
「えッ？」

万年寝床の上に座り、ちゃぶ台の上のＰＣをいじっていた俺の姿を見た藤木は目を疑っていた。
刹那、俺の頭の中は真っ白になった。どうしてこうなってしまったのか、ワケが分からなかった。
誰か今すぐ俺を消してくれ。今すぐに俺をここから逃がしてくれ。
そんな願いを思うまもなく俺は藤木に見つかってしまった・・・・・。

誰か助けてくれ、この俺を逃がしてくれ、これ以上俺を追い詰めないでくれ・・・・。
すべてが嫌になった、この瞬間、俺は世界をこれほど憎んだことは無かった。
そして藤木はサツキの部屋に居た美少女を見て驚いていた。

「えッ・・・あッあのぉ・・・・・どちらさんですか？」

もうすでに死亡フラグが立ちまくり、精神的に俺は追い詰められていた。

だがまだアイツ（藤木）には正体はバレてはいないはず、俺はごまかしにかかった。

「え・・・・・さ・・・サツキの彼女です・・・・・・。」

そう言うと藤木はかなり動揺したような顔をしていた。まあたしかにそう思うのを無理も無いことだ。

「そ・・・・そんな嘘だ！アイツは・・・・サツキは二次元にしか興味ないはずなのに・・・・まさか現実に彼女が居ただなんて・・・・・しかもこんな可愛い子が・・・・・」

こいつはなんというか、気がつかないのは当たり前だが本気で彼女だと信じ込んでいる。

正直、半分ざまぁｗという気持ちもあるがなんだか複雑な気分になるのは何故だ？

仕方ないことだ自分を自分で自分の彼女と言っているのだがら、こうでも言わないと正体がばれてしまう。

許せ藤木よ！他にこうするしかないのだ・・・・同じオタ仲間を裏切って見えてしまうのは俺も同じだ。

「くそ！サツキめ！許さんぞ！三次元に彼女がいただなんて・・・・・ところでお嬢さん！」
「うぇッ！はッはい？」
「お名前はなんと？」
「つやッ・・・・ゲホッ！いや・・・・・名前は・・・・・月島きらッ・・・月島きららです・・・。」

もう！誰だよ月島きららってッ！とっさに考え付いた名前に突っ込む俺、だが藤木は全然怪しいとは思っていなかった。

「月島きららさん・・・・ですか・・・・あッあの！一つ聞いてもいいですか？」
「はッはい・・・・なんでしょか？」
「本当にサツキの彼女なんですか！嘘じゃないんですか？」
「ほッ本当ですよ・・・・俺ッあいや私はサツキくんの彼女ですよ！」
「そうですか・・・・やっぱり、あの、月島さん・・・・でしたか？、あのサツキはどこに行ったか知りませんか？」
「さッさぁねぇ～・・・・さっきまで俺、いや私と一緒にいたんですが・・・・なんか急に急用があるとか言って出て行きましたけど・・・・」
「何！？こんな可愛い子を置いて出てったただとッ！？あの、それで急用って？」
「それが・・・・俺、いや私には何も・・・・・」
「そうですか・・・・あのところで月島さん！」
「はッはい！」
「サツキのどこがいいんですか！？」

「えぇッ！？」

なんだかますますめんどくさいことになってきちまったなぁーオイ！
ここはとりあえずテキトーにごまかしておくか・・・後々面倒だしなぁ・・・・。

「どこがって・・・・独特な、なんていうかそのー・・・・ニートっぽいところ？」
「ニートっぽいところ！？・・・・ですか・・・・・ところで月島さん！掲示板になんのレスを！！」
「えッ！」

やばッ！うっかりしててパソコン閉じ忘れた！！美少女が普通エロ画像スレ見ないじゃねーか！！
俺はあわててパソコンを閉じた。

「なっなんでもないよ・・・・」
「みせてくださいよ！なに見てたんですか～？」

うぜぇ～！もうお前帰れよ！終いには殺すぞこの野郎！！
半分イラつきぎみ、その反対ではパニック状態の俺どうやってこの場を乗り切るべきか・・・・。

「失礼ですが月島さん！あなたもしかして腐女子ですか！！？」
「えッえぇ！？」

このウンコたれぇッ！！俺は男だぞ！この俺がＢＬ萌えだというの

か！！
思い込みが激しいばかりか、軽く額に血管が浮き出た。
「バカヤローッ！！俺はなぁーッ！ってあッ！！」
「！！？」
しまった！！頭に血が上るあまり男丸出しな言葉を放ってしまった・・・もうやだ・・・・殺してください。
「月島さん・・・・・あなた・・・・・・」
やばい！！
「あなた本当はそういう一人称なんですかッッ！！」
「えッ？」
一瞬、ばれかけたと思ったがコイツ（藤木）ひょっとして案外かなり鈍感なのか？
「いや、本来の姿のままでもいい！！これはある意味一種の萌え要素！！」
「は・・・・はぁ？」
流石の俺もこれには内心引いていた、お前俺のことを某弾幕系ゲームの魔法使いかなにかと照らし合わせているのはおそらくそうであろう・・・・・。

ならいいか、別にばれてないなら・・・・これ以上びくびくする必要も無い。
だって誰もこの姿からは俺だって気づかないだろう。
いいぜ藤木！乗ってやるよ！その遊び・・・・こうなってしまった次第、俺への挑戦としててめぇにケリ付けてやんよ！

「藤木さん？」
「はッはい！！て月島さん何故私の名前をご存知で！？」
「いやぁ、サツキからいつも聞いてますわ～」
「そっそうですか！覚えていてくれてめっちゃ光栄ですッ！」

ふふふ、馬鹿め！すっかり顔赤くしてやがって・・・・いつまでもそのアホ丸出しの面をしてるがいい！！
完全に俺の中は悪意、憂鬱、陰険に染まっていた、こうでもしないと俺の正体がばれてしまうから仕方の無いことだった。半面、葛藤もあった。

「ああの！月島さんは普通にＢＬ萌えですか？それともショタコンですかッ！！」
「私は百合属性なんですよ」
「なッなんと！！それは真でございますかッ！！？」
反応してる反応してる！相変わらずコイツの反応面白いな。

「ええ、でも百合とはいっても私の場合はロリ属性に萌えますね」
「ウヒョーッ！！クソ！サツキめ！うらやましすぎるーッ！！」

くっくっく！さぁーどするよ藤木？
この時点で完全に悪ノリに走っていた俺、葛藤も無くなり悪意に染まっていた。

その刹那、突然藤木は俺の手をつかみきらきらしたまなざしで俺を見つめてきた。

「あッあの！月島さん！！」
「はッはい・・・・」
「僕とお友達になってくれませんか！！」
「えッ？」

何を言うかと思えば、コイツ本気で俺にほれてんのか？
冗談じゃねぇよ！俺は男だ！ていうか今はそんなことといちいち考えてる場合じゃない！

「お願いします！」
「はッはい・・・・いいですよ・・・・・」

若干引きつった顔で俺はそう答えた、藤木は鼻息を荒くしてうれしそうに俺の手を握った。やだもう・・・。

「ありがとうございます！！」
「いえいえ・・・・」

もうなんなんや自分・・・・・。

「あッあの・・・・メアド交換・・・・していいですか？」
「うぇッ？」
「あの・・・ごめんなさい、俺ッいや私・・・・携帯持ってないんです・・・・」
そういうと藤木は鳩が豆鉄砲を食らったような顔をした。
「なッなんですってぇぇぇーーーッ！！？それは真でございますか月島殿！」
「はッはい・・・・・」
「そうですかぁ・・・・サツキのやつも携帯持ってないんですよね・・・・・・あの！また会えますか？」
いいや、それはないぞ藤木。残念ながら・・・・。
「はッはぁ・・・・」
俺は軽く返事をすると、藤木は満足げに帰っていった。
藤木が居なくなったとたんに、一気に体の中の力が抜けて俺は抜け殻のように布団の上に横たわった。
「はぁ～・・・・もうなんなんだよアイツ！！いきなりきやがって！！」
でもアイツが鈍感なおかげで余計に怪しまれることは無かった、結

果オーライと言ったところか・・・・。
そして翌日、藤木はさっそく昨日の出来事を宮野とヒロに伝えた。

「おーい！大ニュースだぞ中村！」
「どうしたんだ？」
「サツキに彼女が出来たぞーッ！！」
「えッ？彼女？」
「それって本当なのッ！！藤木くん！」

話を聞いたかおりも話しに加わってきた。

「どういうことだよ藤木、てかサツキはどうした？」
「いや、昨日俺一人でアイツんち行ったんだけどよ、本人は居なかったんだよ」
「なんだ～また居なかったのか・・・・・・」
「いや、ところがね！サツキは居なかったけどサツキの彼女が居たんだ！」
「それってマジか」
「ほッ本当なの！？藤木くん！」
「ああ、俺も最初は疑ったけど・・・・まさか彼女がいただなんて・・・・俺との童貞の誓いを裏切りやがって！！チクショーめ！！サツキの野郎ッ！！」
「童貞の誓いって・・・・・・てかその子の名前はなんて？」
「あぁ、たしか名前は月島きららとか言ってたな・・・・・・」
「中村君その子知ってる？」
「いッいや・・・・俺は聞いたことねぇーけど、なぁ藤木。そのきららって子はこの学校の生徒なのか？」
「あッ、そういやそれは聞いてなかったな・・・・・・宮野おまえ知

ってる？」
「知らないわ・・・・・」
「ん、どうした宮野？急に元気ないぞ？」
「えッ？いや、なんでもないよ！、それじゃあ私教室戻るね」

そういうと、かおりは一人教室へと戻っていった。残った藤木とヒロは不思議に顔をあわせた。
そして授業が始まるぎりぎりの時間に、教室に戻ってきたゆみがサツキの隣の席でかおりちゃんが机にうなだれているのを見て不思議に思い話しかけた。

「かおりちゃん、どうしたの？元気ないみたいだけど・・・・」
「ゆみちゃん！！サツキくんに彼女が居るって本当！？」
「えッ？えぇッ？サツキに彼女！？」
「ゆみちゃん聞いてないの？さっき藤木くんから聞いたんだけど・・・・」
「いや、私はなにも知らないけど・・・・（ひょっとしてこれで元気なかったの？ていうことはやっぱりかおりちゃんサツキのこと・・・・。）」

十三、死ねばいいのに。（後書き）

忘れた頃につづく

十四、百合が怖い！？（前書き）

「わが名は天空の使者、ベントーレ！！スターマン！！貴様が邪魔するならこの娘の命はないぞーッ！！」
「逃げてスターマン！！私のことはいいから！！早く逃げてーッ！！」
「はっはっは！！さァどうする！銀河戦士スターマン！」
「くッ！アルスーッ！！」

次回！銀河戦士スターマン　最終回！！はたしてスターマンは少女アルスを助けることは出来るのか！？そして闇の帝王、ベントーレを倒すことはできるかッ！？

※銀河戦士スターマンと本編は、スランプ・マスター本編とはまったく関係ありません。

十四、百合が怖い！？

「ゆみちゃん！本当にサツキくんに彼女がいるの？」
「えッ？どうしたのよ突然・・・もしかしてそれで今日元気なかったの？」
「ちッちがうわ！ただちょっと気になって・・・・・どんな子なのかなって思って・・・」
「のるほどねェ～、てことはやっぱりサツキのことが・・・・」
「ちがうってばッ！！」

そして次の日、日曜日。学校が休みの日に学校の門の前でゆみとヒロが待っていると、そこへ藤木がやってきた。

「よう！そこのバカップル！」
「あッ！藤木！なんでアンタがここに！」
「ひょっとしてお前もか？」
「よく分かったなー、なんかよくわかんないけど俺も宮野のやつに呼び出されたんだがな・・・まだ宮野来てねぇーのか？」
「そういやまだ来てないね？」
「ここに居ます！」

突然彼らの後ろからポニーテールの少女が姿を現した、その少女はかおりだった。

「うあッ！かっかおりちゃん！いつの間に・・・・・」
「ずっとここにいました！」

「気がつかなかった・・・・」
「それより藤木くん！本当なの！？サツキくんに彼女がいるって！」
「えッえぇ・・・うんそうだけど・・・・」
「今日集まってもらったのは他でもないわ！今から皆でサツキくんちに行ってそれを確かめるのよ！」

急に燃え出したかおりに一同は若干低めなテンションで付き合わされることになってしまった。

「えッ？今から？」
「膳は急げよ！」
「あぁ！ちょちょっと！」

急に走り出したかおりの後を三人があわてて追いかけた。

「ちょっと待ってよかおりちゃん！」
「ゆみ、なんであんなに熱くなってるんだアイツは？」
「たぶん私のカンではかおりちゃん、サツキのこと・・・・」
「マジかそれって！！」

話を聞いた藤木が乱入してきた。

「きっとそうよ！それに異変を感じて・・・・」
「くそう！サツキめ！とっ捕まえて拷問してやる！」

ところでその頃、俺はといえば布団の中でノートＰＣを広げ、口には魚肉ソーセージを加えながら某弾幕系アクションゲームをして遊

んでいた。

そういや昨日藤木からメールが返ってきてた。
やっぱり予想はしていたが、今後どうヤツと対処すべきか・・・・。

サツキ！拙者に内緒で彼女とあーんなことやこーんなこととしてたのか！？
今、貴様の化けの皮を剥いでやる！

まるで脅迫文、つーか、あーんなことやこーんなことなんてしねぇーよ！
これからどう過せばよいものか、そんなことは分からない。
高飛びするにも金が要るし、そんな金手元にはない。

こうなったら俺の色気で藤木から金巻き上げるか・・・・だとしてもそれほどの額じゃ高飛びどころか旅行もろくに出来ない。いいとこ隣町までいけるぐらいか。

「はぁ～！クソッ！」

俺はやけになり枕にパンチした、ちょどそのときだった。
下からアイツらの声と扉をたたく音が聞こえた。

まッ！まずい！！てことは藤木がアイツらに言いふらしたってこと

か！！
でもまだ俺の正体はバレてはいないから大丈夫だろう、でも油断は出来ない。

藤木はともかく、残りの三人は敏感だからもしかしたら俺の正体に気がついてしまうはず・・・いやでもそうは思わないだろう、現実に性転換するなんて、そんなこと絶対にありえない。

俺はやつらに気づかれないうちにリュックをちゃぶ台の上に置いて荷物をまとめ、急いで逃げる準備をした。
そして同時、玄関の前では四人がいた。
玄関の戸を開けようとしたが鍵がかかっていて開かない。

「どうだ藤木？」
「くそぅ・・・ダメだ、鍵かかってて開かないぜ？」
「どうするの？」

するとその様子を見ていたかおりは裏から回ろうと考えた。

「裏の勝手口は空いてる？」
「どうかな、行ってみなきゃ分からないけど・・・・・」

四人が裏に回ったちょうとそのとき俺は一階に下りて玄関の前でサンダルに履き替えていた。
玄関に人気がなかったので鍵を開けて玄関からそっと表へ出た。

「よし、誰もいねぇーな・・・・・」

念のために左右を確認し俺はそのまま小走りで門横のトラクターや農機具が置いてある車庫へと逃げ込んだ。

そして四人はその頃、一階の確認を終えてサツキの部屋のある二階へと上がった。

部屋の襖が開いていたので部屋を覗くがそこには誰も居なかった。

「サツキはー?」

「ダメだ・・・誰もおらん・・・・」

「きららさん、あなたは一体どこへ行ってしまったのか・・・・・」

「藤木その喋りかたキモい」

「うるっせーな!俺の恋に文句言うな!この三次元女!」

「なによこの変体オタ!!アンタ三次元には興味ないんじゃなかったの!」

「フッ、あれは特別なのさ!たとえれば三次元に現れた二次元!」

「ワケわかんないこと言ってるんじゃないわよ!」

「ゆみも藤木も静かにしろよ!」

「あ、ごめん・・・・」

「ところでサツキはどこに行ったんだ?」

「一階にはいなかったし、ここにもいないみたいだし・・・・」

「月島きららとかいう子もいないし」

部屋の中で話し合っている四人、そしてその頃俺は車庫から自転車を出してそっと門の出口に向かっていた。

「よーし、今のすきに・・・・・」

自転車を押して走り出したそのとき、ベランダに出たゆみが家をでる自転車のギリギリ後ろ姿を目撃しあわてて三人に伝えた。

「あッ！サツキ！」
「えッ？」
「サツキがいたのか？」
「早く！今自転車に乗って出てったよ！！」
「マジか！俺らも後を追うぞ！」
「サツキめーッ！とっ捕まえて拷問だ！！」

一向はあわてて家を飛び出し、急いでサツキの後を追いかけた。
だがそんなこととは知らずに俺は駅へ向かうためにのんきに農道を走っていた。

「はぁ～、なんとか脱出成功だ。ここまで来ればもう大丈夫だろう・・・・」

だがしかし何故あいつらはいきなり押しかけてきたんだ？まさか気づかれた！？いや、そんなはずはない！だってこの姿になってから藤木とじいちゃん以外の人間には決して顔を会わせてはいないからだ。

しかし何故アイツらは今日来たんだ？休日の方がやつらには都合がいいからか？

考えていても仕方なかった、とりあえず逃げる前に食料を買っておこうと考えた。
金は実はだいぶ前から親が仕送りしていたみたいで俺はそのことを忘れていた。

コンビニに到着し俺は自転車を店の前に停め、早速コンビニのＡＴＭでお金を下ろすことにした。
見ると、結構な額の金が溜まっていて驚いた。それもそのはず、俺が気づかない間に向こうからお金が次々と送られてきていたからだ。

「うお・・・８万円もあったのか・・・・これだけあればしばらくは安心だな。」

そしてその同時、そこへコンビニの前に四人がやって来ていた。
走ったのでゆみ以外の三人は少し息を切らしていた、その後から藤木がへろへろになりながらもやってきた。

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・ちょ・・・ちょっとまッ・・・・待って！」
「ゆ・・・・ゆみちゃん、足早！」
「はぁはぁはぁ・・・・俺も普段は運動部で鍛えてるけど・・・・きついな・・・・」
「あッ！サツキの自転車！」

ゆみはコンビニの前に止まっているサツキの自転車に気がつき、そこへ皆も駆けつけた。
ちょうどそこへＡＴＭから金を下ろし終えたサツキが出てきてまさかの鉢合せしてしまった。

「さーて、金も下ろしたことだし・・・・」
「あッ！きららさん！！」
「えッ！？」

その刹那、俺は頭の中が真っ白になった。そこにはゆみとヒロ、そして宮野と藤木が勢ぞろいしていたからだ。
思わず持っていたコンビニの袋が手から落ちた。

「（はぁーッ！？？）」

どうしてこうなった？なんでなんだ？家にいるんじゃなかったのか？

「えー？藤木くんこの子が・・・・・」
「サツキの・・・・彼女？」

やばい！非常にヤバイ！
この場をどうやって乗り切るべきか、誰がどうしてこんなことに・・・・一刻も早くこの場から姿を消したい。

「あッあのあなたが月島きららさん？・・・・・」
「・・・・うぇ！はッはい！！」
「か・・・・かわいい・・・・。」

俺を見たヒロとゆみと宮野は顔を赤くした。
すると突然藤木と宮野が俺に近づいてきたので思わず顔が真っ青に

なった。

やばい！どーする！？

近づいた藤木がなにをするかと思えば、俺の足元に落ちていたビニール袋を俺に渡した。

「きららさん、これ落としましたよ！」

「えッ！あッはァこりゃどうも！」

「あなたが・・・きららさん！」

「はッはいなんすか！？」

突然宮野が話しかけてきた。するとその刹那、いきなり俺に抱きつきほっぺたをすりすりしてきた。

その瞬間、俺は脳天に雷が落ちたかのような衝撃を受けた。

「何この子～♪かわいい～！！」

「（！！！？？？）」

「えぇぇぇーーッ？かおりちゃん！！」

その光景に後ろにいた三人も唖然、まさか宮野かおりに百合属性があるとは知らなかった。

あまりの衝撃に思わず鼻血が出そうになった。

後ろで見ていた藤木はすでに鼻血が滝のように流れているにもかかわらず、涼しい顔でまじまじと俺と宮野を興奮気味に見つめていた。

「ふおぉぉーッ！！これぞまさしく百合ジャストゥーッ！！！」

「じゃかましい！！」

ドガッ！

「ボブッ！！」

興奮した藤木を後ろからゆみが頭を殴って黙らせた。

「それにしてもサツキにこんなかわいい彼女がいただなんて以外だな」

「はぁ～ん♪かわいすぎるぅ～♪あなたほんとうにサツキくんの彼女なの？私の彼女にならなぁ～い？」

かおりは鼻血をたらしながら幸せそうな顔ですりすりする、何も出来ずに固まる俺。

それを見かねたゆみがかおりを止めに入った。

「かっ・・・かおりちゃん・・・・困ってるみたいだから離れて・・・」

「それにしてもホントにかわいい子ねぇ・・・・」

「きららちゃん？あなた本当にサツキの彼女？」

「えッ・・・あぁはい！一応はそんな感じです・・・・・。」

ここは何とかうまくごまかしてこの場からおさらばせねば、だがどうする？この状況・・・・。

内心パニック状態になっているそのとき、藤木は俺の同様にに何か異変を感じ取った。

「（きららさん・・・・何か変だな・・・・・・）」

藤木が怪しそうに後ろから見ていたのにひろが気がつき、藤木に問いかけた。

「おい藤木、どうしたんだ？」

「あぁ、いやなんかきららさん、誰かに似てるっていうかなんつーかな・・・・・」

「えッ？誰かに似てるって誰にだ？」

「やっぱり藤木、アンタもそう思う？」

「ゆみ？」

二人の話を聞いたゆみが混ざってきた。

「私もあった瞬間に誰かに似てるなー、とは思ってたけど・・・・」

「やはり岡崎もそう思うか、」

三人の怪しい視線に、俺は思わずなにか危険が迫っていることを感じた。だがそれが本当なのかは定かではなく、その三人の視線が危険だった。

「ちょッちょっとはなれてくださいよ！！」

「なんでよぉ～♪あなたは私のものよぉ～♪」

「勘弁してくださいよぉ・・・・ッ！！」

「チューしよ～！！」

必死に絡みつくかおりを放そうとそうるが絡んできてなかなか離れられない、恐るべし！百合属性！
半分うれしい半面、複雑な気分だ。
必死に絡み付いてくる宮野と格闘していると、突然ゆみが話しかけてきた。

「頼むからいい加減にしてくれぇッッ！！」
「きららさん！」
「なッなんすか・・・・！？」
「あなた、どこかで会った？」
「えッ？なッなに言ってるんだ！、あーじゃなくて・・・・知りませんよ！おれ、いや私は今日始めてあなたと会ったんですから・・・・！てかよぉ・・・・・お前らコイツをなんとかしてくれぇーッ！！」

「きららちゃんハァハァ・・・・きららちゃん！！」

十四、百合が怖い！？（後書き）

つづく

十五、逃れられない運命（前書き）

ひょんなことから俺、津山サツキは女になってしまった。それから俺は月島きららという名を名乗り、やつらに正体をばれないように過す毎日・・・・・だが

十五、逃れられない運命

絡み付いていたかおりはゆみとヒロの二人係でようやく引き離した。

「あぁん！きららちゃーん！」

「ちょっとかおりちゃん！気持ちは分かるけど落ち着いて！」

なッなんなんだ宮野のやつ・・・・コイツ百合だったとは知らなかった・・・・。

だがこれで逆に過激すぎる百合属性は恐ろしいということがあたに分かった、だがそんなこと別に知りたいとも思いたくもない。

「なぁところでさぁ、なんでここにサツキの自転車があるんだ？」

ぎくッ！

突然のヒロの言葉に俺は動揺した。

まずい！今度こそまずい！だがここで下手に動けばやつらに俺のことを気づかれる恐れがあった。

「そういえばホントね、これサツキの自転車だわ！」

「もしかしてきららさん、あなたが・・・・」

「えッ！あ、えぇ・・・・まぁ、俺ッいやサツキくんに使っていいって言われてたから・・・・・」

若干、顔が引きつりつつもなんとかごまかすことに成功した。

「そうだったの・・・・・じゃあサツキじゃなかったのか」
「ねぇきららさん、サツキは今どこにいるか分かる？」
「さぁ・・・・俺ッいや私も何も聞いてないもんで・・・・・ははは・・・・」
「そうか、まったくサツキの野郎！どこでなにしてんだまったく！！」

俺はほっと胸をなでおろした。
その後はうまいこと言って自転車で自宅へと戻って事なきを得たものの、やはり心配であった。
後になって気づかれたりしたら笑い事ではない。

だが一方で四人の中、俺のごまかしに異変を感じた者が二人いた。

そう、それはゆみと藤木だった。
藤木は一人考えていた、先日あったきららさんとは何かが明らかに違っていることに。
よくよくかんがえてみれば最初に会ったときから挙動不審な動きをしていたように思った。

「ウーン・・・・・」
「どうした二人とも？浮かない顔して・・・・・」
「うん、いやね・・・・・サツキの彼女なんだけど、なんか似てるんだよね・・・・・」
「やっぱり岡崎もかッ！きららさん誰かに似てるような気がしててなぁ・・・・・」
「誰かってだれにだ？」

「それが分からないのよ！・・・・でも誰かに似てるのよね・・・・私たちの知っている誰かに・・・・・。」
「誰だっけなぁ・・・俺たちの身近にいるやつにしぐさや行動が似てるっていうか・・・・」
「そうか？俺にはよく分からんが？」
「やっぱり気のせいかしら・・・・」
「そうよ！きららちゃんは私の中では特別な存在なのよ～♪だから二人いるなんてありえないわぁ～！！」
「いや、そんなドッペルゲンガー的な意味じゃないと思うぞ・・・・」
「やっぱり気のせいかな～、私たちの身近にいる誰かに似てるような気がするけど・・・・・」
「まぁ考えてても仕方ないだろ、腹減ったしみんなでファミレスでも行くか」
「そうね！」
「よーし、ドリンクバー全部混ぜるぜぇ～！！」
「またやるのか藤木ｗ」
「あったりめーよ！全部の味が一つに味わえるんだぜ！」
「腹壊すぞ・・・・」

だが内心は一番怪しく思っていたのは藤木であった。
そしてその日の晩、サツキは結局家を出ることはく、家にとどまっていた。

晩飯時、俺は居間でじいちゃんとテレビを見ながら飯を食った。
今日は久々にじいちゃんがうなぎの出前を取ってくれて一緒に食っていた。

相変わらずどのテレビ番組も似たようなことばかりで面白くない。
芸能人が愛だの恋だの言ってるだけ、くだらない・・・・。

結局はなんだ?Hがしたいだけだろうみんな、たった一度きりの快楽を求めて、馬鹿みてぇ・・・・・。
そう思いながら俺はうなぎと飯を食った、チャンネルを回しても同じような番組ばかり。

「はぁ〜・・・・クソおもろないわ・・・・・。」
「どうかしたのかサツキ?」
「えッ!あ、いやなんでもないよ」

白飯にうなぎのタレがしみこんで美味かった、このときだけはなんだが自然と穏やかな気持ちになれた。
だが、そういう気分になっていられるのはこの時だけだった。
俺はまたいつもどおり風呂に入る、だが目隠しはせずメガネを鏡の前に置き、頭からお湯をかぶった。
一つため息をつき、俺はふと鏡の前の自分の顔を見た。

何故自分はこんな姿になって、こんな思いをせねばならないのか、だがそれを誰にも責めることはできない。
俺は必死に考えるのをやめようとまた桶でお湯をかぶり、頭の泡を落とした。
そして俺は湯船につかりながらボーっとしていた。考えることをやめたら他にすることがなくなってしまったからである。

ふと俺はどういうことか、自分の胸を見た。
普段なら人目見ただけで鼻血ブーというところ、今回はなぜか鼻血は出なかった、いや、そういう気持ちにはならなかったからだ。

「小さいなぁ・・・・これが貧乳。」

なにをばかげたことを呟いているのか、俺は・・・・自分で自分に突っ込む。

でも、驚いたことが一つだけあった。俺は貧乳好きなのに鼻血が出なかったことだ。

翌日は昼間っからアニメを見ながら部屋の布団の上で二次元女子高生の抱き枕に抱きついてゴロゴロした。

なにも考えず、ただその時を自堕落に過していた。

もちろん、ここを出ようと考えたがよくよく考えてみればここから逃げたらもう彼女たち（二次元美少女）には会えない。俺の嫁たちと離れ離れなんて、そんなのは嫌だった。

でもどうすればいいかわからない、ただただ時だけが過ぎ去ってゆく。

そして一方で学校ではその頃、時を同じくして教室四人が集まりゆみが騒いでいた。

「やっぱり怪しすぎるわ！月島きららっていう子！」

「怪しいって言ってもなぁ・・・・」

「きららちゃんは十分に不思議っ子よ！あのかわいさは異常！」

「何を言ってるんだ宮野は・・・・」

「だってメガネっ子よ！おまけにちょっと困ったようなあのしぐさ！！はぁはぁ！」

「いや、メガネ属性なのは分かるが他はもう変体じゃねーか！」

「藤木くん！変体とは違うわ！これは愛よ！！」

きらきら輝くかおりに藤木とヒロは絶対にそれはないと思っていた。

「やっぱり似ているわ・・・・あの子・・・・」

「誰に?分かったのか?」

「いやまだはっきりとはじゃないけど・・・・あのきららちゃんて子、なんだがサツキと似ているところがあるなって思って・・・・」

「えッ?サツキと・・・・」

「あッ!!そういえばそうだ!!」

藤木が大声で反応した、ようやく頭の中で引っかかっていたつじつまが合ったからだ。

「やっぱりアンタもそう思う?私も始めは疑ったけど、でもなんか雰囲気だけじゃなく、行動やしぐさもそのまま・・・・」

「それもそうだな・・・・普通彼女が彼氏に似るか?俺思うんだけどさぁ、きららさんてサツキじゃね?」

「そんなわけねーだろ!」

藤木の言葉にヒロは首を振った。

「何言ってるのよ!きららちゃんがサツキなワケないでしょ!」

「じゃあ女装してるのか!?サツキのヤツにそんな趣味があっただなんて・・・・」

「あいつにそんな趣味あるわけないでしょ!第一もしそうだったら声で分かっちゃうわよ!」

「でもさ藤木よぉ、きららちゃんがもしサツキだとして本当にそう

思うか？きららちゃんTシャツにジャージだったぞ・・・・」
「はッ！そういえば・・・美少女なのになんか惜しいなぁとは思っていたけど」
「そういや服がサツキの私服姿だったし、メガネかけているところだってサツキとそっくり！」
「・・・まさか・・・きららちゃんが・・・・サツキ？」

藤木のその言葉に一同はそれはないと思った、それもそうだ、現実にそんな話は聞いたことがなかったからだ。

「確かにきららって子、アイツと似てるとは思うけど・・・・それはないと思うけどなぁ」」
「え？私には分からないけど・・・・・でもきららちゃんがサツキって本当なの？」
「いや、それはまだわからんが・・・・・でもどうも引っかかるんだよなぁ・・・・つーかそもそもなんであんなさえないオタク野郎なんかに彼女がいるって話だ！！」
「いや、あんたも大概・・・・」

まだこれから起こるであろう、異変には気がつかない四人と一人、そしてサツキの友達でもあるアキラに今、魔の手が伸びようとしていた。

政府の地価秘密研究施設、そこに一人のある男が現れた。
その男はこの施設の関係者ではない、男は近くにいた関係者の人間を襲い、気絶させてその隙にＩＤカードをその人間から抜き取り、地下施設へと侵入した。

だが案の定、何十にも仕掛けられたセキリュティの一つに引っかかり、研究所内に警報と火災報知器のベルの音が鳴り響いた。

ヂリリリリリ・・・・・・

「～非常活動機作動～非常活動機作動～侵入者反応あり、非常警戒態勢に入ります～」

「くッしまった!!警報の電源が回復したかッ!!」

そして警備室では警備員たちが対策に追われていた。
男の策略か、研究所内のすべてに設置されたカメラがまったく映らない。

「おい!どうなってるんだ!侵入者は何処だ!モニターはまた回復しないのか!」

「ダメです!おそらくは、回線をやられたか・・・・・復旧にはだいぶ時間がかかります」

「クソぉ!こなったら連絡通路内の格防火壁をすべて下ろせ!」

いっせいに防火壁が閉まってゆき、主な連絡通路は封鎖された。
だがあらかじめそれを予知していた根岸博士と藤崎ミナコ教授はアキラを連れて研究所から緊急用避難通路を通じて外へ脱出していた。
アキラたち三人が出たのは世田谷区下町の住宅街路地裏のマンホールからだった。

根岸はマンホールを開けて後から来たアキラと藤崎の手をとって引き上げた。
藤崎とアキラは外を見て驚いていた。

「ほらッ、大丈夫か？」
「よいしょっと・・・・ここって！・・・・住宅街？」
「すごい！こんなところに繋がっていたなんて・・・・」
「ああ、緊急避難用通路だからもしものときとのために都内のどこにでも通じているんだ」

政府は緊急時のため、関係者や研究員がすばやく外に出られるように、都内１８ヶ所に通じる避難用の通路を作っていたのだ。
実は先日、偶然にも幹部、内通者の会話を聞いてしまった根岸博士は過激派がアキラとサツキを狙っていることを知り、あらかじめ通路の出口付近に車を停めてきていたのだった。

「で根岸君、これからどうするの？研究所はあのありさまだし・・・・」
「あっちに車を停めてあるんだ、さぁ行こう」

住宅街横の空き地に佐々木電気商会と書かれた中古の軽バンが一台止まっていた。
運転席に座った根岸はキーを挿してエンジンをかけた。

「根岸君、どうしたのこの車？電気屋さんから借りてるの？」
「いや昨日中古車屋で一番安いのを買ったんだよ、とにかく今はそんなことよりコイツをどこか安全なところに・・・・」
「一体どういうことなんですか？」
「アキラくん、落ち着いて聞いて！君は悪い人たちに狙われているのよ！」

「狙われているって、どういうことですか？」
「まだはっきりとしたことは分からないけど、でもあなたの身が危ないことは確かよ！」
「藤崎、ひとまずここを離れた方がいい。通路から追っ手がくるかもしれんし」
「分かったわ根岸君、でもこれからどうするの？」
「品川のほうに知り合いが昔使ってたアパートの空き家があるんだ、しばらくそこに隠れよう！」

そうして車はそこから走り出した。

十五、逃れられない運命（後書き）

つづく

十六、スクランブル（前書き）

追われる人、追う人、そしてそれを追い詰める者達。

十六、スクランブル

「なにィーッ！！逃げられただとッ！！この馬鹿モンがッ！！」
「でッですがドクター！実験棟の配管から何者かが出入りした形跡がありまして、おそらくはそこから逃げたものと・・・・」
「逃げてからそう時間は経っていないはずだ、まだ近くにいるはずだ！追え！」
「分かりました。しかしそうなると残る二名は？」
「かまわん、殺せ！この計画を知られた以上、生かすわけにはいかん！！なんとしても殺せ！」
「了解。」

男はベレッタＭ９２Ｆ（拳銃）を持って配管に入り、アキラや博士たちの後を追った。
だが一方でその頃、アキラや博士たちは隠れ家へ向かっていた。
藤崎が携帯電話で外に連絡しようとしていたのを見た根岸はあわてて携帯を取った。

「あッ！ちょっとなにするんですか！！これじゃあ助けが呼べないじゃないですか！」
「無駄だよ！連中はおそらくすべての電話回線を監視している、外に連絡すれば我々の居場所などすぐに見つかってしまうんだ！」
「そ・・・・そんな・・・」
「とにかく今は逃げるしかない！逃げてなんとか打開策を考えねば・・・・」
「あの博士！」
「どうしたアキラくん？」
「僕が今狙われているのは分かりましたけど、だとしたらサツキく

んも危ないんじゃ・・・・・」
「そうだった!!早く彼に連絡を取らないと・・・・」
「でも根岸君!携帯は使えないのよ!どうやって連絡するの?」
「公衆電話なら大丈夫だ、彼もさすがにそこまでは監視はしていないはずだ。そうだ、ついでに食料も買っておかないと!」

近くにコンビニがあったのでしばし車を止め、根岸は車から降りると急いで入り口横の公衆電話にカードを挿して電話をかけた。
その間アキラと藤崎はコンビニで食料やお菓子をかごに入れていた。

そしてその頃、俺はといえばトイレに入って便器の上に座り、腕を組んで一人考え込んでいた。
俺には確信はないが、男に戻る一つ良い考えがあった。

あの薬をまた飲めば、もしかして俺男に戻れるんじゃないのか?
だってそうだろ、男の俺が飲んだら女になったんだから、逆のことをすれば元に戻れるはず!

てことはまてよ、逆にもともと女だったヤツが薬を飲めば逆に男になるってことか?
俺はふとゆみとかおりが男になった姿を想像してみた・・・・。
なんだかそれはそれで嫌だなぁ。

そんなくだらないことを考えていると、階段横の黒電話のベルが鳴った。
音に気がついた俺はまさかアイツらがかけて来たのかと思った、でもまだ俺の正体はばれていないはず・・・俺は息を吐いて受話器

を取った。
だが、公衆電話をあらかじめ監視していたとは知らずに根岸は電話をかけてしまった。

「ドクター！通話反応がありました！！」
「よし！すぐに逆探知しろッ！笹本に連絡を」
「はッ！」

「はい、もしもし？津山です。」
「サツキくんかい？」
「えッ！その声は根岸さん？」

相手は根岸さんだったので一安心した、でもなんで突然電話なんて・・・。

「もッもしかして元に戻る方法が分かったんですか！？」
「いや、すまん・・・そうじゃないんだ。実はサツキくん、君に話しておかなければならないことがあるんだ、」
「えッ？どういうことっすか？」
「いいかい、落ち着いてよく聞くんだ！君は狙われている！」

はッ？
俺は根岸さんが一体何を言っているのかワケがわからなかった。
狙われているって一体どういうことだ？

「ねッ狙われてる？どういうことですか一体！？」

「さっき我々の研究所に組織の侵入者が現れたんだ、おそらく彼らの狙いはアキラ、そして君だ！」
「ちょッちょっと待ってくださいよ！何のことだかさっぱり・・・・・組織ってなんですか！」
「反政府グループ、又は過激派テロ組織といった方が早いか・・・・」
「過激派・・・・テロ組織！？なんでそんなのが俺を・・・・」
「話せば長くなるが、おそらく君が飲んだあの薬だ、彼らはあの力を利用しようとたくらんでいるんだ！」
「ちッ力？なんだよ力って・・・・何言ってるんだかわかんねーよ！」
「サツキくん！いいかい、近いうちに組織の人間が君をさらいにやってくる！だからその前に君も早くどこか安全なところに」
「えぇ？分からないよ何言ってるか・・・・・俺とアキラが狙われてるって・・・・」
「すまない、もう時間がないんだ・・・・」
「えぇッ？ちょッ・・・・」

電話が切れた。
俺とアキラが狙われてる？組織の人間って何だよ！嫌な予感がし、受話器を持つ手が震えていた。
そしてドクタールミス率いる組織の人間の逆探知により、根岸の居場所が確定していた。

「逆探知完了！」
「場所は！？」
「場所は・・・・目黒区、中町一丁目のコンビニ公衆電話からです！」
「見つけたぞ！根岸・・・・すぐ現場に笹本を向かわせろ！」

そっと受話器を置き、俺は考えた。今何が起こっているのかまったく実感がなく、これからまず自分が何をすべきか、何をやるべきでないのか・・・・。
答えは一つしかない。

考え付いた俺は急いで階段を駆け上がり、部屋に入ると唐草模様の風呂敷に着替えとノートPCとマンガ本2冊を入れて、家を出るしたくを始めた。
桃のダンボール箱に昨日買った食料品や水、携帯ゲーム機等を入れて風呂敷を背負い、机の引き出しから火薬で作動するように改造を施した自動拳銃型モデルガンを一丁出してジャージの後ろの方に差し込んで入れた。

最後に俺は机の上にある一番のお気に入り、嫁のふたばちゃんのフィギュアを大切に専用の化粧箱に仕舞い、ダンボール箱に詰めて階段を下りた。
そして玄関の横にダンボール箱と風呂敷を置いて自転車を倉庫から出しに行こうと玄関の戸を開けた。

「あッ!!」
「きららさん!」
「ふ・・・藤木!」

外へ出ると、玄関の前に藤木の姿があった。
再びピンチ状態、変な汗が滝のように流れ、言葉が出なかった。

「あッ・・・・あぁ・・・・・」
「きららさん、今日も来てたんですか・・・・」
「えッ！えぇッ・・・・まッまぁ・・・・暇なもんで・・・・」

引きつる顔で俺はそう答えた、まずい！これはまた非常にまずいことになってしまった。
何故藤木が突然尋ねてきたのか、まさかなにかに感づいたとか・・・・そんな馬鹿な・・・・。

内心、そんなことはありえないと思ってはいたが次の藤木の言葉に思わず顔が真っ青に染まった。

「そうなんですか・・・・あの、きららさん！」
「はッはい・・・・」
「突然で何を言っているのか分からないとは思いますが、単刀直入に言います！あなたは津山サツキですかッ？」
「えッ！！！？」

まッまさか・・・・そんなバカな、この俺の正体に気がついたというのか・・・・？
いや、そんなはずはない！だってまだ他にはバレてもいないし、第一、藤木のヤツが俺を二十四時間ストーカーみたいに監視するはず・・・・・あるッ！！
たしかにアイツほどのバカはこの世に数少ないが、以前、丸一日同じクラスの女子一人を罰ゲームでストーカーしたことがあったな、校内だけだったけど。

まさかそれがエスカレートして、真のストーカーに目覚めてしまっ

たというのか!?二次元では飽き足らず!!

頭の中でどんどん妄想が膨れ上がっていた、あいつは俺のことをすでに知っていた。それ以外に考えられなかったからだ。

俺は何も答えられなかった、ただただ沈黙を続け俺は藤木の問いかけに一切答えず、歯を食いしばった。
刹那、俺は藤木の静止を振り切ってそこから全速力で走り出した。

逃げなければ、もうここにはいられない!アイツにばれたらもうお仕舞いだ。
アイツは人の秘密を平気で当たりかまわず言いふらすようなヤツだ、俺は終わったんだ、終わってしまったんだ。
俺はひたすらに声を上げながら住宅街から抜け、農道を突っ走った。

「うおおおおおお!!!」
「まてーッ!!」

だが後ろを振り返ると藤木が自転車に乗って追いかけ手くるのを見て驚いた。
必死に走るもあっという間に追いつかれ、藤木は自転車で前に出て俺の行く手をふさいだ。

「うッ!」
「やっぱり・・・・お前サツキだろ。」
「なッなにいてんだよ!俺はッ・・・・・あッ!」
「もうバレバレだよ、サツキ、大人しくしろ!」

「くッ・・・・・」

絶体絶命、自転車を降りて近づこうとしたので俺は後ろから改造モデルガンを抜き取り、銃口を藤木に向けた。

ガチャッ

「こんなところで終わってたまるかよッ！！」

「なッ！！？」

「ふ、バレてしまったからにはしかたねぇな、だったらてめぇを抹殺するまでだ！」

「サツキ！まて、落ち着けよ！！何があったんだよ！」

「うるせぇッ！！正体を知られた以上、死んでもらうぞ藤木！」

「落ち着けよ！サツキ！誰にも言わねーから！」

「へッ、そんなこと信じられっかよ！、ここでお前を逃がしたらお前はきららさんはサツキだったって周りに言いふらすつもりだろぅが、そうはさせるか！」

「絶対に誰にも言わねーって！だから銃を下ろせ！」

「それはどうだろな？」

「頼むから落ち着けよ！」

俺はこのとき完全に吹っ切れていた、こうなった次第命を捨てる覚悟があった。

そろりそろりと歩み寄ってくる藤木の足元に一発撃ち込んで威嚇発砲した。

バァーーン！！！

「うおィッ!!」
「来るな!」
「分かった!分かったから撃つな!タダでさえ殺傷能力高いんだからよ!」
「どっちみちお前は死ぬんだよ!真実を知ってしまったからな!」
「待てよ!もし俺を殺したらお前は捕まるぞ!」

藤木がそういうと俺は微笑を浮かべ、自分の頭に銃口を突きつけた。

「だったら、俺も死ぬまでだ・・・。」
「まッ待てよ!話せば分かるって!友達だろ!」
「うるせぇ!!死んでやるよ!!」
「頼むよ!俺ほんとに誰にも言わねーからさ!!」
「ほう、本当か?だったらゆかりん（アニメキャラ）に誓ってもか?」
「あぁ!ゆかりんに誓っても!!だから銃を下ろせ!な!」
「本当だな?嘘だったらお前を殺して俺も死ぬ!」

その後、条件付でなんとか説得に応じ、俺と藤木は和解した。
そして俺は藤木にすべてを話した、どうして女になってしまったのか、今までどうしていたのかなど。

「なるほどなぁ、その薬を飲んでしまってお前は女に性転換したってワケか・・・・でも信じられないな、男が薬で女にるなんて・・・。」
「俺も最初は何が起きたか分からなかったよ、翌朝鏡の前で自分の顔見てよ、頭ん中真っ白になったわ。」
「でもよサツキ、なんで最初に言ってくれなかったんだ?」

「言ったところでおめーらが信じるかよ?」
「それは・・・・」
「まぁいいよ、俺明日にも姿消すから。」
「姿を消すって、どこに行く気だよ?」
「それはわからねぇ、さっきおめぇが来る前にその博士から電話があって、俺が狙われたるいっていうんだよ。」
「狙われてる?どういうことだよサツキ!」
「詳しいことは俺も知らねぇ、ただヤバイことが起こってるのは確かみたいだ。」
「それでどうすんだよ、行く宛てはあるのか?」
「無いな、でもまぁ東京に行けばとりあえずは何とかなると思うからさ」
「そうか、なあサツキ」
「何だよ?」
「お前今どんなパンツ穿いてんだ?」

真剣な顔で藤木は俺にそう答えた。イラっときた俺は藤木の頭に銃口を押し付けた。

「俺が女物のパンツ穿いているとでも思ってんのかこの野郎?」
「じょ・・・冗談だってば!」
「もう二度と下らんこと聞くなよな、それと・・・もし俺のことをアイツら(ゆみ達)に言ってみろ?そん時はお前をぶっ殺すッ!!」

俺は殺意をむき出しにして藤木を脅した。

十六、スクランブル（後書き）

つづく

十七、梅雨の足音（前書き）

七月に入り、雨の中を一人の男がサツキの家に訪れた。

十七、梅雨の足音

あれから二日、
初夏の始まりということなのか、生憎の雨模様。
灰色の空の下、雨の降る中を一人の男が傘をさして俺の家にやってきた。

そして俺はといえば、相変わらずその日をただひたすらに生きるだけ、ボーっとしながら一階居間で寝転がってテレビを見ていた。

ガンガンガン!!ガン!

「ん?」

誰かが戸を叩く音が聞こえ、俺はそっと玄関に行き、戸をそっと開けた。

「よう!俺だ!」
「なんだお前か・・・・・」

玄関の前に立っていた男は藤木だった、俺はあの時藤木に俺に会うときの合言葉のようなこと、戸を叩く音の回数で暗号を考えて教えていたのだ。

「誰もついて来てねぇーだろうな?」
「大丈夫だ、俺一人だけだよ!」

「誰もいないな、よーし早く入れ！」
「おじゃましまーす」

安全を再度確認し、俺は藤木を家に入れた。
そして早速本題に入った。

「ようやく分かったよ、お前が掲示板に書き込んだ意味不明の文面の内容が、これでようやく辻褄が合ったってことだ」
「でもよ、結局ネットじゃ元に戻る方法は分からなかったんぜ」
「国家機密の薬なんだから当たり前だろ！しかしお前以外にももう一人男の娘がいるとは・・・うふっ♪」
「うふっじゃねーよ！てかその男の娘って言い方はやめろ！！」
「なんでだよ？俺も一度その子に会ってみたいなぁ～ｗｗ」
「藤木、言っとくがお前も分かってるだろうがそいつも中身は男だぞ？お前ＢＬに目覚めたというのか？」
「バカいえ！！私はお前と同じ二次百合一筋だ！！ゲイなんかに決してならんぞ！！」
「まぁいいけどよ、ところでこれからどうするか・・・・・この雨じゃなぁ・・・・・」
「今は梅雨の時期だから仕方あるまい、時期を見てここを出るか・・・。」
「ねぇサツキちゃん」
「ちゃん付けすんな、殺すぞ貴様？」
「冗談だってば・・・・・ところでサツキよ、俺も一緒についてっていいか？」
「はぁ？なんでお前が、まさか変なこと考えてんじゃねーだろうな？」
「ちがうって！いくら俺でもそんなことするわけねーだろ！」

俺は藤木の顔を怪しそうに見た、だがこうなった際、コイツも一緒に連れてくしかない。

「わかったよ、でもお前どうすんだ？親が心配するぞ？」
「その件に関しましては心配ご無用！すでに手は討ってあります！俺の計画では問題ナッシング！」
「お前の計画だからこそ心配なんじゃねーか！」
「なぁそこを頼むよサツキ～♪」
「あーもう～！分かったからそのオカマみたいなしゃべり方やめろ！」

結局話が進み藤木のバカも一緒に行くとこになった。ただこいつは一体なにをたくらんでいるのか・・・油断ならない。

「しかしサツキ、月島きららってなんだよ！」
「知るかよ！あん時とっさのことだったからそれしか思い浮かばなかったんだよ！！」
「お前月島きららってあの某少女漫画に出てくるアイドルのキャラの名前だぞ！」
「あッ！そういやそうだな・・・てかよところで前にお前に貸したギャルゲーがまだ戻ってきてねーんだけどな」
「まぁ、こんなかわいい子がギャルゲーだなんて・・・・」
「殺すぞてめぇ・・・」
「いや、すまんすまん！それなら明日渡すからそれまでしばし待たれ」
「ったく、しゃーねーな・・・・明日必ずだぞ！」
「任せてください！サツキさま！」

すると突然、電話のベルが鳴った。
サツキはいそいで電話の受話器をとった。

「はいもしもし、津山ですが?」
「~サツキくんかい?~」
「ねッ根岸さん!」

予想はしていたがはやり根岸からの電話だった。
公衆電話からかけてきていた。なにやら少し心配性にしゃべっている。

「根岸さん、一体どうしたんですか?」
「~いやぁすまない、こっちもいろいろとあってね、ところでまだヤツらの仲間は来ていないかい?~」
「ヤツら?・・・てなんですか?もしかして昨日話した例の・・・」
「~そうだ、なにもまだ無ければいいんだけど~」
「それなら大丈夫っすよ、まだウチには誰も怪しい人は来ていませんから・・・一人を除いては・・・」
「~えッ?~」
「あッ!いや、こっちの話ですよ!とにかく今は大丈夫です」
「~そうか、それならよかった・・・でも急いで君もそこを離れた方がいい、もたもたしていると君もヤツらに捕まってしまう~」
「分かってます、あのところで根岸さん」
「~どうした?~」
「これは俺が勝手に思ってることなんですが、俺がもしまたあの薬を飲んだら逆に男に戻れますかね?逆に女が男になるのと同じ原理

で・・・・」
「～いや、それはない・・・・あの薬は実験上アキラに二度飲ませたが変化は無かったんだ・・・・すまない・・・・～」
「いっいえ、いいんですよ！前から気になっていたんで、詳細が分かっただけでよかっす・・・・」
「～そうか、まあ方法が分かった必ず最初に君に知らせるよ！だからそれまで絶えてくれ！、あとそれから君に少し頼みたいことがあるんだが・・・・・・～」
「なんですか？」

その頃、組織の人間が黒いワゴン車で八王子の方へ向かっていた。車を運転しているのは一人の金髪の見る限りイケメン男、その男の名は柿野圭一。そう、彼もドクタールミスの手下であった。

柿野が車を運転していると、突然彼の携帯電話が鳴った。柿野はハンドルを握りながら電話に出た。

「もしもし？」
「～私だ。～」
「ドクター、？なんすか？」
「～どうだそっちは？まだターゲットには接触してないらしいな～」
「そうあせらないでくださいよ、なぁーに、問題ありませんよ、」
「～作戦前に渡した写真はお前も見ただろうな？～」
「見ましたよ、なかなかかわいい子じゃないですかぁ」
「～いいか、なんとしてもそいつを捕らえろ、それがお前の仕事だ～」
「分かってますよ、ま、見ててくださよ、俺にかかれば彼女のハートはイチコロっすよw」
「～いいか！くれぐれも・・・・」

ブチッ

柿野は携帯を切り、バックミラーに貼った隠し撮りのサツキの写真を見てスピードを上げた。

「ふーん、津山サツキちゃんか・・・好みのタイプだなぁ、しかし彼女が何をしたのかは知らないけど、ま、アイツ（ドクタールミス）の命令だし、しかたないかー」

実は柿野はサツキが本当は男であるということをルミスから知らされていなかった。
柿野はサツキを一目見て気に入り、仲間には内緒でサツキを自分の新しい彼女にしようと考えていた。

そしてその頃、自分の部屋で藤木と二人で格ゲーをしていたサツキが突然、寒気を感じて鳥肌を立てていた。

「うッ・・・」
「どうしたのだサツキ？」
「いや、なんだか寒気がしてな、なんでもねぇーよ」
「そうか、ところでさっきの電話・・・」

先ほど自宅にかかってきた根岸からの電話、実はサツキはある重要なことを根岸らからお願いされていた。

「～サツキくん、君に頼みがあるんだ～」
「なんですか頼みって？」
「実はヤツラの本当の狙いは君が飲んだあの薬なんだ、そこで君に頼みがあるんだ。甲府にある研究所に例の君が飲んだ薬品のサンプルを置いてある、その薬を誰にも見つからないように君自身が僕達のところへ持ってきてほしいんだ！！もちろん、絶対にヤツラに渡してはならない！！」
「えぇッ！？東京までッ！？あの宅配とかじゃダメなの？」
「おそらくヤツラは物流系統もすべて監視している、もしあの薬が彼らの手に渡ったら大変なことになってしまう！なんとしてもそれだけは避けたい！だから頼む！決して彼らの手に渡してはならない！」
「はッはいわかりました」

「どうすんだサツキ？命がけの大役を任されたってワケだが・・・・」
「俺もうどしたらいいかわからねぇ、でも根岸さんたを見捨てるわけにはいかないし・・・・」
「まったく、しょうがねーな！俺も付き合うぜ！」
「藤木・・・・・。」
「サツキ・・・・・・・・チュー！」
「やめんかバカッ！！」

バチッ！

「ヘンデバァーッ！！」

少子に乗ってサツキにチューをせまった藤木だがサツキにビンタを喰らってぶっ倒れた。

「藤木！なんども言うようだが俺は男だ！！」
「でも見た目は女じゃん」
「体はどーだろうと俺は男だ！！」
「わかったよ・・・・悪かったって落ち着けよ！」
「次また下らんことやったら締め上げるぞ？」

俺と藤木がふざけあっている頃、品川の古いアパートでは、部屋の一室で藤崎ミナコとアキラが根岸の帰りを待っていた。
すると突然部屋のドアの鍵が開いて根岸が近くの公衆電話から戻ってきた。

「ただいま」
「どうだった？」
「大丈夫、彼らには今のところは見つかっていない」
「よかった、あッでも公衆電話からじゃ・・・・」
「それは問題ない、あらかじめ電話をかける前に回線に情報を遮断する装置を取り付けておいたから、でもここにずっととどまるわけにもいかないしなァ・・・・」
「あッあの根岸博士！サツキくんは・・・・」
「心配ない、まだ彼は無事だ、とりあえず彼にあの薬をここへもってくるように伝えておいたから」
「そうですか・・・よかった、サツキくんも無事なんですね！」
「だが油断はできない・・・ここにいればいずれは彼らに発見されてしまうのは目に見えている・・・・。」
「・・・・大丈夫かなァ～・・・・サツキくん・・・・。」

ミナコやアキラの心配をよそに、相変わらずサツキはだらしなくふざけあっていた。
彼らもいつまでもこの時が続けばいいと思っていた。だがすでに魔の手はすぐそこまで伸びてきていた。
俺達の知らない間に・・・・。

十七、梅雨の足音（後書き）

つづく

十八、逃走と追跡（前書き）

暑いですね・・・・・ホント・・・・・・。また早くも新キャラ登場？

十八、逃走と追跡

「根岸はまだ見つからんのか！！」
「はい、目黒区内一部に非常線を張りましたがまだやつは現れていないようです」
「クソ！ヤツめ、このまま雲隠れするつもりだな・・・・だがそうはさせん！！」

するとルミスはどこかへと電話をかけた。

「私だ！幹部会の人間が殺された、大至急首都圏全域に指名手配しろ！非常事態だ！」

そういうとルミスは受話器を戻し、微笑を浮かべた。

「根岸、もうおまえはどこにも逃げられない・・・・・くっくっく」

雲行きが怪しくなる中、そんなことなど知る由もない根岸は食料の買出しのために藤崎とアキラをアパートに残して食料や衣類の買出しのために外出していた。

そして彼はコンビニの前の電話ボックスに入ると、食料や衣類が入った紙袋を足元に置くと、どこかへと電話をかけ始めた。

「頼む出てくれ！頼む！・・・・・。」

小さな声でそう呟きながら受話器を耳に当てた、しばらくプルルルという音が続いた後、ようやくどこかへと繋がった。

ガチャ～

「～ハイもしもし?秀子でぇ～す～」
「よかった!起きてたか!」
「～あれ、その声はもしかしてそういち?～」

電話の向こう側から女の声がした、根岸が電話したのは彼の同僚、友人の科学者、浦島秀子（本名、浦島秀吉）
今回の騒動の原因となったあの薬を開発した張本人だ。
彼女も元は男だったが、根岸らと共同開発した薬を自らが実験台になって飲んだため現在は女になってしまっている。彼は現在東京の高校で科学の授業を教えているが現在は休みで実家の同じく山梨にいた。

電話の向こう側からのんきそうな声がしていたので根岸はほっとした。
秀吉は突然電話をかけてきた根岸にワケをたずねた。
そして根岸は秀吉に事情は説明し、サツキを保護するように頼んだ。

「分かった、そういうことなら任せろ!」
「～ありがとう秀吉・・・恩に着るよ～」
「心配すんなって、しかし俺とアキラくん以外の一般人があの薬を飲んだとはな・・・・俺がちゃんと管理しておけばよかったものを・・・・」

「いや、あれは俺にも責任がある。だからお前も・・・・」
「分かってるって、とりあえず後のことは俺に任せろ！そっちもタダことじゃねーんだろ！」
「～すまない、じゃあたのんだ！～」
「おう」

根岸は受話器を戻し、紙袋を抱えて車に戻った。
だがその様子を街路樹の陰から一人の男が見ていた。するとその男はその場を立ち去り、無線を取り出して連絡をした。

「私です、根岸を発見しました。」
「よしいいぞ！そのままヤツを追跡しろ！」
「分かりました。」

首都圏全域にはルミスの手下が根岸たちの捜索のためにあらゆる場所で監視していたのだ。
そして男は無線を切ると、近くに停めておいた大きな黒のバイクに跨ると、ヘルメットを被り、そこから勢いよく走り去って根岸の車の後を追った。

一方で見つかったとも知らずに根岸は交差点の赤信号の前で止まっていた。
すると後からあのバイクが現れ、根岸の車のすぐ後ろに止まった。

根岸は車の中で落ち着かず、ハンドルにもたれかかって周囲をきょろきょろと見回していた。
彼はふとバックミラーを見ると、後ろには怪しい黒のバイクが一台止まっていた。
この時点で異変を感じた根岸は前方の信号が青に変わると、ゆっく

りと交差点を通過して走り出した。
そして同じくその後を追って黒のバイクもゆっくりと走り出した。

流石に後ろのバイクを少し怪しく思った根岸はアクセルをゆっくりと踏み、車のスピードを少しずつ上げた。
すると同じく後ろのバイクもゆっくりとスピードを上げ始め、ためしに根岸はハンドルを切って左の道へと入っていった、すると同じく黒いバイクもその後を付いていった。

このとき根岸はヤツらにきつかれことに気づき、いきなり車のスピードを一気に上げた。
案の定、後ろのバイクもスピードを上げて追いかけてきた。

「やばい！気づかれてたか！」

根岸はあわててハンドルを右に切って横の一方通行の道へと入った。
だがまだ黒バイクはしつこく付いてきてくる。
このままでは捕まってしまう、根岸は焦りながら今度は左へ曲がり、そこから大通りへと飛び出した。
一般車の間をすり抜けながら逃げた、そして後から黒バイクが大通りへと飛び出した。
だが信号を過ぎたところで根岸の車を見失ってしまい、根岸はこの危機から何とか脱した。

「なに！！またまた逃げられた！？」
「相手に気づかれていたようで、山手通り付近で車を見失いました」

「クソ！それで手がかりは？」
「乗っていた車は中古の軽バンです、ナンバーは世田谷、はの・・・・」
「よし分かった、後は俺がやる、お前は本部に戻れ」
「了解」

ルミスは焦っていた、なんとしても実験体と関係者を捕らえて秘密を守らねばならなかった。

「クソ！己！ちょこまかと！」
「だいぶ苦戦しているようだな、ドクター」
「あッあなたは！・・・・総帥・・・・何故ここに！」
「運命というものはいつも皮肉なものだ、自らが捕らえた獲物でもそれに上手をとられればそれこそ命取りにもなる・・・・彼らは知ってしまった、真実を。」
「だから捕まえるのです！このままでは我々は彼らに陥れられてしまいます！」
「期待しているぞドクター、もしも真実が明るみに出れば私はおろか貴様も危ういことは分かってるだろう、彼らを捉え、羽をむしりとるのがお前の仕事だ」
「分かりました総帥！この私、ドクタールミスがなんとしても見つけ出して捉えて見せましょう！」
「頼んだぞ・・・・・」

あわただしくなる中、その頃サツキと藤木はバス停の前に立ってバスを待っていた。
青空をボーっと眺めていると、藤木が隣の自販機で買ってきた缶ジュースを渡してくれたので俺はそれを飲んだ。

のどにつっかえて苦しくなりそうに飲んでいると、ちょうどそこへ山梨交通のバスがやってきた。

「きた。」
「さてと、行くか」

やはり昼下がりというだけあってか、バスの中はガラガラでほぼ貸切のような状態だった。
ドアが閉まり、バスはゆっくりと走り出した。
俺と藤木は後ろの座席に座り、俺はただボーっと腕を組んで何もしゃべらず、ただ一点だけを見つめていた。

揺れるつり革と中吊り広告、俺と藤木はなにもしゃべらず、ただただそのときは沈黙を守っていた。

しばらくしていると、突然藤木のヤツがしゃべった。

「なぁサツキ、あいつらにこのこと言わなくていいのか?」
「言っても信じやしねーよ、それに変に誤解されるだけだ・・・・・」
「そうか・・・・」
「お前まさかやっぱ俺のことアイツらに話すつもりじゃねーだろうな?」
「ちがうって!ただ、ずっとこのままってワケにもいかねーだろ、お前だって分かってることだろ?」
「分かってたさ、最初っからな」
「じゃあなんで・・・・?」

「辛いんだよ、もし真実を知ってしまって、それでそれっきり終わってしまうってーのが」
「うん・・・・・・・・」
「それによ、後々なにかとめんどくさいことになるんだから、だったら何もしないでこのままただボーっと生きていりゃいいんだよ・・・・ひっそりとな」

言葉に詰まった藤木はこれ以上は何も言わなかった。どうせ俺一人のことなんてだれも知ったことじゃないんだろう、俺は最初からそう思っていた。

「〜まもなく終点、甲府〜」

くだらないことを話していると甲府駅前に着いた。
駅前ターミナルに降りると、すぐ目の前には信玄公の銅像が鎮座していた。

「おいサツキ、どこ行くんだ?」
「ちょっとよるところがあんだよ」

俺はまず、ここにきたらまず必ず行店があった。それは山梨で唯一のアニメショップだ。
やはり藤木も付いてきた、一通り新作を確認した後は何も買わずにそのまま店を出た。

「おい、なにも買わないのか今日は?」

「欲しいのがあってな、もう出てるが下見にきただけだよ、それじゃいくか！」

そして俺と藤木は郊外行きのバスに乗って甲府市郊外にある研究所近くにたどり着いた。
バス停を降りると、そこへ白衣を着た見ず知らずの女の人がジュラルミンケースを持って俺達のところへ駆けつけてきた。

「おーい！！」
「えッ？」
「誰だあの姉ちゃん？」
「よかった・・・無事だったか！君が津山くんだね？」
「はッはい、あのあなたは？」
「いやぁーすまんすまん、俺ッいや私は秀子、浦島秀子よ！ってなーんでな、秀吉だ宜しく！」
「はぁこちらこそ・・・ってえぇッ！！あなたももしかして・・・・」
「おッおいサツキどういうことだよ？」
「私ホントは男なのよぉ～ん♪」

二人は唖然、まさかアキラ以外にももう一人いたとは驚きだった。
その後俺は秀吉さんにワケを聞き、とりあえず向こうもまだ無事であることは分かった。
だがしかし元は男だったとはいえ、かなり狂ってきてるなこの人・・・自分で秀子とか言っちゃってるし・・・・俺は絶対こんな風になりたくないなと思った。

「秀子さん・・・・秀吉さん・・・・」

「秀吉でいいよ、あッでも人前では秀子って呼んでくれ！こっちもいろいろとワケありでね」
「はッはぁ・・・・」
「ところで君は？」
「こいつは俺の友達の藤木です」
「どうも始めまして！サツキの友達の藤木恵介と言います！」
「宜しくな、ところで誰にも付けられてこなかったかい？」
「はいまだ誰にも」
「そうか、それなら大丈夫だが・・・・それじゃあ急ごう」

ところが、やってきたのは近くのファミレスだった。
俺と藤木は秀吉さんと向かい合わせに窓側の席に座った。

「ご注文はお決まりですか？」
「はい、じゃあドリンクバー三つで」
「かしこまりました、ごゆっくりどうぞ！」

店員が去った後、秀吉は周囲を見回し、誰もいないことを確認すると、俺達の前に持っていたジュラルミンケースを差し出した。

「それじゃあ、君らにこれを渡そう。本当は私が持っていくべきなのだが、根岸は君に頼んだ・・・・それにもしものことがあったら僕の友人の命が危ないかもしれないんだ」

そういうと秀吉はケースをゆっくりと開けて中身を見せた。
中にはスポンジケースに見覚えのあるあの薬が三本、瓶に入って入れられていた。さらにケースの上にはどうみても危険物、バイオハザードのマークが張られていた。

「絶対に彼らに渡してはならない！この薬は国が極秘に化学兵器の開発を目的に作られたものなんだ、だが実験の過程で誤って別の用途に使う薬品を調合した結果私はこうなってしまったんだ・・・・。」

「それって・・・・あぶなくないっすか？」

「そうだ、もともと化学兵器の開発を目的に作られたものだから、いいかい、絶対にこの二つは混ぜてはいけない！もし二つを混ぜて飲んだりしたら何が起こるかわからないぞ！」

「そんなことしませんよ、てか秀吉さんもその薬を飲んでそんな姿になっちゃってるんじゃ・・・」

「だからこそだ！決してコレを彼らに手放してはならない！！君達だけじゃ心配だからな、サツキくん。君は根岸から聞いているだろうが君も狙われている、今ごろ彼らの仲間の一人がここへ向かってきているのは確かだ、だとしたら私の身も危うい・・・・」

「はッはぁ・・・・それで俺らはどうすれば・・・・」

「君の家は危ない、だからしばらく私の家にいるがいい、ウチなら根岸以外は知らないから誰も来れまい！」

「でもその前にじいちゃんに伝えておかないとなぁ、心配するし・・・」

「そうか、わかった。じゃあ今日のところは仕方ない、二人とも家まで送ろう。準備が出来たらここへ連絡してくれ！」

そういうと、秀吉は自分の名詞をサツキに渡した。もしもの場合はそこに書かれているところに電話するように言われた。

とりあえず今日のところは自宅に戻った、その後は秀吉さんに車で送ってもらい藤木を途中で降ろして俺はようやく家路に付いた。

家に着く頃にはあたりはすっかり暗くなっており、じいちゃんが玄

関の前で心配そうに待っていた。

「ただいまーじいちゃん！」
「どこ行ってたんだいサツキ？心配したぞ」
「ゴメンじいちゃん、いろいろあってね」
「腹減ったろ、夕飯食うべ！」

今日一日でいろいろと疲れていた俺にとってはほっとする一言だった。だがそんな時間も長くは続かない・・・・。
なぜなら、俺は明日にもここを出て藤木とともに知らない土地へとアキラや根岸さんたちにコレを渡すために旅立つから・・・・。
だから俺はとにかく今を生きる！自分の命が狙われていることも覚悟の上の決断。
すべてが真実であり、すべてが真、本当の姿。人間は誰しも表の顔と裏の顔というものが存在する。
今の俺はそれでたとえるなら裏の顔であろうか？それとも表の顔であろうか？

真実は誰にも分からない、本当にそれであっているのか、テレビのニュースや報道などでしばし疑問に思うこと、だがそんなことも時間が経つにつれそんな事などどうでもよくなってくる。

俺はいつになったら安心できるのか、いつになったらたこの苦しみから解放されるのか。
人間はいつかは死ぬ、だからその前に俺は死を覚悟した。いつくたばっても悔いのないように、自分の生きてきた道に誇りを持てるように。
そしてそれらの答えは誰も知らない、だから俺は答えを追い求める。
このくだらない世界が続く限り、

十八、逃走と追跡（後書き）

つづく

十九、危ない視線（前書き）

根岸、そして浦島博士らが開発した薬品によって女になってしまったサツキ、そしてそれを追うもの達の物語・・・・。

十九、危ない視線

あれから三日後の朝、学校へと続く通学路をゆみとかおりが話しながら歩いていた。

「ねぇゆみ、津山くん今日も家に帰ってきてないの？」
「うん、今日もさっき家に行ってきてみたんだけど、やっぱり誰もいないみたいだったわ」
「やっぱりどこかに遊びに行ってるのかなぁ？」
「それはないとは思うけど・・・・アイツはずる休みするような感じじゃないと思うけどなぁ・・・・」
「それになんかここ最近藤木くんの様子がおかしくない？」
「アイツが？」

ふとゆみは先を歩いていた藤木を見た。
たしかに見てみる限りどことなくいつもと様子が違っていた。

「たしかに・・・・あやしい！」
「やっぱりゆみもそう思う？絶対なんかおかしいわよ！」
「前からずっと変だとは思ってたけど・・・・言われて見ればたしかにここ最近挙動不審よね」
「ひょっとしてなにか津山君のこと知ってるんじゃないのかな？」
「うーん・・・・そうね！サツキのこともしかしたら知ってるかもしれないし、直接本人から聞いてみよう」

そして学校に着いた頃、ゆみとかおりは下駄箱で上履きに履き替えている藤木を呼び止めた。

「さてと・・・・・」
「藤木ーッ！」
「あッ？なんだよ岡崎、宮野も・・・・なんか用か？」
「藤木！アンタサツキのことで何か聞いてない？」

ギクッ

そう聞くと、藤木は突然言葉を詰まらせ同様を見せた。

「えッ！・・・・なっなんだよ突然・・・・・」
「だからサツキよ！なにか知ってるでしょアンタ？」
「さッサツキ！？・・・・いや、何も知らねーよ！」
「ほんとに？アンタなんか隠してんじゃないでしょうね？」
「なッなんなんだよ急に！おッ俺もしばらく会ってないぞ！」
「本当？」
「ほッ本当だよ！」

ゆみは怪しそうに藤木を見た、藤木は思わず目をそらすがその様子にゆみはますます怪しく思った。

「やっぱり何か知ってるんじゃないの？」
「しつこいなぁーッ！しらねーって言ってんだろ！！」
「あッ！コラ藤木！」

藤木はゆみを振り切って階段を駆け上がって教室へと走っていった。

「ゆみ・・・・・」
「うん、やっぱり怪しいわね・・・・・・。」
そしてなんとか自分の教室にたどり着いた藤木は冷や汗をかいた。
「はぁ・・・はぁ・・・・あっぶねー！岡崎のヤツにばれるところだったぜ・・・・・・」
カバンをかけ、自分の席に腰掛ける藤木にヒロが気がつき話しかけた。
「よう藤木、どうした？」
「うぉお？なんだ・・・・中村か・・・」
「いきなり驚いてどうしたんだ？」
「いや、なんでもないよ、最近ちょっと寝不足でな・・・・ネトゲのやりすぎだと思うが」
「そうか、授業中眠りそうだなそれじゃあ」
「ああまぁ・・・・」
「なぁ今日もサツキとは会わなかったのか？」
「うぇッ？あッあうん！・・・・アイツどこほっつき歩いてんだかな、はははは・・・・」
笑ってごまかす藤木、だが鈍さが幸いしたのかヒロはあまり藤木の異変には気がつかないでいた。
二日前、家を出るためにサツキは藤木を家に呼んで仕度を手伝わせていた。
食料や衣類をまとめていると、そこへ一本の電話が入ってきた。電

話の相手は先日始めてあった秀吉さんだった、それは急に都合が悪くなって迎えにこれなくなってしまったということだった。
しかたなくサツキと藤木はしばらく家出を断念、サツキはもしもの時のために台所の床下に昔、じいちゃんが掘った防空壕にパソコンやテレビを持ち込み、下に古い畳を二枚敷いてその上に布団を広げ身を隠していたのだ。
旧防空壕内部は六畳ほどの大きさでサツキの部屋とほぼ同じ広さだった、壁は木片やベニヤでできており、内部にはちゃんと電気が通っており、明かりは上から吊るされた裸電球一つのみだった。

古いみかんの木箱の上にテレビを置き、布団の上には愛用のノートPC一台、それに先日秀吉さんから渡されたあのジュラルミンケース一つ。
地下空間だが以外にも夏場は涼しく、冬は暖かく快適な空間である。
そこでしばらくサツキは時期を窺って家を出ようと考えていた。

サツキが地下室でテレビを見ながら過している頃、再び学校ではというと休み時間、トイレに行こうと教室を出た藤木の後ろの柱の影からゆみとかおり、二人の姿が覗いていた。

「ねぇゆみ、やっぱりやめようよ！」
「何言ってるのよ！藤木は絶対に何か知っているはずよ！あの様子普通じゃないわ！」
「で・・・でも・・・・」
「ほら行くわよ！」
「あッちょっとまって！ゆみ！」

かおりが止めるまもなく、ゆみはトイレから出てきた藤木を再び呼

び止めた。

「藤木ー！」

「げッ岡崎！！」

「げじゃないわよ！アンタ、やっぱりなにか隠してるでしょ？」

「だっだから一体なんのことだよ？知らねーって言ってるだろ！」

「とぼけんじゃないわよ！サツキのことに決まってるでしょー！それに最近きららって子も見なくなったけど」

「知らないっていってんだろ！なッ・・・なんなんだよ一体！きららさんはいろいろとお忙しいお方なんだよ！」

「どうしたの二人とも？」

ちょうどそこへ異変に気がついたヒロがやってきた。

「おお中村！いいとこに来た！このバカなんとかしてくれよ！」

「誰がバカよ！このオタ野郎！」

「うっせーなこの巨乳！」

「ちょっと落ち着けよ二人とも、ゆみなにがあったんだ？」

「藤木よ、藤木がサツキのこと何か知ってるそうなのよ！」

「ホントか藤木？」

「だから知らないってなんども言ってるのにさー！」

「とぼけてもバレバレよ！さっさと居場所を吐きなさい！」

「ちょっとまてよゆみ、藤木が知らないって言ってるんだからホントに知らないだよ」

「おおさすが中村ちゃん！あなた様は分かってらっしゃる！」

そういうと藤木はにやっと笑いゆみの方を見た、ゆみは藤木に舌を出していた。

「べーだ！」
「藤木、お前ほんとに知らないのか？」
「だからそういってるじゃん！それなのにこいつらがよ」
「あーもうわかったから！ゆみも藤木はホントに知らないみたいだし」
「わかったよ・・・・・行こッ」
「あッまってゆみ！」

ようやく二人が去ったところで藤木はほっとした。

「いやぁ～危なかったぜ！助かったぜ中村！」
「えッ？あぁ・・・・」
「それにしてもよ、お前よくあんな三次元女と付き合えるよな！」
「えッ付き合う？」
「そうだろ？だって岡崎はお前の彼女だろ？」
「えッ？何言ってんだよ！俺ゆみとは付き合ってないぜ？」
「えぇッ！？」

驚愕の事実に藤木は驚きを隠せなかった、二人がそういう関係ではなかったとは、以前にサツキから聞いた話とは全然違っていたのだった。

「でっでもよ、以前サツキが放課後教室でお前とゆみがキスしてるところを目撃したと」
「えぇッ！？きッキス！？」

その言葉に顔を赤くするヒロ、藤木は真相が知りたくなった。

「そうだよ、放課後ゆみがお前の額にキスしてるところ見たって言ってたぜ?」
「それっていつごろ?」
「サツキがいなくなる二日か三日前くらいかな?」
「てことは・・・・なんだ!あのときか!」
「あの時?あの時って?」
「いやいやね、おれはキスしてるんじゃなくて俺が立ち上がろうとしたときに偶然ぶつかっちゃったんだよ!」
「えぇ!そうだったのか?」
「たぶんそれを見て変に誤解されていたみたいだな・・・まさか俺とゆみのうわさって野球部とかにも・・・・・」
「いや、それはないよ!俺らの中だけで勝手に広まってたみたいだし」
「そうか・・・よかった・・・・・」
「ところでよ中村、お前彼女いるのか?」
「えッ!」

再び藤木の質問に顔を赤くする、この際本人のことも確かめておきたいと思っていた。

「どうなんだよこの色男!いるのか?」
「えッ・・・うん、まぁね・・・・・・」
「何ィ!?そいつはマジか?」
「うん・・・・・」
「それで、相手はどんなヤツなんだ?」
「一年の子で、結構かわいい子なんだ」

「一年の・・・お主ロリに目覚めたか！それでどうやって落としたんだその子？」
「いや、なんか告られちゃって」
「えぇ！一年に告られたのかお前！！」
「バカッ！声でかい！」
「あッすまん！、それってマジかよ・・・・すっげぇ」
「ああ、彼女はゆみと同じバトミントン部でなんかいつも一生懸命な俺に一目ぼれしたって」
「そうか、お前んとこはサッカー部だもんな・・・・コートのすぐ隣だし」
「うん、なんか恥ずかしいなぁ」
「お前苦労するぞ、後々・・・・まぁお前は顔もいいしスポーツ万能だしよ、まぁ頑張れよ」
「うん・・・あッおい藤木！このことは絶対に他の皆には内緒にしてくれないか！頼む！」
「そうかぁ？・・・じゃあジュースおごってくれたら秘密にしておいてやるよ」
「わかった、あとでおごるよ！だから頼む！」
「任せとけ！俺は口が堅いほうだから安心しろ！」

ヒロと藤木の知らない間に実は二人の様子をゆみとかおりが影から窺っていたのだ。

「中村君に彼女いたんだー・・・・」
「そんなことよりアイツからなんとかサツキの居所を聞き出さなきゃ！絶対になにか知ってるはずよ！」
「ゆみ・・・まだあきらめてなかったんだ・・・・。」

そして学校が終わった放課後、ゆみとかおりは隣の教室を訪れたが

そこにはすでに藤木の姿はなかった。

「藤木ーッ！」
「どうしたゆみ？」
「ヒロ、藤木はどこに行った？」
「あぁ、藤木のヤツならさっき帰ったぞ？なんか用事があるとか言って・・・・」
「藤木めぇーッ！捕まると思って逃げたか！！」
「中村くん、その用事って言うのは？」
「さぁ・・・・俺そこまでは聞かなかったからなぁ～」

その頃藤木は学校を出て河川敷を自転車で走ってサツキの家へと向かっていた。

「ふぅー・・・・・あぶねーあぶねー、岡崎のヤツ気がついちまったかな？・・・・しばらくはアイツらとあまりかかわらないようにしねぇーとな」

サツキの家に到着し、藤木は戸の前に自転車を止め、横の郵便受けの下から合鍵を取り出して玄関の戸の鍵を開けた。

「おじゃましまーす」

そのまま藤木は戸を閉めて中へ上がり、台所へと向かった。
藤木は台所の床をある決められた回数ノックすると、突然床の一部が持ち上がってそこからサツキが姿を現した。

「よう」
「藤木か、今日も見つからなかっただろうな？」
「それは大丈夫だ、ただちょっとやばいことになって・・・・」
「どういうことだ？」

地下室から出たサツキは居間に出て藤木にワケを聞いた。
今日、ゆみやかおり達に怪しまれ、問い詰められそうになったことを話すと、サツキは難しそうな顔をして腕を組んだ。

「ウーン・・・・・」
「どうすんだサツキ、このままだといずれ見つかっちまうぜ？」
「それは分かってるさ、でも・・・・どーすりゃいいか分かんねーッ！！！」

サツキは頭を抱えてちゃぶ台に防ぎこんだ。サツキの頭の中でいろんなことが混乱していた、このままではいずれ見つかってしまう、そのときは姿を消すしかない、サツキはそう考えていた。

「なぁ藤木、でもまだゆみとかにはばれていないんだろう・・・・？」
「あッあぁ・・・・」

するとサツキはメガネを外してあることを言い出した。

「藤木、どうだ？俺を見て・・・・」
「えッ？突然なんだよ？あッ！」

「いつもの感じと違うだろ？やっぱりこれは男のときと同じだ、昔から俺ってメガネ外すと感じが違って見えるだろ・・・・」
「なるほど、変装というわけか・・・・・」
「変装とは違うが、まぁ似たようなモンだ。」
「そうだサツキ！変装だよ！変装！変装すればこそこそ隠れることなんてないんだよ！」
「ちょっとまて！お前の言う変装というのはコスプレのことじゃないのか？」

そういうと藤木はしゃべらなくなった、図星だ。
おそらくこいつのことであろう、何かしらのアニメの衣装でも俺に着せようという魂胆だろう。
そんなのは絶対に嫌だ！俺は首を横に振った。

「でもサツキよ、その格好もどうかと思うぞ・・・・ジャージにTシャツってーのは」
「しょうがねーだろ！これしかねーんだから！それにコレの方が動きやすいし」
「怪しまれると思うが・・・・・」
「あのなぁ、俺は男だぞ！しつこいようだが・・・・」
「でも今は女じゃん！」
「見た目がどーであれ中身は男だ！」
「おまけにオタクで暗いヤツ」
「暗いは余計だ！てかお前もオタクだろ！」

そんなことを話している頃、八王子市某所では組織の仲間、柿野が車を止めて中でなにやら作業をしていた。
黒いアタッシュケースにスタンガンを入れ、車のダッシュボードから麻酔弾を仕込んだ自動拳銃を一丁取り出してそれも一緒に中に入

れてしまった。

「かわい子ちゃん～今すぐいくよ～、フゥーッ！！」

バカが一人はしゃいでいた。

そして異変を感じたサツキは寒気を感じ、吐き気を訴えた。

十九、危ない視線（後書き）

つづく

次回は番外編。

二十、番外編紹介（前書き）

登場人物、プロフィール。

二十、番外編紹介

津山サツキ
（つやま　さつき）

主人公にして前代未聞のだらしない主人公。山梨県立蓬莱中学校二年生。通称サツキ
五月六日生まれ、血液型ＡＢ。１４歳
引きこもりでオタクな主人公。メガネが特徴でショックを受けたり衝撃を受けたりするとよくメガネがずれ落ちる。胸の大きさは貧乳。
（本人が貧乳萌えなので）

実家が農家で大きな家に住んでいるが現在両親が海外旅行中なので彼のおじいさん（津山喜三郎８７歳）と二人暮し。後に根岸らが開発した薬で女に生転換してしまう。
本人いわく、もやしっ子なので運動も勉強もまるでダメ、そもそもまったくやる気が無く、いつも家でゴロゴロしたり、学校でも自堕落な生活を送っている。基本的に家にいることが多いが暇なときはいつもふらふらっと自転車でとこかへ遊びに行くこともしばしば。
部活はＵＦＯ研究部（帰宅部又は自宅パソコン部）に所属、ほんとにたまにしか来ない。

趣味はネットゲーム、アニメ鑑賞やマンガを読んだり、プラモデルを作ったりいろいろ。
機械に関してはかなり詳しいようで、時々ヒロや藤木にゲーム機などの修理を依頼される。
軍事オタクでもあり銃器には詳しく、一度銃を握ると好戦的な性格

に豹変する。
好きな食べ物はラーメンとお寿司。特に和食を好んで食べる。
内向的な性格であまりしゃべらず人と関わろうとはしない、小学校でもあまり目立つことはかった。基本はやさしいが思い込みが激しく、時々自意識過剰になりすぎるところがある。思いつめるあまり吹っ切れて暴走することもしばしば。
自分の大好きなアニメの主人公の少女（ふたばちゃん）が好き過ぎていつも抱き枕に抱きついてキスするほど。限定生産された彼女のフギュアを自作した化粧箱に入れて大切に保管している。
将来の夢は何もせず遊んで暮すこと。

中村ひろし
（なかむら　ひろし）

主人公の親友、主人公の隣のクラスの同期の二年生。通称ヒロ
七月十三日生まれ、血液型Ｂ。１４歳
コレといってあまり特徴のない一般人、身長は主人公よりわずかに高い。

三人の中では一番の常識人、スポーツ万能で成績もいい。
彼の家は一般家庭で、学校のすぐ近くに住んでいる、三人兄弟の長男で面倒見もいい。
小学校の頃はよくサツキとつるんで学校の日以外も二人で遊んでい

た。

彼もゲーム好きで今でも時々サツキと格闘やレーシンといったゲームで遊ぶことがあるが昔ほどではなくなってきている。

趣味はサッカーと野球で、部活ではサッカー部に所属している。
足が速いということがあって過去何度も陸上部や野球部から入部を勧められたことがある。
まじめすぎて以外に天然なところが少々ある。
性格はしっかりしている、周りから慕われ、運動会や文化祭などで大役を任される。
好きな食べ物はハンバーグとステーキ。

将来の夢はプロサッカー選手。

岡崎ゆみ
（おかざき　ゆみ）

主人公の幼馴染の女の子　ヒロイン、主人公と同じクラスの二年生。
通称ゆみ
九月三日生まれ、血液型Ａ。１４歳
胸が大きいのが特徴、性転換後の主人公の胸よりはるかに大きい。
身長は主人公より少し高い。

主人公、ヒロと三人の中では一番のしっかり者。
河川敷近くのマンションに住んでおり、会社員の父と専業主婦の母と三つ下の妹と四人で暮らしている。
国語が得意で英語と数学が苦手、

主人公とは幼稚園の頃に知り合い、小学校の頃はよく主人公と同じクラスになったおかげか、遊ぶときはいつもヒロと主人公の三人で遊ぶことが多かった。（ままごと遊びの時、主人公は悪乗りで空き巣役を演じた）
部活は水泳部に所属し、成績もよくかなりの美人で水泳部の男子からよく告白される。

趣味は読書とプロレス観戦、ゲーセンのクレーンゲーム。
性格は明るく、積極的で主人公とは正反対、おそらく三人の中で一番テンションが高い。
好きな食べ物はうどんとカレーライス。
特技はコブラツイストとジャーマンスープレックス。

体系は胸が大きい、おそらくクラスの女子の中でも一番大きい。自身も胸が大きいことにコンプレックスを懐いている。

将来の夢は世界を回ること。

藤木恵介
（ふじき　けいすけ）

主人公の悪友で、一番の親友でもある。クラスはヒロと同じ教室の二年生。通称藤木
六月十四日生まれ、血液型Ｂ。１４歳
身長はサツキとほぼ同じくらい、いつもギャルゲーキャラの描かれたＴシャツを下に着ている。

主人公同様、かなりいい加減な性格の持ち主。美少女になった主人公の第一発見者。
主人公とは一年のときの合同授業で知り合い、後に主人公が適当に選んで入部したＵＦＯ研究部で再開し、それからよく主人公と二人でつるんでいる。

家は酒屋を営んでおり、二つ上の姉がいる。
父が小学校の時に交通事故で他界し、現在は彼の祖父が変わりに店を営んでいる。

趣味はアニメとゲーム、主人公同様の二次元美少女大好きなオタク。いつも主人公と自身の持っているギャルゲーやマンガを貸し借りしている。
性格はかなりひねくれており、過去にクラスの女子から罰ゲームの標的にされ、それ以降から性格が悪くなった。この面に関してはかなり主人公とシンクロしていると思われる。
かなりの天然で、鈍さが依然とくらべて増しているところがみられる。

よくゆみをからかうせいか、ゆみから嫌われている。よく口ゲンガに発展する。
好きな食べ物は饅頭とおそば。

将来の夢はギャルゲー製作会社を立ち上げること。

宮野カオリ
（みやの　かおり）

主人公の隣の席の女の子、同じクラスの二年生。通称かおりちゃん
三月二十日生まれ、血液型Ａ。１４歳
身長はゆみのちょっと下ぐらいで、いつもサツキが読み終えたマンガをゴミ箱から取って読んでいる。

ゆみの友達で、少々オタクッ気がある。
家は両親と伯母、二つ下に弟がいる。
あまり知られていないが、以外にも少年マンガが好きで、そういう面では主人公と共通している点がある。

少々百合ッ気があり、かわいい子を見つけると、ところかまわず抱きつく。
趣味はマンガ読書と料理。
行動的な性格で責任感が強い、部活は吹奏楽部に所属し、クラリネット担当。
好きな食べ物はすき焼きと焼き鳥。

将来の夢は公務員。（未定）

松下アキラ
（まつした　あきら）

主人公の友達、病弱でいつも車椅子に座っている。主人公同様、元は男の子だったが自らが薬の実験台になり女の子に性転換してしまった。
七月五日生まれ、血液型ＡＢ。１４歳
身長は主人公の下で、足が弱くいつも車椅子に座っている。

幼い頃に両親が出先で事故に合い、他界してしまうがその後は施設に引き取られ、１０歳まで過すが後に病気になり主治医に余命宣告を受け、自暴自棄になるが自らあの薬を飲んで奇跡的な回復を見せた。
その後は保護観察という形で根岸らの研究施設に引き取られた。

根岸博士の助手の女の人に無理やり服を着せ替えられたりしていたので最初は嫌だったが今はなれて自分から女の子モノの服を着ることがある。
趣味はカメラでいつも大好きな航空機や戦闘機などを撮っては自分の病室に貼っている。
性格はおとなしく、控えめな性格で礼儀正しい。
好きな食べ物はラーメンとうどん。

将来の夢はプロの写真家。

二十、番外編紹介（後書き）

つづく

二十一、夜逃げ前夜（前書き）

丑三つ時、サツキと藤木は行動を開始した。

二十一、夜逃げ前夜

「えええッ！！ヒロとゆみって付き合ってるんじゃなかったのか！？」

「そうみたいだぜ、本人から直接聞いた情報だから確かだぜ」

「そうか・・・・じゃあ俺が勝手に勘違いしていたってことになるのか・・・・・・」

「でも彼女はいるみたいだぜｗ年下の」

「マジかｗｗｗヒロのやつ、終にロリに目覚めたかｗｗｗくくく！」

なにかをたくらむように笑う俺に藤木もニヤニヤとしていた。

「よーし藤木！こうなったらヒロのヤツをオタクの世界へ引きずり込んでやろうぜ！！」

「おおよ！！これはヒロが俺らと同類の仲間になるまたとないチャンスだぜ！」

「いまや学校で俺ら二人のほかに同士たちはいない・・・・このままでは我々の存在までもが否定される！！」

「そうだ！！」

「唯一、俺らと同類の部長の上野先輩だって時期に卒業して俺らだけになってしまう！だがその前に仲間を増やすのだーッ！！」

「そうだそうだ！！我らオタクの力をヤツら一般人にしらしめろーッ！！」

そんなこんなで俺と藤木は話を進めていった。

「てかそんなことより今夜出るぞ！」
「今夜か・・・・・」
「とりあえず今夜の夜中の一時に学校の校門前に集合だ、お前もまだ準備してないだろ？先に行って待っててやるよ」
「分かった、それしゃあ今夜お前の肛門でぇ～♪」
「面白い冗談だね、そんなに血を見たいかい？」
「心の底からごめんなさい」
「まァ、とにかく今夜校門前で落ち合おう」
「分かった・・・・・」
「ああそれと、何か使えそうなモノも持っていったほうがいいかもな・・・・」
「使えそうなモノってなんだ？」
「武器とか」
「なるほど、それなら俺スタンガンもってるから今から家行って持ってくるよ」
「そうか、それじゃあ頼むな」

藤木がスタンガンを取りに行っている間、俺もなにか使えそうなモノがないか自宅の庭にあるなまこ壁の大きな蔵から探すことにした。鍵を外して重たい蔵の戸を開けると、中は真っ暗で誇りっぽく、俺は出入り口の横にある電気のスイッチを手探りで押した。すると蔵の中の裸電球に明かりが点り、蔵の奥までなんとか入れた。

「ゲッホゲホッッ！・・・・相変わらず誇りっぽいな・・・・・・」

俺は蔵の奥に入り、なにか武器になりそうなものはないかと探し回った。
蔵の中にあるのは今は使わなくなった大きなタンスや古いレコード

盤、蓄音機やラジオ、三丁目の夕日にでも出てきそうな年代物のブラウン管テレビ、壷や掛け軸といった骨董品ばかりだ。

「なーんだよ、ガラクタばっかじゃねーかよ・・・・お!!これは・・・・」

蔵の柱の横に、一本の大きな長刀が一本立てかけられていたので、俺は思わずそれを手にとって見た。

「これなんて立派な武器じゃん!こんなんあったなんて知らなかったぜ・・・でも流石にコレを持ち歩く勇気は無いな・・・・」

俺は長刀を戻すと、捜索を再開した。
捜索範囲を広げ、俺はきしむ階段を上がって二階も探してみることにした。

「どこにあんだよ~」

二階を物色中、突然棚の上から頭上に大きな茶箱が落下してきたおかげで頭には大きなたんこぶが出来た。

「痛ってぇ!!クソ!!ん?」

ふと下を見ると、落ちた茶箱からいろいろとモノが散乱していた。
俺はぶつぶつと小言を言いながら茶箱から散乱したガラクタを片付けていると、その中の一つに思わず目が留まってしまった。

「これって・・・・南部十四年式・・・・」

俺はそれを思わず手に取った、そうそれは古い一丁の拳銃だった。
さらに足元には弾丸の入った木箱が落っこちていた。
俺はまさかとは思ったがじいちゃんは昔、戦時中に陸軍の兵器工場で働いていたこともあったか、そのことと関係しているのか・・・・。

しかし何故、旧日本軍の拳銃が何故こんなところに、まさかとは思うが本物では・・・・？

「まさか・・・・きっとモデルガンかなにかだろうな！ははッ」

使い方などは趣味で大体は把握していたので弾奏を下ろしてみると、弾丸が一発だけ入っていた。
俺は弾奏を戻して弾を装てんして構えると、照準を近くにあった柱に構えた。

ガチャッ

「ダミーカート式のモデルガンか・・・・しかし以外やな、まさかじいちゃんにミリタリー趣味があるとは！」

俺は軽い気持ちで引き金を引いた、だがその時、反動が手首を動かして軽い発砲音とともに銃口から弾丸が発射され、銃弾は柱をかすめて貫通して一本の裸電球が割れた。

突然のことに固まった、一瞬何が起きたのか分からなくなってしまった。
いきなり腰が抜け、俺はへなへなとその場に座り込んだ。片手に持った拳銃を見ると、銃口から煙が立ち昇っているのが分かった。

「えッ？・・・・これってもしかして・・・・本物！！？」

足元には薬きょうが転がっており、俺は弾奏の中に弾は残っていないか確認すると、真っ青な顔であわてて持っていた拳銃と落ちていた弾丸の入った箱を懐に仕舞い、その場から逃げるように立ち去った。

そしてその頃、サツキの元へ、バカが一人車で向かってきていた。
ようやく車は中央道を通り山梨へと入った、その後柿野は甲府市内の観光ホテルに到着し、まだサツキのところへ向かうことはなかった。

「ふぅ・・・・やれやれ・・・・こんな田舎にホントにいるのか・・・？」
「失礼します、お風呂の準備が出来ましたのでごゆっくりどうぞ」

「まぁ、お楽しみは後で取っておくかな・・・・」

そして本部では一向に柿野からの連絡がなく、ドクタールミスは苛立ちを隠せないでいた。
だがそんな時そこへ、ある情報が流れ込んできた。

「遅いッ！遅すぎる！一体何をしているんだ柿野のヤツはーッ！！」
「ドクター！」
「なんだ！！」
「根岸博士の件なんですが、現在地を発見しました」
「何！本当か！？」
「ただいま警察から連絡がありまして、本人とターゲットを確認したそうです。」
「そうか、フフフ！よし！警官にまだ動かないように伝えろ！しばらく様子を見てから突入だ！」
「分かりました」
「フッフッフ・・・・・チェックメイトだ根岸君・・・・・フハハハハハ！！！」

だが根岸たちはすでにアパートの前の張り込みに気がついていた。
流し台の廊下側の窓の隙間から根岸は外にいる仲間の様子を窺っていた。

「やはり・・・ここはもう気づかれている・・・・」
「どうするのよ根岸君！」
「ここを出よう、だが正面からだとヤツらに気づかれてしまうからここから出よう」
「ここからって・・・・ちょっと根岸君！」
「大丈夫だ、荷物とかは全部車の中にまとめて置いてあるから」
「でも裏もすでに見張りでいっぱいだよ！」
「大丈夫だ、私が劣りになる」
「劣りって・・・・・そんな！危険よ！」

そして根岸たちは行動を開始した、まず根岸は玄関のドアを開けて相手の注意を引いた。その隙に助手のミナコはアキラを負ぶって気がつかれないように裏側の窓からすぐ下の物置の屋根の上にゆっくりと降り立った。
裏の窓側にいた見張りは根岸が出てきたことに気づいてそっちの方へ回っていたので、その隙にミナコとアキラは物陰に隠れながらなんとか車に乗り込んだ。

「よいしょっと、大丈夫アキラくん?」
「はい、僕はなんとか・・・・根岸博士は・・・・」

すると突然、表の方から男達の声が響いた。

「逃げたぞーッ!!捕まえろーッ!!」
「根岸君!!」
「急げーッ!!気づかれた!!」

そこへ根岸があわてて車の方へと走ってきたので、ミナコはあわててドアを開けて根岸を車に入れた。
運転席に乗り込むと、急いでエンジンキーを回してエンジンをかけると、いきなりアクセル前回でそこから飛び出し、追ってくる男達を蹴散らして走り去っていった。

「クソ!逃げられた!!」
「大丈夫だ、車に発信機を取り付けた」

根岸は車を飛ばし、必死に追っ手から逃れていった。

夕方、サツキと分かれた藤木は自宅に戻り、藤木は一人部屋で準備をしていた。

「これはよしと・・・えーと後は・・・・・」
「恵介ー！」
「ん、なにー？姉ちゃん」

準備をしていると彼の姉さんが呼んできた。
藤木は階段の上から下を見ると、姉が夕飯に呼んでいた。

「夕飯！」
「わかった、今行く！」

そういうと再び藤木は部屋に戻った。そして戻るなり藤木は机に座ると、ボールペンでコピー用紙になにやら手紙を書いた。

「恵介ー！！早くしなさーい！！」
「今行くよねーちゃん！！」

手紙のようなものを書き終えると、藤木はいそいで階段を下りて食卓の椅子に座って一人ボーっとしたような顔で飯を食った。

「・・・・・・・・」
「どうしたの恵介？ボーっとして・・・」
「えッ？」
「あんたまた夜中までパソコンやってるんでしょ！そんなことして

ると朝起きられなくなるわよ！」
「節子、おじいちゃんはまだ帰ってないの？」
「配達で遅くなるって、お母さん電話で聞かなかったの？」
「あッゴメン！こっち電話してたから」
「誰に？」
「忙しいのよホント！四丁目の根本さんにつかまっちゃって」
「またあの人！それでまた長電話？」
「仕方ないわよ、あの人しゃべりだすと止まらないんだから！まったく」
「この間も電話かかってきてたわよ、あの人って他にすることないの？」
「息子と旦那さんが出稼ぎに出ちゃって家には誰もいないらしいけどね、それでなのよねぇ」

姉と母親が会話をしている中、藤木はただ何もしゃべらずにひたすら飯を食った。

そしてその日の夜、時刻は深夜一時前、俺は布団から起き上がると、部屋の電気を付けるとすぐに準備を始めた。
唐草模様の風呂敷に着替えやノートパソコンを入れてまとめると、机の引き出しから昼間、蔵の中で見つけた旧日本軍の拳銃を取り出し、弾奏に弾を込めて弾を装てんした。
安全装置を入れて拳銃を懐にしまうと、拳銃と一緒に拾った箱からすべての弾丸を机の上に広げてそれらを全部ジャージのポケットにじゃらじゃらとしまった。

「よし、あとは・・・・・」

俺は机の上に飾っていた嫁のふたばちゃんのフィギュアを自作した

化粧箱に大切に入れて一緒に風呂敷に包んだ。
一通り準備を終えると部屋の電気を消し、俺は風呂敷を背負い、階段横の廊下に置いておいた食料や衣類の入った桃のダンボール箱を抱えて音を立てないように、静かに階段を一段ずつ身長に下りて玄関のところにたどり着いた。

「よーし・・・・さてと・・・・・」

俺は最後にじいちゃんの部屋の前に来た、最後になるかも知らないが、せめてお別れは言っておこうと思った。俺はそっと部屋の障子戸を少しだけ開けてそのスキマからじいちゃんの寝顔を見た。

静かに眠っていたので俺は少し安心した。

「じいちゃん・・・・・・・」

言葉が出なかった、もしもまたここへ戻れるとしたら、俺はまたじいちゃんと一緒に暮らせるだろうか。
いつもの日常を送ることが出来るだろうか、そんなことが俺の心の中を巡った。

「・・・・・さよなら、じいちゃん・・・・・・。」

一言そう言うと、俺はその場から姿を消した。

二十一、夜逃げ前夜（後書き）

続・夜逃げ前夜へつづく

二十二、続・夜逃げ前夜（前書き）

終にサツキと藤木は行動を始めた。

二十二、続・夜逃げ前夜

深夜一時過ぎ、俺は静かに玄関の戸をそっと開け、顔を出して辺りに人がいないことを確認すると、荷物の入ったダンボール箱を抱えて外に出た。

「よしッだれもおらんな！・・・・・てか当たり前か、こんな時間にこんな田舎の町をうろくつやるなんて、早々いるモンじゃねーよな・・・・」

独り言を呟きながら、ダンボール箱をいったん足元に置き、戸を静かに閉めて鍵をした。
そして俺は農機具と軽トラが入っている倉庫から自分の古い自転車を出して、自転車の荷台に荷物の入ったダンボール箱と、例の薬の入ったジュラルミンケースをゴムひもで固定してそのまま自転車を押して家の門の外に出た。

ふと俺は自宅の方を見つめ、自転車に跨るとため息をついてそのまま走り出した。

暗い夜道、流石田舎というだけあってか、俺の進む道に街灯は無く、唯一自転車の砲弾ランプだけが頼りだった。

「はぁ～、藤木もういてるかな？」

その頃、藤木はまだ自宅にいた。

親が寝静まった頃を見はからい、藤木はリュックとその他の荷物が入ったカバンを持って、そっと部屋を出た。
だが、玄関で靴を履いているときだった、当然後ろから何者かが藤木の肩を触った。

「恵介ー？」
「！！？」

後ろを向くと、なんとそこに姉が立っていたので藤木は驚いて鼻水をたらした。

「うぉッねッ姉ちゃん！」
「なにしてんのよアンタ、鼻水なんてたらして・・・・」
「あッいや・・・その・・・・」
「こんな時間にどこ行くつもり？」
「いや、そのちょっとコンビニへ・・・・」
「コンビニ行くのにそんなに荷物持ってくの？」
「えッ！！（ヤッヤバイ！！）」

「あッ・・・いやこれはその・・・・今夜友達に呼ばれてて・・・・」
「なんで黙って出て行くのよ？」
「いや、これはちょっとした秘密会議みたいな・・・・とッとにかく早めに戻るから！」
「そう、明日も早いんだから早く終わらせてきてよね、毎朝私がアンタを起こさなきゃいけないんだから」
「わかってるよ！いってきまーす」
「ふあー・・・ッ私も明日早いんだった・・・・もう寝よ・・・・

」

そのまま藤木は玄関を飛び出していったので、藤木の姉はあくびをすると自分の部屋へと戻った。

藤木はなんとかごまかして脱出に成功し、自転車に乗って待ち合わせ場所へと急いだ。

そしてその頃、俺はすっかり待ちぼうけだった。

校門の前で自転車を止めて一人、いらいらしながら藤木が来るのを待っていた。

「ったく、アイツなにやってんだぁ？どんだけ準備にてこずってんだよまったく・・・・」

そんなことをぼやいていると、向こうの方から小さな明かりがこっちに向かってくるのが分かった。

「おーい！サツキーッ！！」

「アイツやっときたか・・・・」

ようやく藤木と合流、ずいぶん急いできたみたいで息を荒くしていた。

「ハァ・・・ハァ・・・おまた！」

「おまたじゃねーよ、十分くらいまったぞ！」

「いやぁ～すまん！ちょっといろいろあってなぁー、」

「お前全然準備してなかったろ？」

「まッまぁね・・・そんなことよりいざ行かん！聖地へ！」
「聖地へってなんの聖地だよ！」
「聖地は聖地に決まっているではないか！サツキちゃん」
「ぶっ殺すよ！！」

俺は拳銃の銃口をちらつかせて藤木を黙らせた。
そしてなんだかんだで俺と藤木はその場を後にし、深夜の国道沿いをひたすら自転車で走った。
流石に国道沿いは深夜でも車の往来が激しいので迷うことはないだろう。

「なぁサツキ！」
「あんだよ？」
「ＰＣとか持ってきてるのか？」
「モチコース！つかこれがなきゃやってらんねーよ！」
「だろうな！俺はＤＳ持ってきたぜ、ボケモンの」
「小学生かお前は」

くだらないことを話しながら夜道をひたすら進んでいった、街灯の濃いオレンジ色の明かりがまぶしく、ただ俺と藤木はその明かりを頼りに夜道を突き進んだ。

それから一時間くらいたった頃、途中で自販機の明かりを見つけたのでそこで自転車を止めて一休みした。
俺は藤木の分の缶ジュースを買って渡した。

「ほらよ」
「おお、サンキュー！」

「流石に疲れたぜ、」
「やっぱりお前はマックズコーヒー好きだよな、いっつもそればっか飲んでるな」
「そりゃ好きだからさー、」
「それゲロアマだぞ・・・よくそんな甘いもの飲めるよな」
「甘党ですからねー、さてま、くだらねぇこと話してねーで先進むぜ！もたもたしてたら夜が明けちまうぞ」

休憩を済ませ、俺と藤木は再び走り出した。
真っ暗な山道をひたすら自転車で進み続けた、ここまでくると街灯は無く、自転車のランプの明かりだけが頼りだった。

「なぁサツキー、もうどのへんまで来たんだ？」
「さぁな、知らねぇよ、とりあえず標識見ればどっち方面進めばいいかわかるだろ」
「あぁ、でもよチャリじゃなくても電車で行ったほうが早いんじゃないのか？」
「バーカ！電車だと金かかるんだよ！こっから東京までどれくらいかかると思ってんだよ！」
「でっでもよ、これかなりキツイぜ？」
「しかたねぇだろッ！俺だってすでに横っ腹きてるんだからよ！」

いろいろ藤木とぼやきながらその後も休み休み走り続け、気がつく頃にはうっすらと夜が明けてきていた。
国道の横の道を走り続け、山道を出てトンネルを抜けると、目の前にはまぶしいほどの朝日が現れた。
まぶしくてそれが目にしみる、もうどの辺りまで来ただろうか？
俺と藤木はいったん立ち止まり、地図を確認することにした。

「おい藤木、地図出せや」
「おっけー」

近くに珍しくバス停のベンチがあったので、その上に地図を広げて確認した。

「えーっと・・・・今どの辺りだ？」
「国道ずっと走ってきて今、トンネル抜けた辺りだから・・・・だいたいこの辺りか？」
「けっこう遠くまで来たモンだな、地元からようやく出たか。」
「サツキ、腹減ったからなんかくれよ！」
「えぇッ？お前なんも食料持ってきてねーのかよ！、ったくしゃーねーな・・・・」
「あざーっす！！」

俺はため息をつきつつも藤木に持ってきた食料を分け与えた。

「カステラかよ！」
「文句言うなら俺が全部食ってやんよ？」
「別に俺はカステラが嫌いとは言ってないぞ？」
「はいはい、もういいから黙って食え！」
「いただきマンモス～」

二人、カステラを食らいながら再度地図を確認した。
現在地は大体分かったが、ここからどっちに進めばよいのか、俺は抜け道を探そうとメガネを外して地図を見た。

「んー・・・・・」

遠目で地図を見てみてもまったくわからん、俺はメガネをかけなおした。
そして時刻は早朝5時、あの男が終に動き出し始めていた。
早めにホテルを出た柿野は車で一路、サツキの実家がある蓬莱町を目指して早朝の国道をかっとばしていた。

「やれやれ、まさかこんなに早く起こされるとは・・・あの爺さん何考えてんだが、まぁどっちみちあの子のハートを射止めるのはこの俺だし」

時を同じくして根岸とアキラたちは河川近くの橋の高架下に車を隠してその中で夜を明かしていた。
何故根岸たちはホテルではなく、ここに潜伏しているのか、それはすべてドクタールミスの策略であった。

ルミスは根岸を偽りの事件の犯人とし、警察関係者らに報告して全国に緊急指名手配をしていたのだった。

「遅な藤崎・・・・大丈夫かなぁ～」
「お待たせ～二人とも、お弁当買ってきたよ」

二人の下へコンビニの袋を下げてミナコが戻ってきた。
ミナコは買ってきた弁当とお茶を二人に渡した。

「藤崎、誰にも付けられてないか？」
「私は大丈夫ですよ、手配されているのは根岸くんのほうじゃないですか」
「そうか・・・・でも心配だから、俺のせいでこんなことに・・・・」
「博士は悪くありませんよ、気にしないでください」
「アキラくん・・・・・・」

アキラにそう言われ、すこしほっとした根岸だったが、もう一人サツキと連絡が取れないことには不安を隠せないでいた。

「サツキくんは大丈夫だろうか・・・・今こっちに向かっているのは確かだが」
「一応、浦島くんにも連絡取ったんでしょ？」
「あぁ、彼も途中でサツキくんと合流するとは言ってたが・・・・無事に来てくれればいいが・・・・」

そして朝7時を回った頃、一台の車がサツキの家の前に到着した。車から降りた柿野はサツキの家を見上げて敷地へと入り込んだ。

「農家の金持ちの娘さんか・・・・・」

その時、縁側でお茶を飲んでいたサツキのおじいさんが柿野に気がつき、用を尋ねた。

「アンタ誰だね？なんか用かい？」
「あのすいませんおじいちゃん、この家に津山サツキちゃんて子は

いませんかー？」
「おお、サツキはワシの孫じゃ！お前さんサツキになんか用かね？」
「ええ、実は彼女に用事がございまして・・・・」
「サツキなら部屋におるとは思うが、まだ寝てますぞ？」
「いえ、さっき彼女に連絡を取りましたのでもう起きているかと、中に入って待たせてもらってもいいですか？」
「かまわんよ、ゆっくりしていきなさい」

サツキのおじいさんはそう言ったので、柿野は玄関を上がって居間のすぐ隣の来客用の部屋で待たされた。
座布団の上に座りながら待っていると、おじいさんは柿野にお茶を沸かして出した。

「お茶しかないもんでのぉ、」
「あッこりゃどうも」
「わざわざこんなことまで来て下さって、ご苦労様です」
「えッいえ・・・まぁ・・・・（なんなんだこの爺さんは？頼むから早くしてくれよ！）」
「それじゃあワシは仕事に行くんでゆっくりしていってください」
「いってらっしゃーい・・・・・」

おじいさんが家を出た後、柿野は家中を探し回ったがそこにサツキの姿はなかった。
二階のサツキの部屋も知らないで入ったが誰もおらず、すでに逃げ出した後だった。

「ここにもいないのかよ、それにしてもこの部屋の住人・・・・アキバ系か？」

結局サツキに合えず柿野は家を出て車に乗り込むと、携帯を取り出して電話をかけた。

「あーもしもし？」
「～柿野！どうした！津山サツキと接触できたのか！～」
「それがなんかいないみたいなんすよ」
「～何ィ！？どういうことだ！！～」
「だからいないんすよ！もう逃げちゃったんじゃないっすか？」
「バカモン！！のんきなこと言ってないでさっさと探せぇ！！」

柿野は電話を切ると、携帯を助手席に放り投げて車を発進させた。

「まったくうるさい爺だな、それにしてもここ来ることを分かっていたのか？」

そして同時刻、自宅マンションの家を出てゆみが学校へと下校している途中だった。
サツキのことがやはり気がかりだったのか、ゆみはまたサツキの実家へと向かっている途中、柿野の乗った車とすれ違っていたがもちろん気づくはずも無かった。

そして家に向かう途中、道路沿いの畑にいたサツキのおじいさんに気がつき声をかけた。

「サツキのおじいさーん！！」

「あぁ？」

ゆみの声におじいさんは立ち上がると、ゆっくり歩き、ゆみの方へと向かった。

「こんにちは、サツキのおじいさん」
「これはこんちにわ、サツキのお友達かい？」
「えッ？あッはい・・・・」

このとき、ゆみは自分のことを知っているはずなのに何故疑問系なのか、少し不思議に思ったが特に気にはせずサツキのことを尋ねた。

「あのおじいさん、サツキくん今日は家にいますか？」
「今日はって、いつもおるでね」
「えッ？それってどういうことですかッ！」

二十二、続・夜逃げ前夜（後書き）

深まる謎、そしてこの思い。謎の男の黒幕の正体とは一体・・・・。

つづく

二十三、彼らの行方。（前書き）

以下省略。

二十三、彼らの行方。

「おはよ～、母さん」
「ああ節子、恵介起こしてきてくれない？朝ごはんはもう出来てるから」
「はぁ～い・・・・・」
藤木の姉、節子は藤木を起こしに階段を上がって部屋の戸をノックした。

「恵介ー！朝だぞー！起きなさいー！」
・・・・・・・・・・・・・・。
部屋からはなんの反応もなかったので、節子はドアを開けて部屋の中を覗き込んだ。

「恵介ー！いつまで寝てるのー！お姉ちゃん今日は早番なんだから早くしてよね！」
だが、いくら声をかけても反応がなかった。頭にきた節子は部屋に入り込むと、ベッドのにふくらみを確認すると、そのまま布団を剥ぎ取った。

「恵介ーッ！さっさと起きな！！何度言わせれば・・・・・」

だがそこには藤木はおらず、ふくらみの正体はゲームキャラの抱き枕だった。
藤木は家を出るときに怪しまれないように美少女抱き枕を変わり身にして家を出ていたのであった。

その後、節子はあわてて階段を駆け下り藤木がいなくなっていることを伝えた。

「おかーさーん!!恵介がいないー!!」

そして時を同じくしてサツキのおじいさんから話を聞いたゆみはサツキの家へ走っていた。
おじいさんの話によれば、いつも家にいるのはたしかみたいだが、最近はあまりサツキの姿を見なくなったという。

「・・・サツキか、そういや最近見とらんのぅ、家にいるのは確かじゃが、毎日部屋にこもっているみたいでのぉ、どうしたもんか・・・・」
「・・・・えッ?彼、家に居るんですか!?・・・・」

ゆみはどうしても確かめたかった、何故サツキは突然学校に来なくなってしまったのか、あの交通事故でなにかがあって、それ以来学校に来なくなってしまったこと、一向に姿を現そうとしないサツキになんとかして事情を聞きだしたかった。

ようやくサツキの家に到着し、走ってきて疲れたゆみは息を切らしながら家の戸を叩いたがやはり応答がない。

「サツキーッ!!いるのは分かってるのよー!!出てきなさいー!!」

いくら呼んでも答えるはずも無く、痺れを切らしたゆみは戸を開けて家の中に入った。

「まったくもう!今日という今日はとっ捕まえてやるんだから!!」

階段を上がり、二階のサツキの部屋の前に来たゆみは部屋の戸を何度か叩いて呼んでみたものの、やはり応答が無かった。

「サツキー!いつまでそこに引きこもってるつもりー?皆心配してるんだから早く出てきてよ!」

「・・・・・・・・・・」

「もー頭ッきた!!サツキーッさっさと出て来い!!」

ゆみは勢いよく部屋の戸を開けたが、そこにサツキの姿はなく、部屋のちゃぶ台の上には飲みかけのジュースの缶が転がっていて部屋の中はやたらと散らかっていた。

「あれ・・・・・サツキ・・・・?」

部屋の中をいくら見回してもサツキの姿が無く、ベランダも確認してみたがはやりものけの殻であった。

「サツキ・・・・しかたない、放課後また来てみよう」

そしてゆみはサツキ宅を後にし、一路学校へと急いだ。
その頃、藤木の実家では姉と母が藤木がいなくなったことに気がつき、姉は自転車で藤木を探しに町内を走り回っていた。

「バカ恵介!!何処で会議なんてしてるのよー!!まったく!見つけたらタダじゃおかないんだから!!」

だが、いくら藤木が行きそうな場所を探し回っても、そこに藤木の姿は無かった。
それから姉節子は地元だけでなく隣町の方まで自転車で探しに向かった。

そしてその頃、サツキの学校では相変わらず空席のままのサツキの席を見つめながらゆみが軽くため息をついていた。

「サツキ・・・・・」

休み時間、ゆみは教室から出て廊下を歩いていると、後ろからかおりが追いかけてきた。

「ゆみー!」
「かおりちゃんどうしたの?」
「今日も津山くんこなかったね・・・・」
「うん・・・・・」

「大丈夫だって!元気だしなよ!きっとなにか事情があるんだよ!」
「そうだね、わかってるよ・・・・」
「ゆみ、本当に大丈夫?」
「うん大丈夫大丈夫・・・・」

その日一日ゆみは気が晴れることはなかった。
そして次の休み時間、机の上でボーっとしながらうつむいているゆみのところへかおりがまた話しかけた。

「ゆみー?」
「えッ?あぁ・・・・何かおりちゃん・・・・」
「気分悪いの?保健室行く?」
「うん大丈夫、ちょっと昨日あんまり寝てないだけだから・・・・・」
「やっぱり津山くんのこと・・・・・」
「仕方ないよ・・・・それは、どういうことになってるのか分からないし・・・・」
「うん・・・・・」

二人が話しているところへ、隣のクラスからヒロが訪ねてきた。

「ゆみー、いるか?」
「ああヒロ、どうしたの?」
「お前今日藤木のヤツ見なかったか?」
「え?藤木?」
「あぁ、アイツ今日学校来てないんだよ」
「遅刻じゃないの?」
「俺もそう思ったんだが、もう二時間目終ってるし、遅刻はないと

は思うんだが・・・先生が俺に聞いてきたからさぁ」
「いや、私は今朝は見てないわよ?風邪でも引いたんじゃないのあのバカ?」
「それなら事前に連絡が来ると思うんだが来てないんだって」
「きっとずる休みよ!どっかに遊びにでも行ってるんでしょ」
「そうか・・・?じゃあとりあえず担任にはそう言っておくわ、じゃあな」
「私も何か分かったらヒロの先生に言っておくから!」
「ゆみ、藤木くん今日サボり?」
「知らないわ、まったくあのバカ、学校休んでなにやってんだが・・・」

それから学校は終って下校の時間、ゆみは途中でかおりと別れ、帰宅の前にサツキの実家へと向かっていた。
だがその途中、偶然自転車で通りかかった藤木の姉節子が気がつき、あわててブレーキをかけてゆみを呼び止めた。
自転車のブレーキの気がつき、ゆみは節子の方を向いた。

「あッ!ゆみちゃん!」
「えッ?あぁ、藤木のお姉さん?どうしたんですかそんなにあわてて?」
「ウチの・・・ウチの恵介見なかった?」
「えッ?藤木・・・君ですか?いや、今日はまだ・・・なにかあったんですか?」
「いないのよ!ウチに!!」
「えぇ!?」

その言葉にゆみは驚いた、今日藤木が学校へ来ていなかったことをヒロから聞いていたことを思い出した。

「今、ウチのおばさんが電話していろいろ確認してくれてるけどみんな何処にも心当たりがないって・・・・。」
「そうなんですか?藤木くんはいつごろからいないんですか?」
「昨日の晩から・・・・なんか友達の家に遊びに行くようなことは言ってたけど、ゆみちゃんなにか心当たりない?」
「いえ、私はなにも・・・・・」
「そうなの・・・・ゴメンね、それじゃあもちょっと探してみるね、いろいろと教えてくれてありがとうね!」
「いえ・・・・」

そのまま節子は再び藤木を探しに走り去っていった。

このときゆみは何かが起こっている、ゆみはそう思いサツキの実家へと走って向かった。
実家に到着したゆみはいそいでそのまま縁側から上がり、二階のサツキの部屋を再び訪ねたがやはりそこには今朝と同じ光景が広がっているだけだった。ゆみはため息をついた。

「はぁ・・・・サツキ、何処にいるの?」

ゆみはカバンをその場に置くと、サツキの部屋の中をいろいろと見て回った。なにかサツキに繋がる手がかりがないものか、そう思いながら部屋の中を見回した。

「アニメキャラとか銃ばっかり・・・・・サツキってこういうのが好きなのね・・・・藤木みたい・・・・まぁ一緒にいるから仕方な

いか・・・それにしても汚い部屋！」

ふとゴミだらけのちゃぶ台の上をふと見ると、その上には一枚のなにやら手書きでかかれた紙が一枚置かれていたので気になったゆみはふとその手紙の様なものを手に取った。

「なにかしら・・・これ？」

見ると、その紙には殴り書きになにやらメモがされていた。
ゆみは人目で分かった、このメモの文字はサツキの字だと。

「これって、サツキの字だ！」

殴り書きに書かれたそのメモには、今までゆみたちが知るはずも無かったサツキ本人の心の叫びがばらばらに、時々ふざけているような感じで書き殴られていた。

俺はもうここには居られない、いずれヤツらが駆けつけてくるだろう。

俺の正体がみんなにバレるのも時間の問題、俺ら東京さいくだ！

俺はなんでこんな姿になってしまったのか、もし誰かに助けを求め、この秘密を打ち明けても誰も信じてはくれないだろう。

だったらいっそのこと死んでしまい、なにも残らず、そして綺麗さ

っぱり居なくなってしまいたい。

死ぬ前になんかラムネでも飲んでみたい、それからきれいさっぱり流されるだけだ。

流されるって言ったら水洗便所か？それともボットン便所か？

くそまみれ～くそまみれ～、アイツの人生くるくるぱー、俺の頭もくるくるぱー。

というわけで俺はしばらく姿を消すことにしよう、多分もうここへ戻ることもないだろう。

俺の嫁たちよ、さらば。

「どういうことなの・・・・・サツキ」

一体なんのことなのかまったくワケがわからなかった。

そしてそんなゆみの心配をよそに、その頃俺と藤木はひたすらに自転車をこいでいた。

山道を抜け、まだまだ県内の中だがかなり遠くの街までやってきていた。

「なぁサツキ、今どのあたりを走ってんだ俺達は？」

「さぁな・・・ちょっとどっかで休むか」

俺はちょうど近くにコンビニを見つけたのでそこで少し休むことに

した。
まあ、休むとはいうものの、実際はただ店に入って漫画雑誌を立ち読みするだけだった。
そこで小一時間ほど時間を潰した後は再び自転車に乗ってひたすら八王子方面へと走り続けた。

二十三、彼らの行方。（後書き）

つづく

二十四、露天風呂パニック（前書き）

以下省略。

二十四、露天風呂パニック

俺と藤木は根岸さんたちの下へ自転車に乗って分からぬ目的地へと向かっている途中だった。
段々と空が曇り始め、ぽたぽたと雨が降ってきたので俺達は足を急いだ。

「おいサツキ！雨だー！」
「やべぇ降ってきやがった！どこかで雨宿りするか」

田んぼ近くにバス停があり、そこには屋根付きの待合小屋を発見したのでそこで一時雨宿りすることにした。
いつまでも止まない雨に俺と藤木はベンチに座ってボーっとしていた。

「なぁーサツキよー、いつまで降るんだこの雨は？」
「俺が知るかよ！天気予報見ろよ！」
「俺携帯持ってないんだよ」
「っち！めんどくさいなー、おめぇラジオ持ってないなの？」
「もってないんだよね残念ながら」
「ふーん、そいつぁすげえや」

藤木にかまうのはめんどくさい、俺は隣に置いた風呂敷の中からノートＰＣを取り出して一人勝手に海上戦闘のゲームをやり始めた。

「サツキなにやってるんだ？」

「大東亜対戦ＤＸ」
「なんだその飛行機は」
「一式陸上攻撃機の桜花雷撃部隊」
「そうか・・・俺もゲームやるか」

藤木はボケモンを始め俺は一人対戦ゲームに熱中していった。
そして俺はゲームをやりながら考えた。
これから俺一体何をすべきか、一体どこへ向かっているのか、そこまで大まかなことは知らされては居なかった。
だがいずれにしろ、俺はこの極秘の薬品、もとい化学兵器という物騒なものを運び届けなければならないのだから・・・・。

とはいえ、俺らはこれからどうしたらよいのか、雨も降ってきてしまったしこの辺りには旅館やホテルといったものはない、あるのは道と山、そして水田のみ。

ぼーっとしている間に俺の操作する一式陸攻２４型はあっという間にエンジンから火を噴いて墜落し、爆発した。

「あッ！おいサツキ！火噴いてるぞ！！」
「えッ？うぁッ！！やべぇマジだ！！」
「あー・・・ああ・・・落ちた」

～ＧａｍｅＯｖｅｒ～

「俺としたことが・・・・」
「サツキ、お前さっきボーっとしてたぞ、疲れてんじゃないのか？」
「かもな・・・そういや朝からずっと動きっぱなしだもんな、無理もねぇ」

俺は深くため息を付いた、するとそこへバス停の前に一台の軽トラがやってきて止まった。
するとその軽トラに乗っていた人が窓を開けて俺達に声をかけてきた。

「やっと見つけたよ～サツキくん！」
「え？あぁ！！あなたは・・・・・」
「よッ！」

車に乗っていたのはなんとこの間サツキに例の薬品を渡したあの浦島秀吉だった。

「ひッ秀子さ・・・・いや秀吉さん！どうしたんですかぁー？」
「いやぁ～探したよ、さっき君のうち行ったら誰も居ないからさーまさかとは思ってケースに取り付けた発信機を頼りに探してたんだよ」
「ええ発信機！！そんなの付けてたんすか！」
「ゴメンゴメン！忙しくてつい言うの忘れてたわｗｗ」
「ずいぶん楽観的な人だな・・・・・この人」
「とりあえず二人とも乗って、目的地まで俺がのせてってあげるよ」
「本当っすか！！」
「やったぜサツキ！これでなんとか助かったわー」
「わかった秀吉さん！自転車は後ろでいいっすか？」
「ああ、乗せるから手伝おうか？」

こうして俺と藤木は軽トラの荷台に自転車を乗せてもらい、秀吉さんの運転する軽トラに乗り込んでそこから走り出した。

刹那、ちょうどそのすぐ後を柿野が運転するワゴン車が追い抜いていった画誰も気がつくはずもなかった。

「ったく、どーこいったんだあの子・・・・せっかくお土産持ってきたのになー」

何も知らなずに柿野は本拠地へと戻った。
車の中で藤木は運転する秀吉さんと何かを話しているが、そして俺はといえば、相変わらず何もしゃべらず、無愛想な顔でただボーっとガラス越しに流れる外の景色を眺めていた。

窓に当たって流れ落ちる雨に俺は引き込まれるかのように昔のことを思い出していた。

俺がまだ男だった頃、部室で一人俺は何もすることはなく、同じように窓の外を眺めていた。
楽しくなかった、面白くもないが、別に退屈はしないが退屈である。
だがその退屈な時間の中にも面白さがあった。

ふと机の上を見るとよく時間潰しに俺が売ってる拳銃のガスガンが置いてあった。
気がつくと俺は拳銃を持っていた。
俺は机の上に置かれた空き缶に向かって弾を発射、カンっと軽い音が響き、まるでスローモーションのように空き缶はゆっくりと床の上に落っこちてはねた。

ボーっとその空き缶を見つめていた時だった、藤木が俺のことを呼

んでいたので俺は夢から覚めた。

「おいサツキ！サツキ！」
「えッ！？なに・・・・」
「お前どうしたんだ、さっきからボーっとして何度も呼んでるのに」
「えッ？あッあぁ・・・すまん、ちょっとボーっとしてた」
「そうだな、君達朝からずっと自転車で走りっぱなしだったみたいだし疲れているんだよ、近くに旅館予約してあるからそこで今日は休もう」
「準備いいな秀子さんって・・・・」

藤木がそう言うと秀吉さんはわざとテレながらノッてくれた。

「そうかしらー、てへ♪」
「秀吉さん大丈夫かほんとに・・・・」

そんな俺の心配をよそに、車は旅館の駐車場へと入っていった。
だがそのすぐ後に偶然にもサツキのことを狙う男、柿野が乗った車も旅館へと入っていった。

だが柿野はそこに偶然にもサツキがいることをこのときはまだ知らなかった。

「あーあ、結局会えなかったなぁーサツキちゃん、まぁ今日は露天風呂にでも入って疲れを落とすか」

俺達の乗った車とその男の車は別の離れた場所に車を止め、お互い

に気がつかないまま荷物を抱えて旅館の中へ入っていった。

そして俺達一向はロビー受付で部屋の鍵をもらい、案内された部屋に入って足を伸ばした。

「それではご夕食までごゆっくりどうぞ」

「はぁ～疲れた・・・・・」

俺はおやじみたいにその場に腰を下ろし、風呂敷の荷物をそこに下ろし早速パソコンを取り出してテーブルの上で一人いじり始めた。

「二人とも、お茶入れようか？」

「あッどうも・・・・・」

「あッ秀子さん！この饅頭サービスだって」

「やった！私饅頭だーい好き♪サツキも食べる～？」

「秀吉さん・・・・！」

「今は秀子でいいのー♪」

そういうと俺は後ろから秀吉さんに抱きつかれた、秀吉さんの大きな胸が俺の背中に当たる、なんだが凄い複雑な気分だ。

それもそのはず、この人も元は俺と同じ男だったのだから。

おまけにすっかり女性っぽくなってるし、しゃべり方とかも・・・・。

俺はそう考えると軽くため息をついた。

「はぁ～・・・・ダメだもうこれ以上ホント頭おかしなるわ・・・・」
「もうなんでそんなこというのよぉ～サツキちゃんのいじわるぅ～」
「（うぜぇぇーッ！！！）」

心の中で叫ぶ俺、そして一方ですぐ隣の部屋には柿野が宿泊していた。
柿野はテーブルの上に荷物を広げ、明日の作戦に向け準備を進めていた。

「まったくあの爺の考えることはわからないな、まぁどっちみちあの子を捕まえることは変わりないし」

刹那、彼の携帯が鳴り出した。

「だれだ？」

ピッ

「もしもし？」
「～柿野か？～」
「ああドクター？なんですか今俺忙しいんすよ？また後じゃだめっすか？」
「～何を言ってるんだ！例の小娘度もは捉えたのか！？～」
「ああ、それならこれからやりますよ、だからちょっと待っててくれませんか？」
「～何ィ！！ばか者！！時間がないんださっさと捕まえろ！！～」

柿野は電話を切って一人露天風呂へと向かった。

「まったくうるさい爺さんだ、あの子捕まえたらこの仕事下りるか・・・まッそれまでは予算もあることだしその分ゆっくり寛ぐとするか」

その頃、隣の部屋の俺達はというと、こちらも同じく風呂へ行く準備を始めていた。

「よーしそれじゃあ露天風呂行こうぜ！サツキ！！」
「いや、俺はいいよ・・・お前と秀吉さんで行って来いよ」
「サツキくんは行かないの？」
「いいですよ、俺は一人でパソコンいじってますからいってらしゃい」
「えぇー？いかなのーサツキくん♪」

するといきなり秀吉さんは俺の頭を自分の胸に押し込み、俺はその胸の中で窒息しそうになった。

「ぐあああああー！！なッなにをー！！ちょッ！秀吉さー！」
「秀子って呼んでぇ～♪」
「わああ！！何をやってるんだこの人はー！やッやめろぉ～！！」

秀吉さんに絡まれる俺を見つめていた藤木に俺は何とか引き離すようにに言った。
だが本人もかなり興奮気味のようで鼻血をたらしながらうなずいて

いた。

「おおぉ！！生の百合始めてみたー！！」
「バカヤロウ！！鼻血なんかたらしてないで助けろ！！秀子さんも離れてくださいよー！！」
「あはは・・・・」

秀吉さんの方を見るとこっちも藤木と同じような感じで鼻血をたらしながらニヤニヤしていた。

「うわ！ダメだこの人！藤木と同じだ！！」
「はぁはぁ・・・サツキちゃーん♪」

ダメだ、これ以上は俺の手には負えない。
俺はしぶしぶ一緒に風呂に行くことを了解した。

「あーもう！！分かりましたよ！一緒に行きますからやめれぇー！！」

胸が俺の背中に当たる度に鼻血が出そうになり、堪えるので精一杯だった。
そしてなんだかんだで俺と藤木と秀吉さんはお風呂の方へと向かった。

俺と藤木の前を秀吉さん、いや秀子さんは楽しそうに鼻歌を歌いながら本当の女の子みたいに楽しそうに歩いて、その後ろの俺はそれを見て呆れていた。

「はぁ～、この人にはプライドってもんがないのか？それともとっくの昔に朽ち果てたのか？・・・・やだなぁ～俺も将来こんな風になるのか・・・・・」
「まぁいいじゃないかサツキ！俺はそれでもかまわないぜ！」
「うるせぇよお前マジ帰れよ、ったく人のことだと思いやがって・・・・」

かっこよく言う藤木に俺は止めを刺すようにそう言い放った。
そんなこんなで露天風呂の前に来た。

「さて、そんじゃ入るか」
「ああ違うよサツキくん！そっち男風呂だよ？」
「へ？何言ってるんすか、男が男風呂に入っておかしいとでも？」
「いや、今の君は女の子だし、そのまま男湯に行ったらまずいでしょ」
「えッ？あぁッ！！そうか・・・・でッでもやっぱりなんか抵抗あるな・・・・初めてだし」
「よーしなら俺も行こう！」
「お前は男湯だろ！」
「ちぇ・・・・」

俺は秀吉さんに肩を押されながら禁断の園へと誘われた。
暖簾をくぐり脱衣所に入るなり俺は顔を真っ赤にしてあわててそこに広がる光景から視線をそらした。

「（ってオイ・・・・・！！生着替えッ・・・・！？）」

そこには他の若い女性客が着替えの最中だった。その衝撃的な光景にメガネがズレ落ちた。
しょっぱなから俺は顔を真っ赤に鼻血を堪えながらあまり周りを見ないようにして服を脱いだ。
今俺の後ろでは他の若い女性客が生着替えの真っ最中、俺の心臓の動きは高鳴りを増していた。

俺はふと秀吉さんの方を見たが、秀吉さんは涼しい顔で服を脱いでいた。
この人は正気なのか？こんな状況下で平然と服を脱いで・・・・。

ブラを外そうとしたので俺はあわてて目線を下にし、あまり周りを見ないようにタオルで胸を隠しながら露天風呂へと急いだ。

二十四、露天風呂パニック（後書き）

後半へつづく

二十五、湯煙蜃気楼（前書き）

以下省略

二十五、湯煙蜃気楼

湯煙で俺のメガネが白く曇り、そのおかげで視界がさえぎられ落ち着いて俺は湯船に使っていた。
俺の目の前にはすぐ若いほかの女性客がいるのだがそれを考えると鼻血が出てきそうなので俺は必死に何も考えないように無心になっていた。

「（いかん！ダメだダメだ！一体俺は何を考えてるんだ！邪念を捨てろ！無心になるんだ！）」
「どうしたのサツキくん、そわそわして・・・・？」

心の中でそう自分に言い聞かせていると、突然背後から何者かの気配がした。
次の瞬間、俺の背中になにやらやわらかいものが当たるのが分かった。

秀吉さん、いや秀子さんだった・・・・・。

「なにしてるんですかアンタは・・・・」
「いいじゃなーい♪なんとなくこうしていたいの♪」

あーこの人は重病だ、きっと打ち所が悪かったのだろう。
俺はそう思いながら湧き上がる葛藤を押さえ込んだ。

「ちょっと秀吉ッ秀子さん離れてよ！」

「そんなこと言わないで・・・・ね、いいでしょ～」

すると秀吉さんは胸を俺の前に突き出し、突然俺の腕をつかんで無理やり俺の手を自分の胸に押し当てた。

「はぁッ!?」

その瞬間、俺の頭の中に衝撃が走りその柔らかな感触に鼻血が吹き出そうになり、湯気で曇ったメガネがズレおち、思わず俺は鼻血を噴出して湯の中に顔面から突っ込んだ。

「ぎゃー!!」
「ちょっと血が!!」
「大丈夫ですか!?」
「あ、サツキくん・・・・ちょっとやりすぎたか」

俺の鼻血で露天風呂は赤くにごり、それを見ていたほかの女性客と秀吉さんが俺を抱えて湯船からなんとか起こしてくれた。

「あなた大丈夫?」
「サツキくん!」
「あへ・・・・?」

気絶していた俺は目を覚ますと、ふと視線の先には秀吉さんの大きな胸が目に入り、俺は再び鼻血をダイナミックに噴出して再びぶっ倒れた。

俺が目を回している頃、隣の男湯にいる藤木は、壁の向こうから聞

こえる声にため息をついていた。

「いいなぁ～・・・・サツキは、合法的に女湯に入れて・・・・・・
それに引き換え、俺は・・・・・」

ふと視線を前に向けると、彼の前には厳つい男達と老人。その光景に彼は酷くなりそうだった。

「おえぇ・・・・気持ち悪い、そろそろ俺も上がるか」

風呂から上がろうとすると、突然藤木の隣にいた男が話しかけてきた。

「ねえきみ」
「はい？」

藤木に話しかけてきたのはサツキを狙う男、柿野だった。
柿野は呼び止めた藤木に落とした手ぬぐいを渡してくれた。

「これ君のでしょ？」
「ああ、どうも・・・・（うあぁーなんだこの見るからにチャラい男は・・・・はぁ～サツキと女湯入りたかったなぁ～）」

藤木は心の中でそう呟き、風呂場を後にして脱衣所で浴衣に着替えた。
すると突然藤木の目の前に見るからにハゲかかった中年男の股間が

鏡に反射して目に入り、それを見た藤木はまるで地獄にいるかのような思いをした。

藤木が地獄を見ている頃、俺は秀吉さんより先に旅館の浴衣に着替えて入り口横のロビーのベンチで一人、自販機で買った缶ジュースを飲みながら一人ボーっと物思いにふけていた。

「はぁ～、あやうく貧血になるところだったぜったく・・・・」

時々ぼやきながらちびちびと缶ジュースを飲んでいると、ちょうどそこへ風呂上りの藤木がやってきた。

「おお、ここに居たのかサツキ！」
「あぁ・・・・」
「あれ、秀子さんはどうした？」
「秀さんならまだ風呂入ってるよ」
「そうか・・・・なぁサツキ！！」

すると突然、藤木は俺に顔を近づけてくだらんことを質問した。

「なッなんだよ！つかおめぇ顔近ぇ！！」
「女子風呂ってどんな感じだった？？」
「はァ？お前とうとう底まで落ちたか・・・・」
「いいからどんな感じだった？」
「普通だ」
「普通？」
「ああ」

「いいものは見られたのか！？」
「いいものって・・・お前なぁ・・・・」
「お前女子風呂入って何も見ないで出てくるとは邪道だぞ！！」
「バカかよお前は、俺は三次元なんぞには興味はねーよ！」
「なんだよつまんないのー！」
「つまんねーじゃねーよ！こっちとら鼻血が止まらなくて大変だったんだぞ！！」
「結局見てんじゃねーか！！」
「うるせぇー！好きで見たんじゃねーよ！勝手に視界に入ってくるんだよ！！、そのたびに俺は貧血になりそうでいろいろな葛藤が頭の中でうずめいてすっげぇーしんどいんだぞ！！」
「おいらはすっげぇーうらやましいんだぞ！」
「お前人の話聞いてんのか！！」

俺と藤木が言い合っているさなか、風呂からちょうど上がってきた柿野が二人の話し声に気がつき、影から二人の会話を窺った。

「ん、あれは・・・・さっきの子・・・・あぁ！隣に居るのは！！」

ついに見つかってしまった柿野はサツキを見つけた、気づかれないようにそっと様子を窺うことにした。

「まさかこんなところで会えるとは・・・・これは寄り道しておいて正解だったな。」

すると柿野は携帯を取り出してルミスに連絡した。

「～柿野か！～」
「あードクター、終に彼女見つけましたよ」
「～何！？本当か！～」
「ええ、同年代くらいの男子と一緒です」
「～今どこにいるんだお前は～」
「ホテルですよ、間違いありません」
「そうか、いいか！下手に動くと気づかれる、慎重に行動しろ」
「了解・・・・」

柿野は藤木が離れたところを狙おうと思い待ち伏せをしていたがなかなか離れないことに若干イラ付いていた。
するとそこに風呂から上がってきた秀子さんが、風呂上りに大きな胸を揺らしながらこっちにやってきた。

「おーい二人ともー♪」
「秀吉ッいや秀子さん！」

そして秀子さんの浴衣姿に藤木はよだれをたらして興奮していた。

「うおぉーッ！！ひッ秀子さん・・・・浴衣姿もまたええなぁ～♪」
「藤木・・・・・」
「触ってみる？」
「えッ！？」
「ここ」

秀子さんは自分の胸を指すと、藤木がいやらしい手つきで触ろうとしたので俺は藤木の首元にチョップを食らわして気絶させた。

「うへへえぇｗｗ」
「うらぁッ！！

ドゴッ！

「アブッ！！」
「ちょっとサツキくん！大丈夫なの？」
「ぜんぜん問題ないよ、こいつはコレくらいでくたばるようなヤツじゃないからね」

サツキの攻撃力を影で見ていた柿野は思っていたサツキのイメージに少し引いたものの、その後後を付け部屋を突き止めた。

「なるほど・・・ここが彼らの部屋ってことか、あれ？ここって隣俺の部屋じゃね？」

柿野はそれに気づき、ある作戦を思いつき決行することにした。
その頃、部屋に戻ったサツキたちは夕食を済ませ、藤木と秀子さんは布団の上に座りトランプをやっている横で俺は一人、パソコンに取り込んだエロゲーを一人プレイしていた。

「ねぇねぇサツキくんも一緒にやらない？」
「いいっすよ俺は、もうほっといてくれ！」

ここまでで散々な目にあった俺はこれ以上変につきまとわれたくないのでエロゲーに集中した。

「けッ・・・アホくせぇぜまったく・・・・」

俺はイヤホンを繋ぎ、二人の声が聞こえないようにした。

「どうしたんだろうサツキくん・・・・」

「さぁね、サツキもいろいろあったから疲れてるんすよ」

「いろいろねぇ、なにがあったの？」

トランプをやりながら藤木と秀子さんは話し出した。

「サツキから聞いたんですよ、僕も始めはまさかサツキだとは思わなかったもんで、打ち明けたときは驚きました・・・だって男が女になるなんてまるで漫画の世界じゃないですか」

「でもその薬を我々が作ってしまったせいでこんなことになってしまった・・・彼にはホントに申し訳なく思っているよ、だから一刻も早くあの薬を届けて元に戻る方法を考えないと」

それから夜は更け、俺と藤木はまだ寝ずにテレビを見ながらお茶を飲んでいた。

その横では秀子さんは鼻ちょうちんをふくらませすやすやと眠っていた。

「秀子さんもう寝ちゃってるよ」

「テレビの音で起きないとは、どういう構造してんだこの人・・・・」

「なぁサツキよ」

「なんだよ？」

「胸見せてくれよ」
「はぁッ!?お前なに言ってんの?」
「いいじゃねーかよw別に減るもんじゃないし」
「いやそういう問題じゃねーよ!なんで突然そんなこと言われなきゃなんねーんだよ!」
「よいではないかー!それとも・・・向こうに戻ったときに岡崎や中村にお前のこと話してもいいんだぜぇ~?」
「あぁ、言ってみろよ?そんときはお前をぶっ殺してやるからよ」
「スマん・・・・・やっぱなかったことで・・・・・」
「なんなんだよお前は・・・・・」

深夜アニメを見ながら俺と藤木はそんなくだらないことを話し合っていた。
それからアニメが終わり、俺と藤木も床に付いた。
隣の布団から藤木が時々俺に抱きついてこようとしたので俺は藤木の腹にケリを入れて追い返した。

ようやく静かになった、皆寝静まったようだ。
だが刹那、深夜に謎の尿意が俺を襲う。絶えられなくなり俺は布団から起き上がってトイレへと向かった。

「かわやはどこだぁ?」

部屋を出て人気のない廊下を歩いてると、突然後ろに気配を感じた俺はふと後ろを振り返った。

「ん、?」

だが、だれもいない。俺は気にせずトイレへ向かった。

二十五、湯煙蜃気楼（後書き）

つづく

二十六、愉快爽快俺誘拐！？（前書き）

夜中ニ一人、便所へ向カウ俺一人。其ノ背後ニ人影現ル！！

二十六、愉快爽快俺誘拐！？

背後に何者かの気配を感じた俺はふと後ろを振り返った。

「誰だ？」

振り返るとそこにいた人影が突然俺に飛び掛ってきた。

「サツキー！！」
「うわあああああーッ！！」

俺はとっさに飛び掛ってきたそれにパンチを食らわした。

「このぉボケぇ～ッ！！！」

バコッ

「おえぇッッ！！」

それはそのまま俺の足元におっこちた。
良く見るとそれは藤木だった、俺は呆れてため息をついた。

「なんだ藤木かよ、ったくこんな夜中になにやってんだお前は？」
「いや・・・ちょっとトイレに・・・・」
「嘘つけこの野郎！お前今俺になにかしようとしただろう！」

「連れション行こうせ！サツキ」

歯を輝かせ俺の方をつかんでそういった藤木に俺は顔面パンチを食らわした。

「ったく寝てろ！」

「サツキ～」

結局藤木は俺の後を付いてきた。

だがここでまた再び問題が発生した。男子便所か女子便所どちらを使うべきか・・・・・。

いや、この時間帯は他のお客さんは寝てるし、今この場にいるのは俺だけだし。

男子便所入っちゃえ・・・・。

「おいサツキ、お前は女子便所だろ？」

「は？」

ああ、忘れてた・・・コイツもいたんだった。てかなんだよ、おめぇーも入るのかよ！

俺は嫌そうな顔で藤木を見た。

「何言ってんだよおめぇ、俺は男だぞ！男の俺が男子トイレ入ってなにか問題でもあるんか？」

「いやだから今のお前は女だろ？」

「うッ・・・・・」

藤木に俺を言われてなにも言い返せない今の自分に無償に腹が立つ。
いっそこの場で下をかんで死んでやろうかと思った。

「でもまぁそれでも俺は別にかまわないぜサツキ！俺はいつでもウエルカムだッ！！」
「じゃかましいわボケェッッ！！」
「ウドッ！」

俺は藤木に回し蹴りを食らわして気絶させ、一人男子トイレへと入って用をした。

「バカタレが・・・・さっさと寝ろや」

トイレを出た後、部屋に戻るため廊下を歩いていると再び背後に気配を感じた。
おおよそ想像は付く、藤木のバカがまたろくでもないことしようとしているのだろう。
俺はもう一発食らわしてやろうと後ろを振り返ったその刹那、俺の背後にいたのは藤木ではなく背の高い男だった。

「うわッ！！」

刹那俺は意識を失い、しばらく真っ黒な世界が続いた。
俺は一体どうしたのだろうか、一瞬出てきたあの背の高い男は誰なのか・・・・・。

気がつくと、俺は学校にいた。
どうやら俺は授業中に居眠りをしていたようだ・・・・・。

「あれ・・・・ここは・・・・」
「津山！お前いつまで寝てるつもりだ？」
「えッ？」

寝起きの俺をクラスの皆が笑う、同じクラスのゆみも俺の方を見てクスっと笑っていた。

ひょっとして俺は夢を見ていたのか？俺は窓の外の風景を見ながらそう考えていた。
そうだ！あれは夢だったんだ！窓に反射して写る俺は男の姿だった。

相変わらずの馬鹿ッ面、いつもの俺だった。

チャイムが鳴り、授業が終ると俺は一人何処へ行くのか・・・・体か勝手に動く。
どうすることも出来ない、ただ流されるだけ、まるで今の俺みたいじゃないか。

言うことを聞かず、まるで誰かに操られているような感覚、でも俺は逆らおうとは思わない。
別に困っているわけでもないし、ただ勝手に体が動くのだ。

何も考えず、ただひたすら階段を上ってゆく。これはいい、楽だ。

たどり着いたそこは校舎の屋上だった。
誰も居ない屋上に俺は一人、ただそこにたたずんでいた。

何故俺はここに来たのか分からない、今は特に用はないはずなのに、
何故俺はここに来たのだろうか？

ふと後ろを振り返ると、そこには一人の少女が立っていた。
ゆみか？だが違う、俺の前に居るのはゆみでもかおりでもない。

あれは・・・・俺？

目の前にいた少女は夢の中の俺だ。何故もう一人の俺が現実に存在するのか？

「お前は・・・・・俺なのか？」

だがもう一人の俺は何も答えない、すると歩き出したもう一人の俺は歩き出して俺の方をと向かってきた。
俺は触ろうと手を伸ばしたが、まるでホログラムのように体がすり

抜けていった。
そのままもう一人の俺は壊れた金網のスキマから校舎の淵に立った。

「おッおい！待て早まるな！！」

なにか危険を感じた俺はとっさに自分自身の身投げを阻止しようと飛び掛った刹那、まるで幻のようにもう一人の俺は消えうせ、俺はそのまま校舎の屋上から転落し、意識を失った。

「はッ！！」
「あぁ、やっと目が覚めた？」
「えッ？・・・・・・こっここは・・・・・・」

俺はいつのまにか車に乗っていて両手を両足をロープで縛られ、ワゴン車の後部座席で目を覚ました。

「なっなんだここはー？」

車を運転する男は見る限りチャラい感じのイケメンとでも言った感じだった。
俺はただならぬ状況で内心パニックになり、縄を解こうと暴れた。

「くそッ！！なんだよこれ！おめェ俺に何するつもりだー！！」
「うそ！もうお目覚めかい？サツキちゃん」
「さッ・・・・サツキちゃん？」
「おっと、自己紹介が遅れた。俺は柿野圭一、なんだかよくわかんないけどさ、上からの命令で君を連れてくるように命令されちゃってさぁ」
「なッ何い！？」

このとき俺は確信した、あの時俺をさらったのはこの男・・・・ということはこの男はヤツラの仲間・・・・。
俺は一気に恐怖に駆られ、高速の上を走る車の中後部座席でむちゃくちゃに暴れまわった。

「うあああああ！！ちっくしょーッ！！」
「そう錯乱しないで、そうだ！俺と付き合わない？そうすれば俺が上に何とか頼んでやるからさぁ」
「ふざけんなコノ野郎！！今すぐ下ろせェェーッ！！」
「強気な性格だね～ますます俺の好みだ」
「うやあああああ～！！！」

刹那、火事場の馬鹿力が働き両手のロープが切れ、俺はその瞬間懐に忍ばせていた護身用の十四年式拳銃を抜き取り、車を運転する柿野に飛び掛って首を押さえ込み、銃を一発フロントガラスに撃ち込んだ。

ダキューン！

「この野郎ォォーッ！！！」
「うわッちょっと！」
「おらあぁあー！！今すぐ下ろせーッ！！」
「ちょッちょっとやめろ！！」
「俺が貴様の彼女だぁ！？ふざけんなよこのカマ野郎ォ！！俺はぁ男だ馬鹿ァァーッ！！」

俺はハンドルを奪い取り車は蛇行運転でまわりを走る車を突き飛ばしながら走っていった。
完全にブチ切れてしまった俺は柿野の鼻や目に指を突っ込み、しっちゃかめっちゃかになりながらハンドルを操作した。
相手のこめかみに銃口を突きつけ、無我夢中で車を止めようとしたが止まらず、車は暴走、蛇行運転を繰り返した挙句防音壁に突っ込み、刹那車はそのまま高速を飛び出して横の会社ビルに会議中に突っ込んでいった。

「わあああああああー！！」

～会議室～

「ここ二月でこれだけ売り上げが下がっているとはどういうことかね？」
「このままではわが社の利益がないままじゃないかね！」
「ですから、それは先日も申し上げましたとおり・・・その・・・

・・」

「・・・・わあああああああ！！・・・・・・・」

「え？何？」

次の瞬間、窓ガラスをぶち破り会議室に一台のワゴン車が突っ込んできた。

ガラス片を撒き散らしながら車は衝撃でその場に横転してやっと止まった。

一瞬何が起こったのかわからず

その場にいた会議中の社員たちはみな騒然としていた。

「痛てて・・・・・クソッ！」

俺は軽く頭から血を流しながら割れたフロント部分から抜け出してその場に立ち上がると、目の前のただならぬ視線にも怒りは治まらず、握っていた拳銃を会社員達の目の前で懐に仕舞いこむと、車の中で目を回す柿野に向かって悪態をついた。

「このクソったれが！！とっとと実家に帰りやがれオカマのフニャ○ン野郎が！！オタクなめてんじゃねェぞこのクソビッチ！！」

中指を立てて柿野に怒鳴り散らす俺、正気に戻った俺は周りの視線に気がつき、髪を振り乱してふらふらした足取りで一目散に会議室を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・」
「あ？・・・・・・どうもお騒がせしました・・・・・・」
「な・・・・・・何・・・・今の・・・・・」
「仕事のしすぎで疲れてるのかしら・・・・・・」

「警察に電話しろーッ！！」

二十六、愉快爽快俺誘拐！？（後書き）

つづく

ちょっと軽く風邪引いたっぽいかも・・・・、次の更新日までにはなんとか間にあるようにはするがｗ（更新日って言っても不定期だけどねｗｗ

二十七、行方不明の二人。（前書き）

車の中で目を覚ましたサツキは、自分が誘拐されたことに気がつき車内で暴れ、車は操作を誤って高速道路から飛び出し、近くの商社ビルに突っ込んだ。

二十七、行方不明の二人。

頭から軽く流れる血を押さえながら俺はビルの非常階段を急いで降りていた。
突然のことだったので状況がまったく分からず、とにかく今は安全なところに逃げることが先決だと考え、俺はいそいで階段を駆け下りた。

「一体なんなんだ・・・・早く旅館に戻らないと！」

非常階段を下り、どうやらビルの裏側のゴミ捨て場の辺りに出た。
俺はたたまれたダンボール箱を押しのけ、裏側のフェンスをよじ登って隣のビルの駐車場を通り抜けた。

駐車場を抜けて出ると、そこはちょうど車が行き交う大通りだった。
辺りを見回すと、高層ビルばかりが立ち並んでいた。俺は今どこに居るのか、状況が分からなかった。

「あれ？・・・・・山梨じゃないぞここ！」

俺はまさかとは思い、大通りの標識を見てみるとそこに書かれていた文字に驚いた。

三鷹・東京

「えッ？・・・・ってことは俺・・・・今東京にいるってことか？」

ようやく頭の中で整理が付いた、俺は誘拐された。あの金髪男に、そして今ここに居る。
俺は納得してうなずいていた。だがそんなとこしている場合ではなかった。

今の俺は一文無し、お金は全部旅館に置いて来てしまった。
俺はその場で腕を組んで悩んでいると、そこに突然学校帰りだろうか、一人の女子高生が話しかけてきた。

「あなた、大丈夫？」
「え？」
「何があったの？頭から血が出てるよ！」
「え？血・・・？」

言われて初めて気がついた、額に手を当てると手には血が付いていて驚きのあまりお約束のリアクションをとった。

「なッ・・・・なッなんじゃこりゃーッ！！！」

俺は再び意識を失い、その場にぶっ倒れた。
その頃、旅館に居る秀子さんがちょうど目を覚まして布団から起き上がっていた。

「あー・・・・よく寝た・・・・二人ともおはよーってあれ？」

隣の布団に二人の姿がなく、不思議に思った秀子さんは部屋を出て

二人を探しに廊下を歩いていたときだった。
トイレの前で藤木が頭に大きなたんこぶを作って熟睡している姿が目に入ったのであわてて駆け寄った。

「ふっ藤木くん！どうしたの？しっかり！」

よくみると、藤木のおでこに「サツキという少女は預かった。お前らの計画はお見通しだ」と書かれた紙がテープで止められていた。

「しまったー！！サツキがヤツラにさらわれた！！！」

パニックになる秀子、異変に気がつきようやく藤木が目を覚ました。

「あーあ・・・あれッ？俺なんでこんなとこで・・・・・？あぁ秀子さんおはようございます」
「藤木くん大変だ！！サツキがサツキくんがさらわれたッ！！」
「なッなんですって！！？」

秀子さんは急いで荷物をまとめ、旅館を出ることにした。藤木も急いで車の助手席に乗り込むと、秀子さんはいきなりアクセル全開で駐車場から飛び出して二人の乗った軽トラはサツキの元へと向かっていった。

同時刻、地元山梨の蓬莱町ではちょうど登校の時間でゆみは自宅のマンションを出て河川敷を歩きながら学校へ向かっていた。

やはり気がかりで仕方なかった。ゆみは不穏に思いながら歩いてい

ると、後ろから突然かおりが抱き付いてきた。

「ゆーみ！」
「わぁ！かッかおりちゃん！」
「おはよーゆみ」
「おはよう・・・てかアンタ突然抱きついてるのよ」
「いやぁ～ゆみの後ろ姿があまりにも可愛かったから抱きつきたくなっちゃってね」
「・・・・・・・」
「どうしたのゆみ？なんか機嫌悪いみたいだけど？」
「えッ？そっそんなことないよ？・・・・」
「もしかして津山くんのこと？」
「えッ！」

かおりのその言葉に動揺するようにゆみは反応を示した。

「大丈夫だよゆみ、きっとなにか事情があって来れないんだよ」
「サツキのことなら平気よ！どうせ藤木と一緒に居るどっかで遊んでるんでしょ・・・・」

学校に付き、ゆみは自分の席に腰を下ろすと、サツキの空いた席を見つめた。
何故だろうか、ゆみはいつも何気なく見ていたサツキの姿が消えてから不思議と空しい気持ちに襲われた。

「はぁ～。」
「ゆみ・・・・」

その様子を心配そうにかおりが見つめていた。
そして授業明けの休み時間、自分の席でボーっとしていると、あわてた様子でクラスの男子が数人騒いでいた。

「おい！今学校に警察が来てるぞ！」
「なんか事件でもあったのかな？」

偶然その話を聞いたゆみは急いで職員室へと走り出した。
階段を駆け下り、一回の職員室の前に来るとドアの隙間からなにやら話し声が漏れていたのでゆみはそっとその隙間からそっと応接室の中をのぞいた。

そこには担任と校長先生、そして三人の刑事とサツキのおじいさんと藤木の母と姉の姿があった。

「あれ・・・！藤木のお姉さんとおばさんも・・・・」

「まだ見つからないんですかウチの息子は？」
「現在調査中でして、恐らく恵介くんは恐らく誘拐されたのか、それか家出。失踪なのか、現段階では行方不明ということですが・・・・。」

藤木はともかく、サツキが居なくなったことが何より精神的にショックになっていてゆみはなにか関連性を感じていたが、でもそれはハッキリしたことではないのでゆみはまだすぐに戻ってくるだろうとあまり気には留めなかった。

だがその半面ゆみには信じられなかった、ついこの間まで一緒に近くにいたサツキや藤木までもが忽然と姿を消した。
階段を駆け上がっていると、その途中でひろに呼び止められた。

「ゆみー」
「え?あぁ、ヒロ・・・・・」
「どうしたんよゆみ?何かあったのか?」

ゆみは何も言い出せなかった、昨日まで当たり前のような存在が突然自分の前から居なくなったことが受け入れらないからだ。

「なッなんでもな!!」
「おッおいゆみ!!」

そのままゆみは自分の教室へと戻った。
その日の放課後、部活を休みゆみはそのまま家に帰った。サツキがいなくなってしまって以来、あまり気が乗らない。

気が晴れぬままゆみは自宅のあるマンションへと帰ってきた。
だが家に帰ってくるとなんだが様子が変だった。玄関に知らない靴が並んでいた。

「ただいまー」
「ゆみ、おかえりなさい」
「お母さん?どうしたの今日は仕事・・・・」
「実はねゆみ、さっき警察から電話があってね・・・・」

「あぁ、知ってる。藤木が居なくなったんでしょ？今日学校に藤木のお姉さんも来てたの見たよ」
「違うのよゆみ、落ち着いて聞いて。サツキくんが行方不明なのよ・・・」
「えッ！？？」

母のその言葉にゆみは言葉を失った。ついこの間まで自分の近くにいた当たり前のような存在であったサツキが行方不明。その事実に藤木の失踪との関連があることは間違いなかった。

「お・・・お母さん・・・・」
「奥で警察の方が待ってるから」

その後ゆみとゆみの母は奥のリビングで刑事二人と事情聴取を受けた。

「どうも、岡崎ゆみです・・・・」
「お忙しいところ申し訳ない、ゆみちゃん。お母さんから聞いてるとは思うけど、津山サツキくんという少年の捜索願が出ていてね」
「昨日の晩に彼のおじいさんから通報がありましてね、サツキくんのおじいさんが夕飯にこないサツキくんを呼びに言ったが部屋には居なかった。彼のおじいさんから確認したところ、四週間前から姿を見ていないそうだ。調べたところ、同じ学校の藤木恵介くんという生徒さんも行方不明で捜索願が出ている。」
「そんな・・・・」

突然のことにまったく状況が分からず頭の中が混乱した、無理のないことだった。

「ゆみちゃんはサツキくんと幼い頃からの知り合いだと聞いたんだが、何かサツキくんのことで知ってることはないかな？なんでもいいんだ、何か彼が失踪前に変わった様子はなかったかな？」
「わかりません・・・・・でも、学校に来なくなる前の日にサツキくんが交通事故に会った事なら」
「交通事故？どんな事故だったか分かるかい？」
「交差点でトラックに撥ねられて・・・・重症みたいだんたんですが、すぐに退院したって・・・・友達が・・・・」

ゆみの話をもう一人の刑事が細かくメモした。

「そうか・・・・ありがとう、他になにかなかったかい？」
「・・・・・・・・・・。」
「ゆみ・・・・」
「わかりません・・・・・今は何も・・・・」

ゆみはとても信じられなかった、サツキが家出するなんて考えたこともなかったからだ。
その後刑事が帰った後、ゆみは一人自室に篭りベッドの上に座って考えていた。

どうしてサツキがいなくなってしまったのか、恐らく藤木と一緒に家出したのは確かであるが何故家出しなければならなくなったのか、ゆみはこれにはきっと何かがあると確信していた。
だがそれがなんなのか、今のゆみが知る由もないことだった。

「サツキ・・・・・何処にいるの・・・・・」

「んー・・・・・痛ててッ・・・・」

意識が戻った俺が目を覚ますと、俺はベッドの上に寝ていた。そこには知らない天井が広がっており、どうやらどこかの家の部屋の中のようだった。体を起こして辺りを見てみると部屋の内装からして、女の子の部屋のようだ。

「・・・・・ここは何処だ?・・・・・」

「気がついた?」

「えッ?」

ふと声に気がつき、横を見るとそこには制服姿の一人の知らない少女がいた。

俺はどうしたんだ?

二十七、行方不明の二人。（後書き）

つづくよ

二十八、暗い闇に咲いた華（前書き）

以下省略、でゲソ

二十八、暗い闇に咲いた華

「・・・・ここは何処だ・・・・・・？」
「気がついた？」
「えッ？」

そこには知らない少女が一人いた。
誰だこの人・・・・そして俺は今どこに居るのか、分からない・・・・記憶があいまいだ。

「あの・・・・ここは・・・・あなたは誰ですか？」
「私は笹本しおり、あなた大丈夫？さっきあなたが気絶しちゃって私がここまでおんぶしてきたの」
「はッはぁ・・・・・」
「ここは私の家、怪我の手当てはしておいてあげたけどしばらくは横になっていた方がいいよ」

頭に手を当ててみると頭に包帯が巻かれて右腕にガーゼが巻かれていた。

「そうっすか・・・・ありがとうございます」
「ねぇところであなた名前は？」
「あぁッ俺サツキ。津山サツキです。」

「津山サツキちゃん・・・・私のことはしおりって呼んで」
「はぁ・・・分かりましたしおりさん・・・・」
「ところでサツキちゃんお家は何処？」
「家は山梨ですけど・・・・」
「えッ！山梨？じゃあご両親とはぐれちゃったの・・・・？」
「いやッ・・・・あのそうじゃなくて・・・・ちょっといろいろあって・・・・・」
「いろいろ？」
「・・・・まぁいろいろ・・・・」

俺は言葉を詰まらせるように言った。
そしてその頃、俺を探して車であとを追っていた秀子さんと藤木は途中のインターで降りて休んでいた。

駐車場に止めた車の中で地図帳を確認する秀子さん、その隣では藤木がゲームをやりながら暇を潰していた。
するとふと藤木は気になっていたことをふと秀子さんに話してみた。

「なぁ秀子さん、俺まだよく分からないんだけどさ・・・・サツキが飲んだ薬って一体なんなんですか？どうしてサツキは女の子に性転換したんですか？」
「うむ、それはだな・・・・前にも話したとは思うけど、あの薬は政府が極秘に開発調査を依頼したもので、その研究中に私と根岸が偶然混ぜた薬品となんらかの化学反応が起こることがわかった。だが彼も私もが飲んだ薬は本来は化学兵器、性転換は恐らく副作用だろうが、そのあととんでもないことが分かった・・・・。」
「とんでもないこと？」
「このケースの中のもう一つの薬、これが能力を目覚めさせる鍵だ。

これを飲むととんでもないことになる」
「飲むとどうなるんですか?」
「藤木くん、君は超能力を信じるかい?」
「えッ?ちょ・・・・超能力?」
「もし冗談ならこんな話マジメにしないさ、それに、私は経験したからね過去に・・・・」
「もッもしかして秀子さんって今エスパーなんですか!!」
「いやいや、とはいってももう7~8年前のことだが。今はもう使えないよ」
「どういうことですかそれって?」

藤木の質問に秀子さんは重い口を開いた。

「私はあの薬を開発したとき、成分分析の過程でそれが人間の中に眠る特殊能力を目覚めさせる効果があることが分かったんだ・・・・それでそれを早く確かめたかった私は薬を飲んだ。だが特殊能力には目覚めなかった。だがその代わりに私の体に変化が現れた・・・・。」
「それが・・・・サツキみたく性別が変わってしまったっていう・・・・」
「そうだ、私も正直始めの頃は驚いたよ・・・・特に驚いていたのは根岸の方だったがな。いろいろ証拠を見せてやっと信じてもらえたよ」
「でも秀子さん、薬を飲んでもその時は超能力は使えなかったんですよね?どうやって使えるようになったんですか?」
「ああ、それはこのケースに入っているもう一本の薬さ、サツキくんはまだ飲んでないけど私はこの一本をその後に飲んでね。」
「でもなんで秀子さんはもう一本を飲んだんですか?」
「実はなもう一本のこれは解毒剤でね、元の姿に戻るために飲んだ

んだ・・・・だが、結局戻らなくてね。その瞬間に・・・・・・」
「その瞬間に・・・・どうしたんですか?」
「ああ、・・・・私は想像を絶する頭痛と胸の辺りに痛みを覚えてね、あの時は流石に死ぬかと思った・・・・助けを呼ぼうにも実験室には私だけしか居なかったから・・・・」
「そうだったんですか・・・・・・」
「そして意識がなくなりかけたときに私は助けを求めようと机の上に置いた携帯を取ろうとしたがその時私は床に倒れていて動けない状態だったんだが・・・・机の上になんとか手を伸ばそうとしたときだった・・・・・不思議なことが起こった。」
「不思議なこと?」
「ああ、私にも信じられなかったが、突然机の上の携帯電話がまるで手の中にすいよせらるように気づけば携帯が私の手に握られていたんだ・・・・その直後意識を失って・・・・・気がついたら病院のベッドの上さ」
「モノを吸い寄せる力・・・・・その後どうなんたんですか?その力は?」
「その後試してみたが、やはりダメだった・・・・恐らくあの力は一瞬の幻だったのか・・・・それとも夢だったのか・・・・その後私の力は無くなっていた。」

その話に藤木は神妙になった、なにか聞いてはいけないことを聞いてしまったようで戸惑っていた。
秀子さんは絶対にサツキに自分と同じようになって欲しくないと思い、間違ってももう一本の薬を飲まないように言った意味がやっと分かったが本当にそんな力が存在するのか?このときの藤木にはとても信じられないことだった。

俺はふらふらっとベッドから起き上がった。

「ああ・・・そうだ、早く根岸さんに会ってこのとこを知らせないと！」

「どうしたのサツキちゃん？」

「えッあいや・・・その、俺ちょっと用事思い出して・・・・・・」

「えぇ・・・もう行っちゃうの？ゆっくりしていけばいいのに！！」

「いやッ・・・そんな悪いっすよ、こんな見ず知らずの俺を・・・・」

「何言ってるのよ、困ったときはお互い様よ？」

よくよく考えてみれば俺はこれからどうすればいいのだろうか。肝心の根岸さんたちの居場所が分からないんじゃ行くあてもない。迷った挙句俺はここに留まることを決めた。

「えーでも・・・・良いんですか？俺なんかが・・・・」

「大丈夫、あなたはなにも心配しなくていいよ。」

「でっでもご両親にも迷惑がかかるんじゃ・・・・」

「それなら私がお父さんに後でなんとか言ってみるから心配しないで」

「は・・・・はぁ・・・・・」

刹那、俺の腹が音を立てた。それもそうだ、俺は今朝から何も食っていないのだから、むりやり連れ去られてきて、気絶していたので飯を食う暇はなかった。

腹の音を聞いたしおりさんは気を利かせて何か食べ物を持ってきて

くれた。

「あッ・・・・そういや今朝からなんも食ってなかったんだ俺・・・・」

「はい」

彼女はそういうと俺に菓子パンをくれたので俺はそれを夢中になってほうばった。

「あさーず!こんな見ず知らずの俺に・・・・・ここまでしてくれるなんて・・・・・」

「いいのよ、ねぇところでさ。サツキちゃんあの時何があったの?」

「あの時・・・・・あぁ・・・実はちょっといろいろありまして・・・・・」

「いろいろって?」

「まぁー・・・・その・・・・・」

俺はこれまでのことを話してよいのか、見ず知らずの今日会ったばかりのこの人に・・・・・。

この人は俺が男であることなど知る由もないだろう、もし言っても信じてもらいない。

俺はまた再び悩んだ。

「私には話せないことなの?」

「それはー・・・・その・・・・・」

「大丈夫、私誰にも言わないから!」

「いや・・・その・・・・多分話しても信じてもらえないよ」
「大丈夫、私は信じるから！」
「本当ですか？」
「うん、だからお願い！話して、なにか力に慣れるかもしれないし」
「・・・分かりました・・・・・・」

言葉を詰まらせ、悩んだ挙句俺は重たい口を開いた。
そして俺は今日あったばかりの彼女にこれまでのことを全て話した。

「実はな俺は・・・本当は男なんだよ・・・」
「えッ？ちょっとまって・・・・あなた男の子なの！？でっでも・・・」
「いいですよ、無理に信じろとは言いませんよ、本来ならありえないことなんですから。信じるも信じまいもあなたの自由ですよ。」
「いいや、でもそうね・・・・。あなた男の子みたいなしゃべり方してるし・・・・」
「だから俺とかかわるのはやめたほうがいい、家に止めてくれるのはうれしいけど、あなたを危険に巻き込みたくないんですよ、今日あったばかりの見ず知らずの方に・・・・」
「そんな！そんなこと聞いたら放っておけないよ！」
「ちょッ！ちょっとまってくださいよ！こんな話本当に信じるんですか？普通の人間が聞いたらみんな俺を頭のおかしくなった少女としか思いませんよ？」
「それでも私は信じるわ、だからあなたは・・・・サツキくんは私が守ってあげる！」
「し・・・しおりさん・・・・・・」

俺は彼女の言葉になにか励まされたような気がした。こんな姿になってから誰にも会わず、一人ですべて何とかしようとしていた俺は

助けを求めるということを、一番困ったとき人に頼るということを忘れていた。

俺は思わず目頭が熱くなり、ぼろぼろと涙を流していた。
そんな俺を無条件で受け入れてくれたのは彼女が始めてだった。すると彼女は俺のことをそっと抱きしめて頭をなでてくれた。

「すんません・・・ほんとすんません!・・・・」
「なんで謝るの?・・・おかしな子」

彼女はそういって笑っていた、俺の前に天使が現れた・・・。
こうして俺はこの笹本家にしばらくの間お世話になるのであったが、まさかこんなことになるとは思ってもいないことだった。

二十八、暗い闇に咲いた華（後書き）

つづくんじゃなイカ？

二十九、変態科学者と真人間（前書き）

あけおめです！　今年はじめの投稿。

二十九、変態科学者と真人間

とある川原の河川敷の林の中に一台の軽ワゴン車が停まっていた。
そこには彼ら三人、根岸、ミナコ、そしてアキラがそこで身を潜めて暮らしていた。

外出時、根岸は付け髭にメガネをかけて出かけていた。なぜならそれは彼が指名手配されているからだった。

茂みの中から一人の男が現れた。

「誰ッ!?」
「俺だ藤崎!」
「根岸君・・・・大丈夫だった?」
「問題ない、だがいつまでもここに留まっているわけにもいかないしなぁ、早く東京を出ることを考えよう」
「あの・・・・博士、サツキくんは大丈夫なのですか?」

心配そうにアキラがそう訪ねてきた。

「分からない・・・・彼と連絡が取れない限りはなんとも・・・・・・
こっちに向かっているのは確かだが我々の場所が分からないから・・・・・」
「どうすれば・・・・・・」
「とりあえず、今は自分達の身の安全を確保することが先決だ。」

同じくその頃、組織のドクターミルス率いる手下達は東京の町中を血眼になって根岸たちを探し回っていた。
だが、あれからまったくなんの進展もなく、ドクターミルスはイライラしていた。

「くそぅ～ッ！！まだ根岸は捕まらんのかッ！！」
「ただいま総動員で捜索に当たっておりますが・・・・未だ・・・・・」
「くそッ！！どいつもコイツも役立たずばかりで・・・・・！！」

するとミルスは電話の受話器を取り、どこかへと電話をかけた。
電話の相手は彼の手下の一人、傭兵の笹本であった。

「あーもしもし？」
「なんだ貴様か・・・・何のようだ。」
「そっちの方の手順はすすんでいるのか？」
「問題ない、それより金の方は大丈夫だろうな・・・・」
「金なら問題ない、仕事が終ればお前の口座に振り込まれる」
「そうか、分かった。」

そう言って笹本は電話を切った。
そしてミルスはもう一つのある計画を始動させようとしていた。

ミルスは基地内のある部屋にやってきた、そこには様々な実験が秘密裏に行われている現場で、基地内でも一部の関係者以外は立ち入ることを許されていない秘密の研究施設だった。

内部には透明な円形の水槽の中に、裸の一人の少女が体じゅうに管

をつけられた状態で特殊な水に漬けられて眠っていた。

「ふっ・・・・・だがもうすぐ、もうすぐで計画が完全なものとなる・・・・この世界を私だけのものにする時が・・・・フハハハハッ!!」

ドクターミルスが極秘裏に進めていたある計画、それはこの水槽の中で眠る少女が関係していた。

サツキの地元ではサツキと藤木の失踪騒ぎでゆみとヒロ、そしておりたちは警察からそれぞれ個人的に事情聴取を受た、そして三人は休み時間に教室に集まって話し合っていた。

「ゆみ、ほんとに藤木からなにか聞いてないのか?」
「聞くも何も、聞き出す前に姿消されたのよ・・・・たぶん藤木はサツキと一緒にいるのは確かよ」
「でもゆみ、藤木がなにか隠してるのは確かなのよね?」
「ええ、でも一体何故サツキのことを話さないのか・・・・・」
「もしかしてなんか事情があるんじゃないのか?だから話したくても話せないとか・・・」
「話したくても話せない・・・・か。」
「ねぇゆみ、昨日も津山くんち行ったんでしょ、なにか行方を知る手がかりとかはなかったの?」
「手がかり・・・・何も、あるのはHなマンガ本とか人形とかだったし・・・そんな手がかりなんて・・・・はッ!」

その時、ゆみの記憶の中にあの時部屋で見つけたサツキが書いたと思う奇妙なメモの存在を思い出した。
ゆみはあの後、メモを持ち帰ってカバンの中に入れっぱなしにしていたのでその場にサツキの書いたメモを二人の前に出した。

「そういえば、この間サツキの部屋でこのメモを見つけたんだけど・・・・」
「メモ？」
「これ津山くんが書いたやつなの？」
「なんか内容が意味不明だな・・・・・どういう意味なんだ？」
「くるくるぱーって・・・・」
「・・・俺の正体がみんなにバレるのも時間の問題、俺ら東京さいくだ・・・・どういう意味だこれは？」
「正体がバレるって・・・・どういうことかしら・・・・」
「東京行くだ・・・・・か・・・・」
「東京？」

その言葉にゆみは反応した、以前藤木が話していたことを思い出した。
イベントなどでサツキとよく秋葉に出向くことがあるというあの時の言葉が真っ先に頭の中に聞こえた。

そしてその時、ゆみの中で何かが繋がった気がした。

「分かったわ・・・・・・」
「えッ？」

「藤木とサツキは・・・・東京にいるのよ!!」
「東京!?」
「どういうことなのゆみ?」
「前にたしか藤木のバカが言ってたのよ、イベントでしょっちゅうそこへ二人で行くことがあるって」
「でも東京のどの辺りにいるのか・・・・」
「それなら多分秋葉原辺りじゃないのか?それか千葉県の方か・・・・」
「中村くん詳しいね」
「一度二人に無理やり連れてこられたことがあってね・・・・あの時は流石に大変だったよ」
「それにこのメモのはじめに書いてあること、正体がバレるっていうのは一体なんのことなのかがまだ分からないわ」
「ひょっとして何かのメッセージとか?」
「やっぱりタダの家出じゃなくて本当に誘拐とか!」
「いや、それは違うと思うな・・・・私は・・・・・なにか他にあるのよ」
「でも藤木をとっ捕まえない限りは真相は謎のままだな」

その頃、噂をされていた藤木は大きなくしゃみをして鼻水をたらしていた。

「ハァークション!!!」
「藤木くんどうした?風でも引いたか?」
「いえまさか・・・多分誰か俺の噂でもしてるのか・・・?」

藤木と秀子さんの二人は軽トラですでに東京圏内に入って追跡を考え途中で高速を降りて山の間の国道を走っていた。

「もう東京都入ったのか?地元と同じ風景ばっかりだな・・・」
「この辺はだいたい八王子かな?もうすぐ付くよ」
「秀子さん、もしサツキのヤツがその・・・組織の人たちに捕まったらどうなるんですか?」
「流石にまだそこまでは推測は出来ん、だが最悪の場合彼は命を落とすかもしれん・・・」
「えッ!!それってサツキが殺されるってことか!!」
「あくまで私の推測だ、奴らは用が住めば口封じのために殺しも惜しまない・・・そういう連中さ」
「それってめちゃくちゃヤバイじゃないですか!!早く助けにいかんと!!」
「ああ、そうだ!だが肝心の本人が連れ去られた居場所が分からないからどうにもこうにもいくまい・・・」

「サツキよ、俺はまだお前の裸見てないんだぞ!絶対に死ぬなよ・・・サツキ!」

藤木は心の中でサツキに呟いた。その一方で俺は笹本家宅のリビングでしおりさんが作ってくれた飯にひたすらかぶりついていた。

俺は飯を食っているときも安心できる、何故かといえばそれは何も考えずに済むからだ。
その一瞬のみ外部から遮断され、その一部が自分だけの世界と化すからである。

「さ・・・サツキくん、そんなにいっぺんに食べたら詰まっちゃうよ・・・・」

「最近ろくに飯食ってなかったから・・・・・」
「ごはんまだあるよ?食べる?」
「はい・・・ありがとうございます」

とりあえず、彼女には大変感謝している。だがこれ以上迷惑をかけるわけにはいかない・・・・。
早く根岸さんやアキラちゃんたちと会わなければならないし、いつここも組織の連中に気づかれるかも知れない・・・・・。
ボーっと考え込んでいると、しおりさんが話しかけた。

「どうかしたのサツキくん・・・?」
「しおりさん・・・やっぱり俺、行かなきゃいけない・・・・このままだと俺のことを待ってる人の命が危ないんだ!」
「えッ・・・もういっちゃうの?」
「もちろん手当てしてくれたことやこんな美味い飯食わしてくれたことは感謝してます・・・でっでもこれ以上あなたに迷惑は・・・・」
「私はいいって、別に迷惑だなんて全然思ってないよ?」
「いやでも・・・・・」
「いいから!さっきも言ったけどサツキくんは私が守るわ!だから安心して!」
「いや・・・ですがしかし・・・・・」

なにかよく分からない罪悪感とはちょっと違う何かが心の中でうずめいていた、

「分かりました・・・・それじゃあまず一つ頼みがあるんですが・

・・・・いいっすか？」
「何？」
「俺の他の仲間を探すのを手伝って欲しいんです」
「いいわよ、でも何処にいるの？」
「・・・・それが分からないんですねぇ・・・・・申し訳ないっす・・・・」
「えぇッ！？」

こうして俺としおりさんとで根岸さんたちを探すこととなった。

二十九、変態科学者と真人間（後書き）

つづく

三十、すれ違う人々（前書き）

以下略

三十、すれ違う人々

ひょんなことで俺、二次元マイスター津山サツキは、女の子になってしまった！
今までは正体を隠し、「月島きらら」と名乗って過していたがある日、悪友藤木恵介に正体がバレてしまった！まさにここから最悪の連続だった・・・・。

そして俺と藤木は住みなれた地を後にし、自転車で一路東京方面に向かっていた。だがその先での旅館で俺は見ず知らずの男に無理やり車で連れ去られ、彼女になることを強請された。その時俺は背筋がゾッとしたのは言うまでもないことだ。

ところで根岸さんやアキラたちは大丈夫だろうか・・・そんなことを考えながら俺はしおりさんと街中を歩いていた。

「ねぇサツキくん・・・・」
「あの、今はサツキちゃんで・・・」
「あぁッ！そっか・・・ゴメンゴメン・・・・サツキちゃん、ただ宛てもなく探すのは無理があるんじゃ・・・・」
「そうっすよねぇ～、自分探し方が下手なもんで・・・・てかそれ以前に居場所がワカンねーっつうの！！」
「ンフッ」

自分で自分に乗り突っ込みをした、するとしおりさんはクスっと笑った。

しかし肝心の根岸さんたちを見つけない限り次には進めない・・・・・
一体どうすればいいのかすら分からない・・・。

「でも宛てもなく探すより聞いた方が早いんじゃないのかな?なにかその人たちの写真とか持ってない?」
「いや、全然・・・・所持品は全部旅館に置いてきてっちゃったからなぁ・・・・・」
「うーん・・・・・」

それからしばらくいろいろなところを探し回った、だが結局見つからず俺の腹時計が鳴りその音を聞いたしおりさんのお腹も鳴った。

「ちょっとお腹すいたね・・・・・」
「俺さっきあんなに食ったのに」
「とりあえず今日のところは帰ろう」

「ちょっとお腹減っちゃったね・・・・・」
「俺さっきあんなに食ったのになぁ〜」
「とりあえず今日のところは帰ろう、また明日探せばいいよ」
「はぁ・・・・」

腹も空いたのでいったん帰ることにした、腹は減ってはなんとやらだ。
その頃、藤木と秀子さんが乗った軽トラが東京に到着し、藤木は一路そのまま車に揺られ都内某所の高校にやってきた。

車が止まり、居眠りしていた藤木はブレーキにそのままダッシュボ

ードにおでこをぶつけて目を覚ました。

「いでッ！・・・・・あれ？」

「着いたよ」

「あれ・・・？こっここは・・・・？着いたんですか？」

「ここは私の職場だ、あれ？たしか前に言わなかったっけかな・・・・？私はこの高校で科学の授業を教えてるだよ」

「マジっすか！凄いっすね・・・・教員免許持ってるなんて・・・・・」

藤木は車を降りて裏門から案内されて校舎の中に入った。

「おっきな学校ですね・・・・・僕の通ってる中学校より広いっすねぇ・・・・」

「まァ都会の学校だからね、とりあえずサツキくん達を早く探さないといけないし、しばらくの間はここで衣食住だな」

階段を一番上まで上がり、最上階の突き当たりの教室のドアの前までやってくると、秀子さんは白衣の内ポケットから鍵を取り出して教室のドアを開けて藤木を中に通した。

（教材保管室）

「しばらくはここで寝泊りするとは思うけど心配することはないよ、ここはめったに人は来ないし。ちょっと散らかってるけど問題ないだろう・・・」

「おお、なんだか僕の中学のＵＦＯ研究会の部室みたいです・・・・・」
「テレビもインターネット回線も繋がってるし、あとは・・・・・そうだな・・・・」
秀子さんは部屋の奥のガラクタだらけの中からダンボールに詰められたインスタントラーメンを引っ張り出してきた。

「食料も心配ない！必要なものは全部そろってるし・・・」
「なんでこんなにそろってるんですか？」
「実は俺、アパート借りる前までここで生活してたようなモンだからな、ハハハ！あッでもお風呂とかは近くにお風呂屋さんがあるから心配ないよ」
「そいや秀子さん、あの薬品は・・・？」
「ああッそれなら大丈夫だ、流石に奴らもサツキくんだけに目がむいていたらしい、彼をさらって肝心のコイツを盗まれなかったのはせめてもの幸いだな」
「組織はなんでこの薬を一体なんのために使おうとしているんですかね？」
「多分戦争にでも使って兵器利用するのが関の山だろう・・・・油断はできんな・・・。とりあえずこれは奥のばれないところに隠しておこう」
秀子さんは薬品の入ったジュラルミンケースを棚の奥の方に押し込み、他のガラクタなどが入ったダンボール箱でケースを隠した。
混乱する運命のさなか、事態は急展開を迎えることとなる。

過去に根岸たちの車に取り付けた発信機の機能が回復したのだった。

「博士！発信機が回復しました！」
「なにッ！そうか・・・・よし、すぐに現在地を割り出せ！奴らを捕らえろ！！」

そしてその一報が入った笹本はミルスの命令を受け、拳銃を装備してそのまま現場へと直行した。

「そうか、それでいまそいつらは何処にいる？」
「荒川の河川敷近くに潜伏している、二人は生け捕りにして根岸は殺せ！なんとしても殺すのだ！」
「分かった、金はちゃんと用意しておけ」

その頃、根岸はこれから脱出するために食料の買出しに出ていて河川敷にいるのはアキラと藤崎の二人だけだった。
車椅子に座りながら川の中でえさをついばむ小鳥を愛用のカメラに収めている後ろで藤崎は根岸の帰りを心配そうに待っていた。
アキラのカメラのシャッター音と行き交う車の音だけが聞こえていた。

「遅いなァ～根岸君・・・・大丈夫かしら・・・・」

買い物を終えコンビニからの帰り、根岸はＡＴＭに立ち寄り、自分

の口座から全額を引き出すとそのままアキラと藤崎の下へと急いで戻った。
だがその途中、通り道の電気屋さんの前を通りかかった根岸は店の前に置かれたテレビの映像を見てあわてて走り出した。

「～殺人や強盗などを繰り返し、現在指名手配中の、根岸宗一容疑者（２８）は、現在もなお人質二名をとり行方をくらませており、現在も警視庁などが捜索に当たっておりますが・・・・」

「くそう！終に動き出したか！」

途中パトカーとすれ違い、身の危険を感じた根岸はあまり人気のない住宅街の狭い路地を通りぬけ、息を切らして二人の待つ河川敷を目指して走った。

「遅いなァ～、何やってるのかしら・・・・・」

「あッ！」

「どうしたのアキラくん？」

「おーい！藤崎！」

草を掻き分け、戻った根岸はいそいで車のドアを開けると、両手に持っていたコンビニの袋を助手席へと放ると、急いで車に乗り込みエンジンをかけた。

「ここもまずくなってきた！藤崎、早くアキラを！」

「どうしたのよ急に！まさか組織に見つかったの？」

「どういうわけか、僕が強盗殺人で指名手配されている・・・・クソッ！」

「組織が警察を見方につけたのね・・・・・」
「サツキくんたちもそのこと知っているのかな?」
「何れにせよ、サツキくんや秀吉の身も危ないかもしれない」
「急ごう!早く乗って!」

急いで車を発進させ、根岸たちは河川敷を後にしてひとまず川の向こうに渡り、埼玉方面へと逃亡した。

「ねぇ根岸くん、どうするのよこれから・・・・・」
「とりあえずどこか遠くへ逃げよう、捕まったら最後だ!」

だがそんな努力も空しく、車のバンパーに取り付けられていた発信機によって居場所は丸見えのじょうたいだった。

「目標が動き出しました!」
「なに?」
「恐らくコチラ側の動きに気づいたと思われます」
「それでヤツらは今何処に?」
「現在埼玉方面に移動してます」
「フッ・・・無駄なあがきを・・・・・、おい!笹本に繋げ!」

「もしもし」
「私だ!」
「貴様か、どうした・・・・」
「ターゲットが移動している、現在地は埼玉県内の国道を走行中だ」
「分かった。」

現場に到着していた笹本は車に乗り込むと、根岸たちの後を追い同じく埼玉方面へと走っていった。
笹本が根岸たちを追いかけている頃、サツキはしおり宅に戻り一人リビングでソファーの上に胡坐をかいてテレビを見ていた。

「流石、東京の放送は地方のローカル放送とは違ってボリュームが多いな・・・・」

俺は地方との微妙なカルチャーショックにくだらんことを呟きながらテレビのチャンネルを回していると、ニュース番組で心当たりのある事件が報道されていてビビッていた。

「～先日、都内の東亜カンパニー株式会社のオフィスビルに、会議中、ビルのすぐ真横にある高速道路から運転を誤ったワゴン車が突っ込み、会議中の社員、五名が軽い怪我などを負い、ワゴン車に乗っていたとされる二名は現在も行方をくらませており・・・・～」

「あッ！・・・・このニュース・・・・・・」
「サツキくんどうかしたの？」
「えッ！いッいえ！・・・・ななんでもないっすよ？ハ・・・・・ハハハ・・・」
「？」

俺はにやけ顔で冷や汗を流してそう答えた。まさかこの事故の原因がこの俺だとは口が裂けても言えないことである・・・・・。

三十、すれ違う人々（後書き）

つづく

三十一、俺迷子（前書き）

以下略。

三十一、俺迷子

翌日の朝、俺は一人しおりさん宅のリビングでテレビを見ていた。
しおりさんは学校に出かけてしまい、俺は一人暇を持てあわしていた。なにもすることもなくただただ暇で暇でしかたがなかった。

「はッ！てか俺こんなことしてる場合じゃねーぞ！！根岸さんたちを探しに行かなきゃ！！」

ソファーから起き上がると、食卓のテーブルの上に置かれた千円札一枚とこの家の鍵を懐に入れて俺はとりあえず散歩がてら捜索に向かうことにした。
登校前、しおりさんは俺にお小遣いで千円を置いていってくれたのだ、ありがたい。

とりあえず俺は住宅街を抜け、ぶらぶらと商店街を歩いていると近くにアニメショップが目に入ったのでついつい中に入ってしまった。

「おお！コミックニート新刊もう出てるのか、うーん・・・・ここは買うべきか買わざるべきか・・・・」

結局、悩んだ挙句俺はその漫画雑誌を買ってしまった。
無理もない、魔法幼女ふたばちゃんの続きがどうしても気になっていたからだ、欲求には逆らえない。
自分自身の忍耐のなさに後悔したが買ってしまったからにはしかたない。

漫画雑誌の入った袋を持ってまたぶらぶら歩いていると、今度は模型屋さんを発見して自然と足を運んでしまっていた。
店は見た感じかなり年季の入った感じで俺は掘り出し物でもあるかと思い、店内を興奮気味に見回していると、店主らしい老人が店の奥から出てきた。

「おお、こりゃまた久々のお客さんで・・・・・」
「あぁ、どっどうも・・・・・」
「いらっしゃい、こりゃま珍しいお客さんで・・・・お嬢さんも好きですかこういうの？」

店主の老人の問いかけに俺は顔を蒼くして答えた。
無理もない、ずっと家の中にいたのだから人と話すのは好きではない。

「えッ・・・・えぇ・・・・まぁ・・・・」
「そうですか、こんな狭い店に来てくれるお客さんなんてめったにおれませんからのぉ」
「はッ・・・はぁ」
「近頃はおおきなお店が出来て、みんなそこに取られてしまって・・・・」

変な爺さんだ、しかしこの店は絶版品のお宝プラモが奥の方にたくさん山済みされていてそれが目に入った俺は思わずそこに駆け寄った。

「おぉ！！こっこれは・・・・幻の１／２０スケール超合金ＤＸ九七式戦闘機！！９８年に発売して短期間の期間限定であまりの売れ残りに発売中止となった幻のラジコンプラモ！！・・・・マニアの間では破格の値で取引されて、もはや市場にはめったに出回らない幻の存在、まさかこんなところで会えるなんて・・・・」

興奮気味に見入っていると、そこへ店主の老人が再びやってきた。

「それはのぅ、だいぶ前に問屋さんから頂いての、昔の売れ残りが倉庫の奥から箱ごとでてきたんじゃよ」

「・・・・そうか、デッドストック品ってワケか・・・・・・」

「もし良かったらあなたにお譲りしましょうか？」

「えッ？」

その言葉に俺は耳を疑った、だがしかし、お宝を目の前にして俺は悩んだ。

そう、今の俺には所持金などほとんど持ち合わせていなかったのだ。幸いさっきのアニメショップで漫画雑誌を買ってしまい、残金は二百円程度しか持っていなかったのだ。

「でっでもすみません、僕ッいや私いまお金が・・・・・」

「いいですよ、これはあなたにお譲りします」

「えぇッ？でっでも・・・・ホントにいいんですか？」

俺はついているのか、こんなところでとんでもないお宝をタダで入手してしまった。

とりあえず、そのままでのお持ち帰りは量的に無理なので宅配便で実家に送ってもらうことにしてもらった。

その後俺は上機嫌にまた再びふらふらと根岸さん捜索へと向かった。だが途中で今自分は何処にいるのかが分からなくなってしまい、こんな歳で迷子になってしまったとは信じられなかった。それはまだ自分自身が内面的にはまだまだお子様だということなのか？

そんなくだらないことを呆然と考えながら歩いていると、近くに交番が見えたので俺はそこで道を聞こうと考えた。だが引きこもりの俺にはそんな勇気はない。

「やべぇ・・・・・迷った・・・・・・。」

そして根岸さんは途中で藤崎とアキラを途中の駅前で降ろした。別れ際に根岸は藤崎に１５０００円ほど現金を渡し、二人は鉄道で逃げることにした。

「藤崎、いいか二人は電車を使って東京に戻れ。とりあえず少ないがコレを使ってしばらくはどこかに隠れていてくれ！」
「根岸君はどうするの？」
「俺は一人で逃げるよ、大丈夫だ！絶対に生きて会おう！」
「約束よ！」

そう言うと根岸は車のドアを閉めて二人を残し、一人走り去って行った。その様子をいつまでも二人は心配そうに見つめていた。

「どうした?」
「~ターゲットがまた移動を始めました~」
「分かった・・・・ちょこまかと・・・・」
「~現在地は蕨市北町、大宮方面へ逃走中です~」
「あまり先を急ぐなよ・・・余計な動きをするとかえって怪しまれるからな」

笹本の車は確実に根岸を追っていた。だがそのことを知る由もない根岸はただひたすら逃げるしかなかった。

「~ターゲットが停止しました!~」
「ヤツの現在地は・・・」
「~埼玉市中央区です~」

そして笹本が現場に到着し、コンビニの駐車場の前に一台の軽ワゴンが停まっており、それが発信機の受信元だと分かった笹本は車を降りて駐車場に停められているその車に歩み寄った。
だがしかし車内を確認するもそこにはすでに根岸の姿は無く、笹本が到着する前に根岸は車を乗り捨てていたのだった。

「クソッ!!」

笹本は車のドアを叩いた、すると彼は携帯を取り出してミルスに連絡を取った。

「俺だ！、ヤツはすでに車を乗り捨てた。ここにはもういない・・・！あぁ、あぁ、分かった！」

呆れた表情で携帯を切ると、急いで車に乗り込んで走り去った。

「まったく、今度はガキのお守りかよ！」

しかし、現場からいなくなったはずの根岸がコンビニの影からその様子を見ていた。

「やはり発信機が取り付けられていたか・・・車はもうつかえないな、」

周りにバレないように帽子を深く被りサングラスとマスクをして彼は一人その場からタクシーに乗り換えてどこかへと向かっていった。

「お客さん、何処まで？」
「赤羽までお願いします」

根岸は赤羽の駅前でタクシーを降りた後、そこから電車に乗り換え行方をくらませた。

その頃、俺はといえば完全に道に迷い真っ青になっていた。
ただいく宛ても分からぬままこれから自分がどうするべきか考えながらひたすらに道を歩き続けていた。

「（やべぇ・・・・今時自分がどこを歩いてるのか分からなくなったぞ!!）」

まずい!これは非常にまずい!
自分勝手にしおりさん宅から出たのが失敗だった、俺は後悔した。
こんなことならいつもどおり一人部屋の中でのんびりしていた方がよかったのではないのか!

絶望感の中ふらふらと道を歩いていると、俺は学校のようなところの前にたどり着いた。
看板を見ると、どうやらここは高校らしい。

しかしふと横を見た瞬間、俺はあるものを見て気がつき、あわててその前に駆け寄った。

「あぁッ!!この軽トラックは!!」

見覚えのある中古の軽トラ、車内を確認して恐る恐る俺は荷台のシートをめくって中を確認し、俺は確信した。
荷台にあったのは俺のオンボロ自転車と藤木の自転車の二台だった。

「俺の自転車!!・・・・なんでここに?ってことは藤木と秀子さんが来てるのか?」

俺は二人が戻ってくることを期待し、車の前で腕を組み寄りかかってしばらく待つことにした。
だが、いくら時間が経過しても現れない。俺は内心イラついていた。

「（ったくあの野郎！なんで出てこねぇーんだよ！！秀子さんもなにやってんだ！！）」

その頃、藤木は秀子さんの秘密の教室で大量のエロ漫画雑誌を読み漁って興奮していた。

「ウヒョーッ！！秀子さん！！こんなお宝どうやって手に入れたんですか！？」

「ああ、それは私が性転換する前にコンビニとかでちょくちょく買ってたんだよ、最近はもっぱら通販で取り寄せてるけどね」

「へぇ～、しかしそれにしてもこれはホントに美味しい・・・・！」

「だろう？その奥の方にもダンボールに入ったのがまだあるよ？」

「マジっすか！！ウヒョーッ！！これは見なければ！！それこそ我が使命！！」

三十一、俺迷子（後書き）

つづく

三十二、馬鹿との再会（前書き）

迷子になった俺は一人知らぬ町をさまよう、そして見覚えのある軽トラックを目撃する

三十二、馬鹿との再会

「ったく・・・・・遅ぇ!!」

あれから小一時間は経過しただろうか、俺は未だにその場にいた。
車のドアに寄りかかりながら、近くの自販機で買ったみそ汁をちびちび飲んだ、鰹だしがきいてて美味かった。

「はぁ〜、もう帰るか・・・・」

流石に痺れを切らせて帰ろうとしたときだった、後ろからなにやら聞き覚えのある声が聞こえた。
ふと声のするほうに向くと、そこにいたのはなんと秀子さんだった。

「あッ!!秀吉ッいや、秀子さん!!」
「えッ?」

秀子さんも俺の声に気がつきあわてて駆け寄ってきた。

「さッサツキくん!!?」
「秀子さん!」
「よくここが分かったね、大丈夫だったか?」
「ええ、まぁなんとか・・・・・でも秀子さんなんでここに?」

「実はここで理科のも教師やってるんだよ、まぁ話は後だ！藤木くんも待ってるから行こう！」
「えッ藤木もか・・・・てか何処に行くんですか？」
俺は秀子さんに案内されて校内に入っていった。
階段を上り、一番隅のあやしげな教室で俺と藤木は再会を果たした。

「よう藤木！元気してたかー、」
「サツキ！！大丈夫だったか？よかったぁー、・・・・俺もう心配で心配で、お前の処女が奪われてしまうのかと冷や冷やしてたぜ！」
藤木も相変わらずの調子だ、そして俺もそうだ。

「誰が処女奪われるだって？この童貞野郎が・・・・！！」
「いでで！！ごめんごめん・・・・サツキごめんて！！」
「ったくてめぇは相変わらずくだらねぇことやってやがるな」
「まぁともあれ無事でなによりだ、ところでサツキくん、根岸にはもう会えたのかい？」
「いや・・・・それがまだ、居場所がサッパリで」
「そうか、でも向こうもこっちの連絡先は知ってると思うから近々連絡があるはずだよ」
「しかし今は何処でどうしているのやら・・・・くたばってなきゃいいけど」

俺は内心、不安で仕方なかった。
根岸さんたちの事もそうだが、一体なにが起こっているのか。状況がまったく分からない状態だった。

ボーっとテーブルに寄りかかりながら一人考えていると、のんきに藤木がエロ漫画雑誌を勧めてきた。

「おいサツキ！凄いぜこれは！！」
「ちょッ！おま・・・・何やってんだよこんな時に・・・・・」
「いいからお前も見てみろよ！凄いぜ！」
「まったく・・・・」

そうは言いつつも結局見てしまう俺、こんなところが情けない。だが自分で分かっていても止められないのが人の性、というものだ。

「うほーッ！！こりゃーすげぇや！！」
「だろ！」
「しかし秀吉さん、よくこんなにも集められたもんですね・・・・・大したもんだ！」
「いやぁ～、成人向け漫画好きでねw」
「例え未成年だとしても、俺らの心はすでに新成人だぜ！！」
「なに言ってんだお前は・・・・まぁいい、おい俺の荷物はどうした？」
「ああそれならちゃんと持ってきた、そこのテーブルの上。」

俺は置かれている風呂敷を解き、中の荷物を確認してノートパソコンを出して電源を入れた。
デスクトップの壁紙の嫁の顔をやっと拝むことが出来た俺はようやく安心した。

「はぁ～・・・・よかった、ふたばちゃん無事だった！」

「サツキ、そういやお前のはまだネット繋がるよな？」
「えッ？あぁ、回線があればどこでも・・・・なんか調べるんか？」
「いや、多分俺らのことニュースになってるかもしれないから、一応現状どうなってるか確認しておきたくて」
「おっけーちょっと待ってろ」

とりあえずぐーぐるで、「山梨　中学二年　行方不明」と入力して検索してみると、なんと驚くべきことに二十件ぐらいヒットした。

「あちゃー・・・・ビンゴだぜ、見てみろよ藤木！」
「マジか、やっぱり大騒ぎになってるのか・・・・読んでみろよ」
「えーなになに？・・・・山梨県笛吹市在住の中学二年の男子生徒が８日未明、行方が分からなくなっているとの通報があり、行方不明になっている二人は市内の中学の同級生で、現在なんらかの事件に巻き込まれたものとみて捜索が行われ・・・・」
「あちゃー・・・・これ確実に俺らのことだよ！ヤベーぜ・・・・」
「ヤバイってことでもねーだろう普通、連中は俺らを探してるんだから」
「普通って・・・・おいサツキ、よく平気でいられるな？こんな非常時に！」
「言うも何も、あの日から俺は非常時のオンパレードだぜ？吹っ切れて当然だろ！」
「そりゃー、まぁ・・・・てか一番ヤバイのは俺だよ！！帰ったらかーちゃんに殺される！！」
「ご愁傷様。」
「白状なヤツめ！畜生！親が海外に行ってるからって・・・・！！」
「お前んとこは姉さんがいるからまだマシな方だろ」

「マシじゃねーよ！姉ちゃんにも八つ裂きにされちまうぜ！！」
「まぁ、その時はその時だ。運命を受け入れな！」
「受け入れられるかぁー！！そんな運命ッ！！」
「あーもう！うるっさいわーホント！！分かったから少し黙ってろよ！」
「何だとサツキ！！貧乳童貞処女のクセに生意気なッ！」
「黙れッつってんだよ！！ケツの穴引っこ抜くぞてめぇ！！」

ついカッとなった俺は懐から拳銃を取り出して銃口を藤木のノド仏に押し付けた。
俺と藤木がもめているのをみた秀子さんが止めに入ったので拳銃を下ろした。

「ちょっと二人とも喧嘩はダメだよ！」
「あッいや・・・・・サーセン」
「ちッ！」

俺は藤木をにらみつけて拳銃を懐に仕舞いこんだ。
しかし自分でも不思議なほどの性格の変貌だ、あの一件があってからまるで違うもう一人の俺がいるかのような錯覚に一瞬囚われていた。

「サツキ・・・・・怖ッ」

藤木はなにやら少し驚いているようだった、正直自分自身も驚きだ。

「それじゃあサツキくん、今までどうしてたか話してくれないかな

？」

「あぁ、はい分かりました・・・・実はあの夜、旅館にいたとき俺はちょっと小便しにトイレに行ってたんですよ・・・・そしてらコイツまで付いてきてね・・・・」

「コイツって・・・・」

「そんで小便済ませて部屋に戻ろうと廊下歩いていたら突然後ろから誰かが俺の頭をなにかで殴って・・・・気を失ってたみたいで気がつくと知らない車の中に手足をロープでしばれられていたんです。」

「まさか、やはり奴らか！」

「かも知れません・・・・そんで運転していた男に上の命令がどうのこうので俺を連れて行くとかぬかしやがってよ！！」

「誰に命令さてたって？」

「いや、そこまでは分からねぇ・・・・話してなかったからな」

「それでその後どうやって脱出したんだい？」

「ああ・・・実は・・・・はぁ・・・・」

「どうしたんだよため息なんかついて」

「いやまぁちょっと頭にきてね、その男が俺を彼女にするとかいきなりワケのわからんことぬかしてきたからさ・・・・」

「なるほど・・・・って、何ィ！！？ナンパされたのかその男に！？」

「声でけぇよバカ！！」

「それでどうしたんだ？」

「頭にきて車内で拳銃撃ちまくったりして暴れて・・・・そのまま高速飛び出してビルに突っ込んだ！」

「なんだそれ！！」

「えッ！」

するとそれを聞いた秀子さんは驚いて俺に尋ねてきた。

「サツキくん・・・ひょっとしてあの事故ってサツキくんが！！」
「えッ？事故ってなんだよサツキ！」
「ああ、やっぱり秀吉さんも知ってましたか・・・・」
「知ってるも何も昨日の新聞に出てたよ！なんでも高速から車がオフィスビルに突っ込んできたって。やっぱり君だったか・・・・でも大丈夫だったの？」
「俺を連れ去った男は気ィ失ってたからそのすきに逃げたよ、おかげで頭から出血、流石に死ぬかと思ったよ・・・・」
「それでその後どうしたの？」
「その後放浪してるところを笹本しおりさんっていうお姉さんに保護されて、今はその人の家にいるよ」
「笹本しおり？」
「秀子さん知ってるんすか！」
「知ってるもなにも、彼女は私の教え子だよ！」
「えぇッ！！？」

驚いた、まさかしおりさんが今俺がいるこの学校の生徒だったとは・・・・。
すると秀子さんはちょっと呼んでくるといい、俺らを残して部屋を出て行ってしまった。

「あ・・・」
「おいサツキ、しおりさんって一体誰だ？」
「えッ？あッあぁ・・・つい最近知り合った人、さっきも話したけど脱走後に俺はその人に助けられたワケ」
「ふーん、まぁなにはともあれ無事で何よりだ！」

そういうとそっと藤木は俺の肩を軽く叩いた。

「はぁ・・・・・」

三十二、馬鹿との再会（後書き）

つづく

三十三、さらば日常！（前書き）

花粉症です・・・・しんどい

三十三、さらば日常！

休み時間の教室、秀子さんは教室で友人と話しているところのしおりさんを呼んだ。

「おーい笹本はいるか？」
「何ー？秀ちゃん？」
「ちょっとお前に話があるからきて」
「えッ？」

秀子さんに手を引かれ、しおりさんはサツキの待つ教室へ連れ去った。

「ちょっと秀ちゃん！話ってなに？何処行くの？」
「サツキくんが待ってるよ」
「えッ？サツキちゃんが・・・・・！！」

その頃、俺と藤木はあわててエロ漫画雑誌を箱に戻して隠していた。
すると秀子さんがしおりさんを連れて帰ってきた。

「早く仕舞えよバカ！」
「誰がバカか！今やってるよ！」

「おーいサツキくん！しおりちゃん連れてきたよ」
「ああ、しおりさん！！」
「サツキちゃん、どうして学校に！」

「ちょっと家を出てからそのへん散歩してたら道に迷っちゃって、」
「それでここに・・・？なんだぁ・・・電話してくれれば私迎えに行くのに。ところでよくここが分かったね！」
「ええ、秀子さんに偶然再会したもんで・・・」
「再会って、秀ちゃんサツキちゃんと知り合いなの！？」
「そうよ？」
「ってことは探してた仲間って秀ちゃんたちのことだったの・・・・」
「いや、まだ仲間は見つかってないんだよねぇ」
「そうなの・・・えッ！ってことは秀ちゃんサツキちゃんが元は男の子ってことも知ってたの？」
「ええ、知ってるわよ」
「なんだぁ～そうだったんだぁ・・・・わざわざちゃん付けで呼んでることなかった」
「サツキちゃ～ん」
「おめぇはちゃん付けすんじゃねーッ！！」

ドガッ！

「ぎゃあああ！！」

俺は藤木の股にケリを入れて黙らせた。藤木は悶絶し床の上を奇声を上げて転がっていた。

「サツキくん・・・その人は？」
「えッ？ああ、俺の友達の藤木ってヤツさ一緒についてきて困ってるんだよ・・・・」
「おいサツキ！！いきなりなにすんだよ！！俺の息子がぁ・・・・！！」

「宜しく、藤木くん！私は笹本しおり」

しおりさんがそういうと、藤木は即座に立ち上がりでれでれしながらしおりさんと握手した。

「どっどうも・・・・始めまして！サツキの恋人、藤木恵介です！！」

「誰が恋人だオラァッ！！」

ドガッ！！

「ひでぶ！！」

俺は藤木にとび蹴りを食らわして吹っ飛ばした。藤木はそのまま用具要れのロッカーに飛ばされこっちたバケツを頭から被り目を回した。

「いつから俺がてめぇの恋人になった！！？」

「て・・・・訂正します・・・・友人です・・・・・」（ガクッ）

「次またくだらんこと言ったらお前のギャルゲー全部俺がもらうからな！！」

「それだけは堪忍や！！」

すると、そんな俺と藤木のやり取りを見ていたしおりさんはクスっとわらっていた。

「二人とも面白い・・・・！」

「やれやれ、そんじゃ私は仕事があるから。笹本！とりあえずサツキはお前んちでかくまっておいてくれ、他の仲間は見つかったらお前んちに電話するから」
「うん、わかった秀ちゃん。・・・・ねぇ秀ちゃん、サツキくんから聞いて気になってたんだけどさ・・・その性別が変わっちゃう薬ってどういうものなの？」
「そうか、まぁ話したならしかたないか・・・・」
「秀子さん、そういやあの薬の入ったケースは？」

そういうと秀子さんは棚の裏から隠していたあのジュラルミンケースを出してきた。

「大丈夫、薬品はちゃんとここにある」
「よかった・・・・でもコレを持っている限り奴らは追ってくる・・・」
「サツキくん・・・・これがその薬品なの？」
「はい」

俺はしおりさんにケースを開けて中身を見せた。

「へぇ～なんか思ってたよりそんなに凄い薬って感じはしないわね・・・・コンビニとかで売ってる栄養ドリンクみたい」
「この薬はまだ試作段階でね、まだその効果がどういうものなのかがまだはっきりと分かってはいないのよ」
「ねぇ秀ちゃん、私がもしこの薬飲んだらサツキくんみたいに、逆に私は男の人になったりするの？」
「いや、性転換してしまうのは男の人だけよ。実際にモニターの女性にも飲ませてみたけどその後は特に変化は見られなかったわ・・・

・・多分これは男性特有のホルモンにしか反応しない」
「遺伝子とかにも反応したりするのか？」
「うん、いい質問だサツキくん！もともと遺伝子というのはＤＮＡ、つまりその物質か関係しているのよ！、そしてそのＤＮＡの中には染色体が存在する。もちろんコレだけじゃ変化は起こらない！」
「変化って？」
「細胞分裂、あるいはそれと同時に起こる一種のアレルギー反応・・・。サツキくんが飲んでしまったこの薬品にはまだ発表されてはいないが、ゼルニウムと呼ばれる成分が含まれている」
「ゼルニウム？」
「ああ、そのゼルニウムと細胞が合体することで反応が起こり、そして体内の男性ホルモンのバランスが崩れて違う形に変換されてしまう・・・。」
「つまりそれが・・・・・」
「そう、性転換。しかし性転換はこの薬が引き起こす副作用に過ぎない・・・。」
「たしか本来は抗ウイルス剤だっけ？」
「ええ、だけど実際はタダの化学兵器、効果はまだ十分には分かってはいないわ」
「・・・・・・・・。」

その話を聞いた俺ら三人は黙り込んでしまった、だがもう時間が無い。
早く根岸さんやアキラたちを助けないといけなし、現在はなんの連絡も無い状況。彼らも必死なのだろう・・・・。

その後藤木となんだかんだあったが、まぁとりあえず二人と再会できたことで心が少し楽になった。
しかし未だに俺を狙う理由が分からない・・・・そしてアキラも同じに。

学校が終ったあと、俺はしおりさんに手をつながれて二人のいる学校を後にし、帰宅した。
俺の手をしおりさんがつかんでくれている・・・・なんか変な感じて顔が少し赤くなった。

そりゃそうだ、生まれてこの方二次元以外の異性に手をつながれたことなど一度もないからだ。
だが今の俺は男ではあらず少女!それも踏まえると妙な感じだった・・・・。

心は男のときのまま、身体は女。だがコレだけはハッキリ言える・・・・・。

俺は今、百合であるとッ!!

頭の中で二次元変換された妄想が映し出され、俺はまるで茹蛸のような状態で顔を真っ赤にして目を回していた。

「アッへへぇー・・・・・」
「どうしたのサツキくん?顔が真っ赤だよ!」
「え?・・・・・あははいやなんでも・・・・・。」

こんな平和なひと時がいつまでも続けばいいと思っていた、だが長くは続くはずも無かった・・・・。
この日を境に俺たちは戦いへと巻き込まれてゆくのであった。

直後、すぐさま秀子さんの携帯に連絡が入った。

「～秀ちゃん!!聞こえる?秀ちゃん!!」
「その声・・・藤崎か?大丈夫だったのか!?」
「～うん、大丈夫よ・・・・アキラちゃんも無事・・・・～」
「そうかよかった・・・・こっちも無事何とか、そういや根岸はどうした?～」
「～それが・・・・～」
「一緒じゃないのか!?」
「～一緒に居ると危険だからって・・・・一人で・・・・・～」
「クソ!!あのバカッ!!・・・・・分かった、で今どこに居るんだ?～」
「～上野公園の近く、そこの公衆電話から・・・・～」
「そうか分かった!いいか藤崎、私が行くまでその場を動くなよ!もしやばくなったらその近くにみどりっていう喫茶店がある、そこで会おう!」
「～分かったわ!もう切るね～」

藤崎は受話器を戻し、電話ボックスから出るとすぐ横のベンチで座らせていたアキラにも話した。

「どうだったんですか?」
「大丈夫よ、二人とも無事だって」
「よかった・・・・サツキくんもこっちに来てるんだ・・・・早く会いたいなぁ」
「すぐ後で秀吉くんがこっちに迎えに来るって言ってたから急ごう

！」

藤崎はアキラを負ぶって公園を出た、それと同時に秀子さんは藤崎の元へと車を走らせて向かった。
藤木はその間例のジュラルミンケースの監視を頼まれ、一人部屋でテレビを見ながらくつろいでいた。

ようやく俺はしおりさん宅へ帰還した、俺は藤木にしおりさん宅の電話番号を伝えておいたのでそのうち何らかの報告があるはず、それまで待機してた方がいいらしい。

帰宅後、俺は今後のことについて藤木と電話で話した。

「お前のもう二人の仲間と合流した後のことだが・・・・その後はどうするんだ？」
「さぁな・・・・俺にもわからん。とりあえずは秀子さんと根岸さんがなんとかしてくれるだろうけど・・・・・」
「もしもってこともあるな・・・・・」
「ああ・・・・。」
「分かった、じゃあとりあえずは秀子さんと話してから決めるか。あの人の言うとおり、今下手に動き回れば俺はおろかお前もどうなるか分からんしな」
「現状維持・・・・・か」
「今は他に手段も無いだろ」
「それもそうだな、分かった」

話を終え、俺は受話器を戻した後深くため息をついた。

三十三、さらば日常！（後書き）

つづく

三十四、変わり行く運命。（前書き）

おまたせしました！やっと最新話うｐれました！！　震災直後はいろいろとバタバタしてまして、だいぶおくれてしまいました・・・。

三十四、変わり行く運命。

一台の車が喫茶店の前で止まった。車から降りてきたのは秀子さんだった。
車から降りた秀子は周囲を確認しながら喫茶店のドアを開けて中に入った。

「あ、秀子こっち！」

藤崎の声に気がついた秀子はあわてて駆け寄り、席の向かい側に座った。

「秀吉君・・・大丈夫だった？」
「ああ、こっちは問題ない。そっちも大丈夫か？」
「ええ。」

「いらっしゃませ、ご注文は？」

話しているとちょうどそこへ店員が注文を取りにやってきたのであわててメニュー表を手に取りアイスコーヒーを一杯注文した。

「お待たせしました、アイスコーヒーになります。ごゆっくりどうぞ。」

そして秀子はアイスコーヒーを飲みながら現状を全て二人に話した。

もうすでに時間が無かった、あれから一向に連絡の取れない根岸も事態は把握しているはずだと考えていた。

「で、これからどうするの？」
「ああ、今後のことだがそれはここを出てからみんなの前で話し合おう。根岸のことも心配だしな」
「そうね、分かったわ。」
「ところで藤崎、お前らいままでどうしてたんだ？サツキくんも心配してたからさ」
「ええ・・・あの日、研究所が襲われて、私とアキラちゃんは根岸くんと一緒にそこからなんとか脱出して逃げることが出来たわ・・・その後は車で逃げて、しばらくの間は三人で河川敷近くで過してたわ、その後で根岸君と別れて私とアキラの二人は三鷹の方のホテルで隠れてたわ」
「そうか・・・こっちはサツキくんともう一人の彼の友人も一緒に車でこっちの方にきたけど、途中でちょっと面倒なことになっちゃって」
「面倒なことって？」
「ああ、サツキくんがさらわれかけてね・・・まぁそれは後で話す。とりあえず私の学校に行こう」

店を出て車の後ろのドアを開けて秀子は抱きかかえたアキラを後部座席に座らせて運転席に乗り込み、後から藤崎も後部座席のアキラの隣に乗り込んで車は走り去った。

こうして一応の危機は回避できたわけだが、これで安全になったという話ではなかった。
サツキと藤木が居なくなってから幾日が経ったことだろうか、蓬莱町では、ゆみとかおりちゃん、そしてヒロたちが屋上に続く階段の

途中に座って話していた。

「まだ帰ってこないの？二人とも・・・・」

「今朝も家に行ったんだけどやっぱり居なかったわ・・・・・」

「こっちも知り合いとかにいろいろ聞いてみたけど見ていないって」

「それにあの月島って子・・・・サツキの彼女だとか言ってたけど、あの子の姿も無かったわ・・・・」

「この辺ではあまり見かけなかったけど、一体どうしたんだろう・・・・」

「俺が思うに、そのサツキの彼女の月島って子が何か知ってるんじゃないのか？二人が居なくなったことを」

「やはり怪しいわね・・・・彼女を見つけて聞き出せばなにか必ず分かるはず！！」

「でももうこの辺りにはいないんだろう？」

「かもね・・・・恐らくサツキたちと一緒にいるのか」

「誘拐じゃないとしたら、一体なにが目的で居なくなったのか・・・・イベントとかなら藤木が俺に必ずといっていいほど話してくるし・・・・」

「イベント？」

「ゲームとかの発売日とか？」

「そうそう、でも何も言ってきてないし、あの時も別に変わった様子はなかったが・・・・・とにかく何か手がかりさえあれば別だが・・・・」

「手がかり・・・・！」

ヒロの言葉にゆみはあの時、サツキの部屋で見つけた怪文書の存在を思い出した。

だがはっきりとした居場所が書かれてはいないため、推測は不可能

だ。
これまでの二人の行動を改めて考えてみても、普段の秋葉などでのイベント時はとまったく違っていた。

だが強ちその推測は外れてはいなかった・・・・。

何故かと言えば、俺は今、チャリで秋葉にやってきていたからだ。
とりあえずしおりさんには夕方ぐらいには帰ると伝え、専門店で新しいメモリースティックや機械等、そして新刊の漫画を買って一人自転車に乗り店から店へと渡り歩いていた。

「ぬふふ～」

ご機嫌に買い物を済ませ、荷物を後ろのダンボール箱に入れてしおりさんの元へ買える準備をしていたときだった。
突然俺の前に一台の乗用車が止まった。

ふとその車を見た俺は言葉を失い、メガネがズレ落ちた。
まぁ驚くのも無理もない・・・俺の目の前に現れたのはなんと、俺の大好きなアニメ「魔法少女ふたばちゃん」の描かれた痛車だった。

「お・・・おおおお・・・・・！！」

声にならない歓喜と興奮が、俺の心の中で沸き立っていた。
頭の中ではすでに日本帝国海軍の軍艦が一斉に砲弾を放ち、大砲の爆音とハワイ大海戦行進曲が響き渡っていた。

俺はとっさにメガネを指で持ち上げ、持っていたデジカメでその雄姿をこっそりと撮って不適な笑みを隠し切れずあわてて自転車を押し、飛び乗って走り去った。

「うおおおー！！！ふたばぁぁー！！愛してるぜぇーッ！！」

しおりさん宅へ帰宅後、俺はリビングでソファーの上に胡坐をかいて座りながら持ってきたノートＰＣでさっき撮った嫁の痛車の画像を編集していた。
なんて癒されるんだ・・・彼女の微笑みを見ているだけでとても幸せな気分になれる。
だけど他の人は皆、俺みたいな人種をキモいだのなんだの言うが俺はそういうそいつらのがよっぽど気持ち悪い人種だと思う。
だから俺は昔からひねくれていた、今でもそう。

一人パソコンのモニター越しに嫁を見ていると、しおりさんが覗き込んできた。

「なにしてるの？サツキくん」
「えッ？！あッいや・・・その」
「ああ！！これって魔法少女ふたばちゃんじゃないの！？」
「えッ！」

なんだこの展開は！？しおりさんふたばちゃん知っていたのか！！
突然のことに俺は驚いた。

「しおりさん・・・知ってるんですか!?」
「うん!私もこのアニメ大好き!毎週見てるもの!!」
彼女の反応に俺はちょっぴりうれしくなった。まさかしおりさんがふたばちゃん好きだとは思ってもいなかった。
「そうなんですか!・・・かわいいですよね、ふたばちゃん」
「うん、特に原作の41話と、アニメでは劇場版のふたばちゃんとマッドピエロの対決シーンは圧巻だよね~!!」
「そうそう!!あそこで追い詰められてやられそうになった時にふたばちゃんの前に彼女の友達でもう一人の魔法少女、アスカちゃんが駆けつけて!!」
「アスカちゃんも可愛いよね!元は敵だったけどふたばちゃんに命を救われて・・・あのシーンも感動したなぁ~」
「ツインテールにニーソでなおかつ縞模様パンツがトレードマーク!いつもはふたばちゃんと争ってばかりいるけど、いざって時にみせるツンデレなところがまたたまらんですよ!!」
嬉しくなった、しおりさんも満足そうに語ってくれた。
俺はしおりさんと顔を合われて笑った。
今まで、藤木以外の人にここまでも楽しく話したことはない、ましてや異性となどまともに話したこともなかった。だから今の自分が不思議で仕方なかった。
明日はどうなっているのかまるで分からない、だからこそ俺は今を

ひたすらに生き続けなければならない・・・・。
俺はいつになったらこの運命から解放され、自由に慣れるのだろうか？だれも教えてはくれない。

だから俺は、自分自身を信じることでしか解決できない。
作業を終えて、俺はパソコンを閉じてあくびをしながら腕を伸ばした。

「あぁ～・・・・・さて、」

ふと時計を見るともう9を過ぎていた、晩飯を食ってからずっとパソコンに向かいっぱなしだったようだ。
俺の疲れたような様子を見たしおりさんは俺に先に風呂の入るように勧めてきたので俺はそうすることにした。

「サツキくん、お風呂の準備できたから先にどうぞ」
「え！、ああ・・・・ありがとうございます、それじゃあお言葉に甘えて・・・・」

俺はあいかわらずのふらふらとした、たよりないような歩き方で風呂場へと向かった。

「ああ、お風呂は洗面台のすぐ横だよ」
「わかりました・・・！」

洗面台の前で俺は服を脱いで風呂に入った。湯船の煙でメガネが曇り、俺は今までのことを振り返りただそこでボーっとしていた。

「（そういや、ゆみたちどうしてるかなぁ・・・・・ま、俺のことなんてどうせ忘れてるだろうな）」

俺がどうして少女になってしまったのか、今はただ漠然と考えていた。
もしもこの運命が誰かに決められた運命ならば、俺はこれから何をすればいいのだろうか？
今の俺は寝て起きて飯を食らい、そして親切にしてくれる人たちに甘えて日々が終ってゆく。

俺はなんのために少女になってしまったのだろうか・・・・いくら答えを探しても、誰に聞いても分かることではない。いや、恐らくその答えなどは存在しないのではないだろうか。

だが自分を責めてもなにも解決することはない、でも心の中では何が正しいのか、そんなことがうすうす分かってきているような気にもなっていた。

「さてと、そろそろ上がるか・・・」

湯船から立ち上がると、曇ったメガネを外して俺は風呂から上がった。
だが、このときまさに異変は起こりかけていたのかもしれない。

「ただいま・・・。」

玄関のドアの音がした。誰か来たのか？

俺は風呂敷から着替えのTシャツを出してそれに着替え、しおりさんにもらったゴムで後ろ髪を縛って出た。

「おッ・・・・お父さん!!」

えッ!お父さん?

しおりさんの親さんが帰ってきたのか、俺はしおりさんの元へ向かった。

だがその時、俺はその男と目が合った。そして運命は大きく揺れ動くことになろうとは思いもよらなかった。

そしてその男も同じだった、俺を見た男の反応、表情が違った。

「(つ・・・・・津山サツキ!!?)」

三十四、変わり行く運命。（後書き）

つづくんだ村

三十五、殺し屋との遭遇（前書き）

後半戦。

三十五、殺し屋との遭遇

「（な・・・なぜ彼がここにいるんだ！！）」

笹本の目の前にいたのはターゲットのサツキの姿だった。

「ああ、お父さん・・・この子は津山サツキちゃん、私の友達で今日はちょっとワケあってウチで泊めてあげてるの」
「は・・・はじめまして・・・！津山です・・・しばらくお世話になります・・・」

俺は少し緊張してしゃべった、だが詩織さんの親父さんはまるで驚いたような目で俺を見ていた。

「（なッ何故彼が・・・・・・！！まぁいい、これは好都合！かえって探す手間が省けた！）」

そう、詩織さんの父は組織の傭兵、笹本であったからだ。
組織の命令でサツキを狙っている本人とは、まだこのとき、俺も詩織さんも知る由もなかった。

「あッ・・・ああ！！・・・・津山くッいや・・・・サツキちゃんだったね、まぁ今夜はもう遅いしゆっくりしていきなさい」
「えッ？・・・・あぁ・・・はい」

笹本は微笑んで家に上がった。だがその笑顔は企みに満ちていた。

夜も更けた頃、俺は詩織さんの部屋で彼女の横に布団を敷いてもらって眠っていた。そして同じ頃、詩織さんのお父さんは一階のリビングで準備を始めていた。

テーブルの上には自動拳銃（M92Fベレッタ）一丁とコンバットナイフが置かれており、その前でソファーに座っている彼は携帯電話でどこかへと電話をかけていた。

「もしもし・・・俺だ、」

ちょうどその頃、トイレに行こうと起きてきた詩織さんは、リビングから電気の明かりが漏れているのに気がつき、ドアの方に近づくと部屋の中からなにやら父親の話し声が聞こえていた。

「お父さん・・・？まだ起きてるのかなぁ」

ドアの隙間から窺うと、彼はなにやら携帯で誰かと話している様子だった。

何を話しているのだろうと気になった詩織さんはその会話を聞いてしまった。

「そうだ、例のガキだ！もう一人の方のだ。」

「もう一人のほう・・・？お父さんなに話してるんだろう・・・」

「津山サツキだ、・・・あぁ、そうだ。捕まえて今は自宅に閉じ込めておいてる、心配するな・・・あの小娘を殺るのはまだ先の話だ」

「!!?」

その電話での会話を聞いた詩織さんは唖然とした。自分の父親がサツキくんの命を狙っているという事実を知ってしまったのだ。ショックのあまり、彼女は震えが止まらず、しばらくその場を動けないでいた。

「そ・・・そんな・・・どうして」

「ところで、金の準備は出来てるんだろうな?あぁ・・・あぁ分かった、ただし現金での受け渡しだ!後は好きにするがいい・・・。」

彼は電話を切って携帯をテーブルの上に置くと、彼女のいるドアの方へと歩いてきた。
見つかったら自分も殺されるかもしれない・・・詩織さんは逃げるようにその場を離れて自室へと逃げ戻り、力が抜けたのかドアの前に座り込んで身体を抱え込んだ。

「そんな、どうしてなの?・・・どうして・・・」

彼女はサツキののんきな寝顔を見つめながら考えた。もしこのまま

だとサツキはどこかへと連れ去られて殺されてしまう。
だが、もし関われば自身も身にも危険が迫るということは百も承知だった、しかしだからと言ってこのままなにもしなければきっと後悔する。

自問自答しているその時、階段の方からギシギシと二階の部屋に上がってくる足音が聞こえた。
詩織さんは急いでベッドの中に入ってあわてて顔を隠すように布団を被った。

ギシ・・・ギシ・・・・。

足音が止まった、ちょうどこの部屋の前だ。
ドアがゆっくりと開き、そこに現れたのはやはり彼女の父だった。

「・・・・お父さん・・・・・・」

彼はサツキの足元に来ると、様子を確認したところで部屋を後にして階段を下りていった。
恐怖のあまりしばらくじっと息を殺していた詩織さんは力が抜け、ベッドから起き上がるとすぐに彼女の足元で眠る俺の身体をゆすって目を覚まさせた。

「サツキくん！起きてッサツキくん！」
「・・・・んー、もうなんですかぁー・・・・・・もう朝ですか？・・・・・」

夜中の3時半に起こされたんだから無理もない、俺は眠たい目をこすってしぶしぶ起き上がった。

「詩織さん・・・・どうしたんですかぁこんな時間に・・・・まだ夜中の3時っすよ・・・・」

「サツキくん、落ち着いて聞いて！私もなんかよくわかんないんだけど、お父さん・・・・どうやらサツキくんのこと狙ってるみたいなの！」

「えー・・・？ねら・・・・なんすか？・・・・俺めっちゃ眠くてマジグロッキーなんだけどぉ」

「そんなこと言ってる場合じゃないよ！！早く逃げよう！！」

「・・・・へ？・・・・何処に逃げるんですかぁー・・・・」

俺はまだ寝ぼけていた、無理もない。真夜中に突然起こされたのだから。

途中で小便に行くなどの行為で目が覚めることはよくあるが、これは勝手が違いすぎる・・・。

状況がまったくわからず、詩織さんは外出の準備をしていたので俺は着の身着のまま自分の荷物を纏めた。

そして俺は念のため、護身用に持ってきてた十四年式（拳銃）を懐にしまい、詩織さんに手を握られながらそっと部屋の外に出て階段を気づかれないようにそぉっと下に下りた。

俺は両頬を叩き、眠気を吹き飛ばした。

「うっし！」

「大丈夫ね・・・・もう寝たみたい」
「詩織さん、突然でなんですが・・・・一体なにがあったんですか？」
「・・・後で話すわ、そんなことより今は家から出ることが先よ」
俺と詩織さんは小声で会話しながら真っ暗な中、玄関へと急いだ。
だがその時、背後の足音に気がついた俺は後ろを振り返った瞬間、電気が点いた。
突然のことに驚き、同じく後ろを振り返った彼女の顔色が一変した。
「詩織、こんな時間に何処に行くんだ？」
「・・・・おッお父さん・・・・！！」
そこに居たのは彼女の父、笹本だった。
その瞬間、彼女は俺の手をぎゅっと握った。俺はとっさに詩織さんのただならぬ反応に危険を感じ取った。
「・・・明日は学校だろ、サツキくんと何処に行くんだ？・・・・」
「・・・・・・・・。」
「こんな夜遅くに若い娘が出歩くなんて、危ないじゃないか」
「・・・・・・・・。」
笹本の質問に、彼女はただ沈黙を続けていた。俺はふとその男の片手が後ろに回っていることに気がつき、背後の鏡を見て仰天した。
男の手には一丁の自動拳銃が握られているのが分かった。

刹那、冷や汗が止まらなかった。

「な・・・・なんだと!?・・・・・・」

三十五、殺し屋との遭遇（後書き）

つづく！

三十六、突然の再会。（前書き）

ちょっと漫画の執筆活動が忙しくてしばらく更新できませんでした！サーセン

三十六、突然の再会。

平和ボケした日本。俺たちは今、とんでもない状況に追い込まれていた・・・・。

目の前にベレッタ（拳銃）を隠し持った男、止まらない冷や汗・・・。

まさに絶体絶命の危機、状況がまるで分からず頭の中が混乱した。

「二人揃って何処に行くんだ？」

「・・・・・えッ・・・あッその・・・・・ちょっと二人でコンビニ行こうかなーって・・・」

「コンビニまで行くのにそんな荷物が必要なのか詩織・・・。」

「え！あ・・・・これは、ちょっとその・・・・・っく！」

「えっ！あ！！詩織さ・・・」

だがその瞬間、詩織さんは俺の手をつかむと、すぐさま玄関のドアを開けてそこから逃げるように飛び出し、彼女は俺の自転車に飛び乗り、俺は言われるがままに後ろの荷台に飛び乗った。

それを見た笹本もすかさず拳銃を仕舞いこんで走って追いかけてきた。

「ちょっちょッと！！詩織さん！！」

「逃げないと！！早く逃げないと！！」

俺は走りながら後ろを振り向くと、後から笹本が追いかけてくるのが見えたので思わず怖くなった。

「うわあああ!!追いかけてきたー!!」
「くッ!!サツキくんつかまって!!」
「えッ?!ッうわ!!」

その後、ようやくまいてなんとか俺と詩織さんは逃げ延びることができた。
俺と詩織さんはその後、自転車で秀子さんと藤木のいる学校へと避難してそこで夜を明かした。

翌朝、俺は詩織さんから事情を聞かされて驚いた。しかし何故あの男は俺を狙っているのか分からなかった。

「じゃあ・・・・やっぱり俺たちを追い回してる連中の仲間ってことなのか・・・・・?」
「恐らく・・・・・でも何故笹本さんのオヤジさんが・・・・」
「おまけに拳銃まで持ってやがったぜ、只者じゃないことだけは確かだな・・・」
「拳銃!?」
「あぁ、M9ベレッタ・・・・。口径9ミリ、装弾数15発。米軍及び警察の特殊部隊の正式オートマチックハンドガン・・・・・。」
「ベレッタかぁ・・・そういやお前も拳銃持ってきてたよな?」
「ああ、コイツか」

俺は懐に忍ばせていた拳銃を出して見せた。

「俺のは旧日本陸軍が使ってた、南部十四年式てヤツだ。しかしコイツは装弾数が８発で口径が８ミリ・・・・・もちろん正真正銘、本物だぜ」
「えッ！？それ本物なの？！！」

今さら気がつきやがったよ、この天然。まぁ万人どもは平和ボケしてやがるから、おもちゃのピストルと間違えても無理ねーか・・・。

「じいちゃんは昔、陸軍の武器製造に携わっていてなぁ、今でも俺んちの蔵ン中引っかきまわしてると、時々こういった拳銃やら手榴弾やら小銃弾やらが出てくるぜ？」
「・・・すげぇな・・・おまえのじいちゃん・・・・」
「まぁなｗｗしかしじいちゃんもよくやるよ、今日まで警察にも見つからず・・・おまけに当の本人まで武器の存在すら忘れてる始末だしな！ｗ」
「孫もそろって法律違反・・・・」
「まぁバレなきゃ大丈夫だよ！俺一度本物撃つのが夢だったんだ！」
「ふーん、俺はあんまりミリタリーとかそっちには詳しくはないが・・・・ところでサツキ、弾薬は大丈夫なのか？」
「そうだな・・・・・あんまり無駄弾使うワケにはいかねーしな」

しかし東京に来るまで四発ぐらい発砲したから、持ってきてる予備の銃弾は残り合わせて１２発もない。
本気で撃ってたらすぐ無くなる、これからは考えて使った方がいいみたいだ。

だがどのみち装弾数は８発、弾が無くなるのも時間の問題だろう。

「藤木、他になんか使えそうな武器ねーか？」
「スタンガンならあるが、他は・・・・ロケット花火が五本か」
「なんでおめぇーロケット花火なんて持ってんだ・・・・まぁいいや、無いよりマシか」
「なんだよその上から目線は！」

俺と藤木が下らない言い合いをしている一方、校舎屋上では詩織さんと秀子さんが二人だけで話し合っていた。

「あなたももう分かってるはずだろ？」
「・・・・でも、なんでお父さんが・・・・・」
「笹本のオヤジさんは組織に雇われて、彼・・・・サツキくんを狙ってる」
「先生、組織って一体なんですか？！どうしてサツキくんは私のお父さんに狙われなきゃいけないんですか！！」

詩織さんは秀子さんに問いかけた、秀子さんはしばらく沈黙して重い口を開いた。

「なぁ笹本・・・・サツキくんがもともとは男の子だったってことは聞いているな？」
「初めて会ったときに・・・・・病院から間違って渡されて飲んじゃったって・・・・・」
「実はな、あの薬を開発したのは私なんだ・・・・・」
「え？！」

秀子さんのその言葉に、詩織さんは驚きを隠せないでいた。しかし

驚くのも無理も無い。

「どういうことなの!?先生・・・それって」
「うん・・・話せば長くなるんだが、これ以上あまりこの件には関わらない方がいい。笹本、お前の身が危ない」
「そんなこと言っても、私はサツキくんを・・・・」
「気持ちは分かるが、お前の親父さんの事もあるだろ。」
「で・・・でも・・・・」

そう言うと、彼女はうなだれた。
それをみた秀子さんはため息をついて自分の結論を告げた。

「わかった・・・・そこまで言うならお前もとりあえず一緒に来い」
「えッ!ホントに?」
「だが絶対に無理はするなよ?危ないと感じたらすぐに逃げろ、いいな」
「分かったわ・・・・。ところで先生さ、あの話のことなんだけどさ・・・・」
「ああ、例の薬の件だが・・・・まだはっきりとしたことは分かってないんだ」
「それってサツキくんも知ってるの?」
「一応話してはあるが、今はそんなことよりここから逃げることが先決だ。笹本、お前も手伝え」
「えッ?逃げるって・・・何処に?」

彼女がそう訪ねると、秀子さんは笑って言った。

「遠く（山梨）にだよ！」

その頃、俺と藤木は秀子さん秘蔵のエロ漫画雑誌をダンボールの上に座って読み漁っていた。

「それにしてもベタな表現だよなぁw」

「え？」

「（イクイクぅ～）って、まぁ実際も絶頂に達するとそう言うのか分からんがよ・・・・」

「まぁ漫画なんだし、それが当たり前の表現方法なんじゃないのか？」

「いやだからさぁー、オカシイでしょ！実際こんな胸の大きい女なんて居ないぜ？」

「たしかになｗｗ最近のアニメや漫画の重要萌えキャラって必ずといっていいほど胸でけぇよな」

「俺思うんだけどさ、オタクが全員巨乳萌えだと思ったら大間違いだぜ？何でもかんでもでかく描きゃいいってモンじゃねーんだよ！」

「単にそれって巨乳好きな男か多いだけなんじゃいのか？」

「俺はその間逆、少数派だ！！」

「サツキって貧乳萌えだっけ、」

「まぁな、でも実際は胸の大きさなんぞどーでもいいことだ。問題は可憐さ！清楚さ！だから俺は別に胸がでかかろーと小さかろーと、そんなことはどーでもいいんだよ・・・」

「可憐さと清楚さねぇ・・・・」

「藤木、ところでお前はどっち萌えだ？」

「巨乳萌え！」キリッ

「この裏切り者！！ッ」

「で、結局のところどうなんだよ？」
「なにが？」
「おっぱいの話さ、」
「要はお前はデカイ胸の間にてめぇの汚ねぇキンタマを挟んで亀の頭を女の下でペロペロ舐め回して欲しいワケか？、そしてお次は綺麗に我慢汁まで一滴残らずアイス棒のごとくチューチュー吸って貰って、終いには女の面にイカ臭いマヨネーズをぶっ掛けてやりたいって話か？」
「サツキよぉ・・・・お前どうしたんだよさっっきっから・・・・」
「どーもこーもねーよ！！俺なんて生まれてからずっと連れ添った息子を失ったんだぞ！！」
「息子って・・・・おまｗ」
「朝目が覚めてみりゃ、息子は家出。変わりに娘が居たよ・・・・・」
「娘っておまｗｗｗ」
「そう！！おまんこだ！！俺の息子がおまん子に変わっていたんだ・・・・！！」
「俺にはうらやましいが・・・・」
「エロ漫画読んでもちっとも立たねーんだよ！！それどころか股間が濡れてくるんだ！！濡れ濡れなんだよ！！お前に分かるか！！この心の葛藤をッ」
「男だった時と女になってしまったときのギャップの差か・・・・ことろでパンツまで濡れたか！！」
「いやそこまでは・・・・てかお前何興奮してんだよ。つーか俺の話聞いてねーよな」
「サツキ！ちょっち一回見せてくれや！」
「見せねーよバカ、エロ同人誌の少女達の股間でも眺めてろ！俺よ

り全然濡れ濡れだぜ」
「そこをお願いしますよ～サツキさま！！」
「っち！ったくうっせーなてめぇは・・・・・黙らねぇとお前の馬鹿っ面に犬のクソ投げつけんぞ！！」
「いやむしろサツキのアレを俺にぶつけてくれ！！」
「うっせぇよこのスカトロ野郎！！ｗｗｗ見せねぇっつってんだろうがッ！！」
「あの・・・・・サツキくん・・・・・・」
「だからなんだよ！！」

「えッ？！」

後ろを振り向くと、そこに居たのは車椅子に乗った一人の少女の姿があった。

「あッ・・・あッアキラ！！？」
「久しぶりです！」
「えッ！何何？どうしたんだサツキ？この車椅子のかわいい子は誰！？」
「私もいるのよ～？」
「ふっ・・・・藤崎さんまで！！」

アキラの後ろからひょっこり藤崎さんが姿を現した。
さらに状況が分からず、藤木はなにやら興奮と戸惑いの様子だった。
すると刹那、藤崎さんは俺に抱きついてきて大きな胸元にまら再び俺の顔を押し付けてきたからたまらない。

「サツキちゃーん！！」
「もがぁーッ！！」

それを見た藤木はまたも状況が分からず、ただただ鼻血をだらだらたらして興奮していた。

「おおおおおッ！！！？なんだかよく分からんが、なんじゃこの百合展開はーッ！？」

やわらかい胸元に、俺は葛藤と戦いつつも鼻血を堪えるので精一杯だった。

三十六、突然の再会。（後書き）

つつく

三十七、被弾のサツキ（前書き）

緋弾違いねｗｗ

三十七、被弾のサツキ

「アキラ!?藤崎さんもどうしてここに・・・・・」
「私達も終われててね、アキラもサツキくんに会いたがってたから」
「あの藤崎さん・・・・・ところで根岸さんは?」

俺がそう訪ねると、二人は深刻な顔をしていた・・・・。
まずい、これは地雷でも踏んでしまったかと若干顔が青くなった。

「え?・・・・まさか、根岸さん・・・・・」
「いや、そういうワケじゃないのよ・・・・・途中で分かれたの、あの人・・・私達を巻き込まないために」
「そうだったんですか・・・・・それじゃあ連絡とかは取れてないんっすか?」
「こっちからも何度も電話やメールを送ったんだけど返事が無くて・・・でもきっと大丈夫よ!」

明るく俺にそう言った藤崎さんだったが、彼女の表情はどこか少し寂しさを感じた。
この人、もしかして根岸さんのこと・・・・・、そんな下らんことを考えていると、突然藤木が話に割り込んできやがった。

「おいサツキ!」
「なッなんだよいきなり!!てめぇぶっとばすぞ?」

「あの子が例のアキラさんか？」
「えっ、あぁ・・・アキラ、紹介するよ。このうるさい奴は俺の学校の腐れ縁の同級生の藤木。」
「どうも！！始めまして、わたくし藤木恵介と申しますーッ！！」
鼻息を荒くして藤木はアキラの手を握って興奮気味に自己紹介をしていた。一方でアキラは若干、引きつった微妙な笑顔で答えていた。
やれやれ、アキラもこれから苦労しそうで可愛そうだ・・・・・。

そんなこんなで打ち解けた俺ら四人は準備をして校舎の裏口で待っていた。
藤木はアキラにいろいろ尋問に入り、俺はといえば一人壁に寄りかかってボーっと地面の一点だけを見ていた。
藤崎さんは携帯で根岸に連絡を試みていたが、やはり電話には出なかったようで心配そうにしていた。

ふと藤崎さんの方を見ていた俺は再び地面を見つめて軽くため息をついた。
まさかこんなに早く地元に帰る事になろうとは思っていなかったし、それに向こうでは俺や藤木がいなくなって大騒ぎしているだろうし、後のことを考えるとめんどくさくなってくる・・・・。

だから俺は一旦考えることを止めた、しかしこれからどうなってしまうのか気がかりで仕方なかった。

ただただ分かりきったことだけが頭の中でループしてくる・・・・
この先どう生きていけばいいのか、たしかに藤木の言うとおり、ずっとこのままってワケにはいかない。

いろいろ考え込んでいるうちに現場に秀子さんと詩織さんが荷物を背負って現れた。

「お待たせ、皆準備はでてきてるか？」
「こっちは大丈夫、残りの荷物とかは全部車のほうに積み終わってるわ」
「よし、それじゃあ行くか。」
「えッ！もう？」
「もう追っ手が近くまで来てるかもしれんし、出来る限り早くここを離れたほうがいいしな」

秀子さんが用意した車に俺と藤木とアキラ、そして藤崎さんと秀子さんと俺が乗り込んで最後に詩織さんが乗車しようとしたときだった。思いもよらぬ展開が待ち受けていた。

「詩織・・・・。」
「！！」

突然のその声に、詩織さんと俺は思わず凍りついた。
その場に現れたのはなんと詩織さんの親父さん、笹本だった。

「お・・・・おとうさん・・・・」
「詩織、何処に行くんだ？」

俺は思わず車から降りて懐に忍ばせていた十四年式拳銃を抜き取り、銃を構えた。

すると笹本もベレッタ（拳銃）を抜き取り銃口を俺のほうに向けてきた。

ガチャッ

「お前・・・！何しにきた！！」
「サツキくん！！」
「詩織さんさがって！！」
「お前・・・・」
「これはエアガンなんかじゃねーぞ？ベレッタより弾数は多くないがな！！」
「詳しいな、小娘・・・・・いや、小僧。」
「マニアなもんでね・・・・・アンタのベレッタは密輸かなにかで手に入れたんだろうがな・・・・」
「小僧、バカな真似は止めろ。お前たちに勝ち目は無い」
「だからなんだ、さしずめお前も組織の人間なんだろうがな・・・・お前らなんかに捕まる気なんてさらさらねぇよ」
「サツキくん・・・・」
「詩織さん、早く乗って！！」
「でっでも・・・・」
「詩織、そいつを連れてこっちにこい。そうすればなにもしない」
「嘘付けッ！！いいから詩織さん早く乗って！！」
「おいサツキ！！」
「藤木！！てめぇはアキラと詩織さんと一緒に行け！！俺はこいつと決着をつける！！」
「おッお前何言って・・・・」
「いいからとっとと行けッ！！ぶっ殺すぞてめぇ！！」
「サツキ・・・・わかった、詩織さん早く乗って！！秀子さん車出して！！」

「わかった！」

そして車はそこから走り去り、その場には俺と笹本が残された。

「仲間を逃がしたつもりか・・・・・」

「つもりじゃねぇよ、逃がしてやったんだ。それよりお前はどうやら俺に用があるらしいな・・・・」

「ああ、ちょっと一緒に来て欲しいんだが」

「断る、と言ったら・・・・？」

「力ずくでも・・・・」

ぶっちゃ言うと、この時点で俺には賞賛なんてなかった。その場のノリにまかせて思わずそんなセリフを口走ってしまったことに内心、後悔してしまったのは言うまでも無い・・・。

しかし最近の俺の性格の変わりようは、自分自身でもちょっと驚いている。そりゃそうだ、いままで暗い部屋で一人、エロゲと深夜アニメに溺れていた男がたった数日でこの変わりよう・・・・完全に吹っ切れてしまっていたのかもしれない。

拳銃を持つ手が震えた。

「ぐ・・・・」

「どうした小娘、撃たないのか？」

しかし俺はもう何も考えないようにしていた、考えるだけそれは無駄なことだし、そんなことで問題が解決するならだれも苦労しないからさ。

だから俺には迷いなんてなかった。

「ああ、撃つさ。ジャムが起こらない程度になッ！！」

そう言い放ち、俺は二発の弾丸を発射して笹本も同時に弾丸を放ってきた。

俺は思わず電柱脇のゴミ箱の陰に飛び込み、改造モデルガンで鍛えた射撃の腕をここで一気に発揮した。

「小娘！！なかなか遊びが上手いじゃないか！！」

「遊びじゃねぇ！！ただの喧嘩だ！！」

白昼の銃撃戦、俺は一旦引き体制を立て直した。

「クソッ・・・・・こんなんじゃカートリッジがいくらあっても足りねぇぜ！」

しかし銃弾は止むことなく飛んでくる。このままだと勝ちがない俺はとっさに校舎内に飛び込み、飛んでくる弾丸と落ちるガラス片にびびりながらも廊下を駆け抜け、階段を駆け上がった。

その後を追うように笹本も校舎に入り、拳銃片手に階段を駆け上がった。

ひらすら階段を駆け上がり、気がつけば俺は屋上にいた。

「はぁ・・・・はぁ・・・・クソッ！・・・・・」

鉄柵の前であたふたしていると銃声と共に俺の持っていた拳銃が飛ばされて足元に落っこちてしまった。

「ぐッ!!」

後ろを振り返ると、こっちに拳銃を向けて俺と笹本は対峙していた。

「小娘、もう逃げ場はないぞ?大人しく俺と一緒に来い」

「嫌だッ!!」

俺ははっきり言い放った。しかし笹本は俺の足元に向けてたま銃弾を放った。

ドンッ!!

「うぇッ!!」

「ならいい、それならこっちにも考えがある。なんとしてもお前らを研究所に連れてく」

「組織の連中か・・・・・誰の差し金だ?」

「フッフッフッフ・・・・この国の裏組織さ、お前ともう一人いた小娘・・・・・たしか、アキラとかいったな」

「!!?」

「お前・・・・何故アキラを!!」

「そうか、やはりあの車に乗っていた娘か・・・・・」

「何をするつもりだ!!何故こんなことをするんだ!!」
「金の為さ、流石に傭兵の仕事だけじゃ近頃は食ってはいけない。転職したんだよ・・・」
「つまり、お前らからすれば俺はめてぇらのメシ代ってことか・・・くくくッ」
あまりのばかばかしさに俺は笑った。

「仕方ないさ・・・こんなご時世だ、人一人いなくなったことろで誰も気に無するまい」
「誰も・・・・・か、たしかにそうかもな。」
俺はそう言うと、目を閉じてからすと空を見上げた。
流れる雲はどれも歪な形をしていた。それが本来の雲の姿なのだろう・・・そして俺も。

どうせ死ぬなら、いっそ綺麗にいなくなりたい。この狂った世界から今すぐに。

むしろ、大好きな銃で死ねるのだとしたらそれもまた本望。でも、まだ俺の嫁ふたばちゃんに別れの言葉もなにも言っていなかったのが唯一の心残りだ。

俺は空を見上げるのをやめ、下をうつむいたまま沈黙した。

「どうした小娘、気が変わって俺と一緒に行くか?」
「・・・・・・・・フッフッフッフッフ。・・・・・くっくっく

っくっく・・・・・」

「アハハハハハッ!!」

俺は不適に笑った。

「どうした?気でもおかしくなったか?」

「ご生憎様、俺がここで死んだところで気にするやつなんて一人もいないぜ・・・・俺はガキの頃から影が薄い立ちでね・・・・」

「ガキの頃か・・・・今もまだガキじゃないか」

「俺がガキならアンタはとっくに老いぼれだな・・・・。それにそうさ、俺は今も影が薄い脇役だ・・・・・けどな、たとえ物語の脇役だったとしてもそいつの中の物語の主役は己自身だ!!」

「自分の中では自分自身が主役・・・・か、だが所詮は脇役に過ぎない」

「あぁそうさ・・・・でもその代わりに脇役には主人公には仕えない裏技が脇役には仕えるって知ってたか?」

「裏技?」

「こういうことさ」

刹那、俺は隠し持っていたかんしゃく球(改良済み)を地面に投げつけて相手の視界をくらました。

今の隙に俺は拳銃を拾い、その場から逃げ出した。

「クソ!煙幕とは考えたな!!」

しかし足音で分かったのか、笹本は煙幕の中にまで銃弾を放ってきた。

このとき一発が不運にも俺の脇腹をかすめ、被弾こそは免れたものの血がだらだらと流れ出た。

「うわッ・・・・・痛ッ！！くそ・・・・・」

俺は必死に屋上から表の非常階段を駆け下り、その後を笹本はすかさず追ってきて拳銃を撃ってきた。ので俺も応戦して二三発ほど撃ってまた階段を駆け下りた。

Tシャツの横が血で紅く染まり、俺は傷口を片手で押さえながら必死に走った。

三十七、被弾のサツキ（後書き）

つづく

かなり話の内容が滅茶苦茶になってきてるような気がするのは俺だけか？ｗ

三十八、男に戻った！！（前書き）

寒くなってきた、あっというまにもう十二月もましぐら

三十八、男に戻った!!

脇腹から流れ出る血を抑えながら、俺は必死になって逃げた。
弾も残りわずか、このままではホントにヤバかった。
気がつくとあたりは暗くなり、脇腹を押さえ息を切らしてただ必死に暗い道をひたすら走り続けた。

「ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・・ハァ・・・・」

なんとか俺は笹本を撒いた、だがしかし負傷してしまった俺はそろそろ体力に限界が来ていた。
気がつくと、俺はどこかわからない橋の下にやってきていた。
終に歩くこともままならなくなり、俺は放置されていたダンボールの影に隠れるように壁に寄りかかって座り込んだ。

「ハァ・・・・ハァ・・・・・くッ・・・・くそ・・・・痛ぇ」

こんなことになるなら家出なんて馬鹿なこと考えるんじゃなかったと自己嫌悪になっていた。
それもそうだ、馬鹿なことをした。俺はホントに馬鹿だ。
怪我も流血するほどとはいえ弾はかすった程度だったから直に被弾はしなかったものの血は一向に止まる気配はなく、徐々に意識が遠のいていくのが自分でも分かった。

俺は・・・・死ぬのか?
心にも無いことを呟く、しかしこのままだと確実に死ねる。

ということはつまり、上手くいけば俺は男に戻れるのか！？
だが死にかける程度で死なないようにするのは無理だ、この怪我じゃいずれ俺は完全に死んでしまいそう。

だったたそれでもいいじゃないか？

そもそも俺の生きている意味ってなんだ？

ただ起きて飯を食って、そしてまた寝て・・・・それが今まで当たり前のことに感じられていたのが幻のようだった。
俺の唯一の頼みの綱は「ふたばちゃん」だけだ。それしかない。

しかし、それしかないのがかえって楽なのかもしれない。

すると突然、目の前に彼女が現れた・・・・そう、俺の嫁のふたばちゃんだ。
これは幻覚なのだろうか、それともアニメの見すぎなのだろうか。
俺にはわからなかったがそんなことはどうでもよく思えた。
だって目の前に現にこうして彼女が現れてくれたんだ・・・・俺は嬉しかった。

「ふ・・・・ふたばちゃん・・・・・・俺を迎えに来てくれたんだね・・・・」

笑顔でやさしく俺に微笑む、その姿はまるで天使のようだった。
彼女になら・・・俺の嫁にならば何処へでも連れて行ってもらっても構わない、ただ彼女とずっといっしょにいられるならば俺はそれだけで十分だった。

普通ならばこの状況、完全に俺の頭がイカレちまったと思うところだがそうなのうだろう。
自分でも自覚してるんだし、だったら俺は目の前にあるものを信じるだけ・・・ふたばちゃんを・・・・。

夢の中へ行った。

ふたばちゃんに手を引かれながら、俺は一人夢の世界へと旅立った。

不思議なことに、なんと身体は男に戻っていた。

「男に戻ってる・・・・・」

「サツキ!」
「ふたばちゃん!ここは・・・・何処なんだ?」
「ここは天国でも地獄でもない世界だよ」
「えッ?」

彼女はそう言った。真っ白な靄がかかった世界がどこまでも続いていた。

「天国でも・・・・地獄でもない世界・・・・？」
「そう、ここは私とサツキだけの世界なの！」
「俺と・・・・・ふたばちゃんだけの世界・・・・・」

その言葉に俺はニヤっと不気味な笑みがこぼれた。
すると彼女はいきなり俺に抱きついてきたので俺は驚いた。

「そう・・・だからサツキは私とここで一緒になるの！」
「一緒に！！？」

きたきたきたァーッ！！
一気に体内のドーパミンだかなんだか分からん物質が活性化かなんだかしてくるのが分かった。
俺の心臓の鼓動はさらに動きを早めた。

「私はいつまでも君と一緒にいるよ、だからもう何も恐れなくていいんだよ？」
「もう何も恐れないよ・・・・・だって僕には君が・・・・ふたばちゃんがいるから！」
「嬉しい！サツキ！」
「うおッｗｗ」

俺はまるで夢でも見ているかのようだった、というか、これが夢そのものなのかもしれない・・・・。
しかし彼女の暖かな温もりは紛れもなく本物、もし夢ならば俺はもう一生覚めない夢をみ続けていたい。

幸せな時間が続いた。俺とふたばちゃんとの幸せな時間が・・・・。
だが突然、どこからか誰かが俺の名を呼ぶ声が聞こえてきた。
聞き覚えのある声だった、でも誰だったっけ・・・・？
思い出せない、俺は記憶喪失？
違うんだ、俺はただのオタクで変態のクズだ。銃と二次元美少女が大好きな変態野郎だ。
そして俺は・・・・俺は？　俺って何だ？
「あなたは私・・・・・。」
「えッ？」
誰かの声がした、突然ふたばちゃんの姿が消え、俺はまた闇の中へと呑まれていった。
闇が晴れ、目の前にあのときの少女が立っていた・・・・・。
あの時の、車で連れ去られていたときに見た夢に出てきた美少女。
そう、女体化した俺の姿だ。
「あなたはまだ死んじゃいけないの・・・・」
「えッ・・・・あの・・・・あんたはたしか、もう一人の・・・・・・俺？」
俺は我が目を疑った。また俺は自分自身と会うなんて思ってもいなかった。

「て・・・・俺は死んだのか？」
「まだ死んでもいないし、生きてもいない・・・・」
もう一人の俺はそう言った。しかし一体どういうことだ？俺が死んでも生きてもいないって！？
俺はもう一人の俺を問い詰めた。

「一体どういうことだよ！！じゃあ、今ここにいる俺はなんなんだッ！？」
「今ここにいるあなたは魂そのもの・・・・だから死んでも生きてもいない・・・・・」
「は？」

話の内容が支離滅裂、まったく理解できない。
今ここにいる俺は本体ではなく、俺自身・・・・つまり、俺の魂の本体ということなのか？
それに、マイハニーのふたばちゃんの姿も見えない、俺は頭が混乱してきた。

「ワケわかんねーよ！そもそもお前は誰なんだよ！！」
「私はあなた・・・・」
「えッ？それってどういう・・・・まぁたしかに薬で女体化した俺の姿をしているが・・・・」
「私はあなたが生まれる前にいた、もう一人のあなたの存在。でも今は誰にも知られていない」

もう一人の俺は、まるで死んだような目をしてそう話した。
どういうことだ?俺の生まれる前の存在?つまりそれって男か女か、それのどちらかに決まることで結果的に俺は男に生まれて、もう一つの生まれるはずだった存在ということなのか?
つまり、俺の親父の精子が・・・いや、これ以上は下ネタになりそうだから自重しよう。

つまりそういうことか。

「お前は俺として生まれるはずだったもう一つの存在ということか?」

俺がそういうと、もう一人の俺は黙って首を立てにふった。
そしてもう一人の俺は言った。

「だから、あなたは私なの。あなたが生まれなければ、あなたの代わりに私が生まれていたということ・・・。」

俺はそれ以上なにも話せなかった。しかしその時、また再びどこからか俺を呼ぶ声が聞こえた。

「サツキくんッ!!起きろ!!サツキくん!!」
「サツキーッ!!」
「起きろー!サツキーッ!!」

この声・・・アキラと秀子さん、それと藤木?

俺は闇の中でもがき続けた。そして次の瞬間、俺は意識を取り戻した。
目が覚めると俺はワゴン車の後ろの座席に横になっていて、俺の前にいたのはアキラと藤木、そして秀子さんの三人の姿があった。

「・・・・ん、・・・・・」
「サツキくん!!」
「サツキ!!よかった!!秀子さん!サツキの意識が戻りましたよ!!」
「・・・・・・ここは・・・・・・」
「気がついたかい!よかった・・・・もしものときのために彼に発信機を持たせておいて正解だったな、」
「サツキくんは、あと一時間遅かったら死んでたって・・・・でも発信機の反応で君の居場所が分かったんだよ!」
「あの・・・・俺は死んだはずじゃ・・・・?」
「死んでないよ!君は死にかけたのさ、」
「えッ?でっでも・・・・ふたばちゃんとちゅっちゅは・・・・」
「なにワケの分からんことを言ってるんだぁ、サツキ。俺ならここにいるぜ?」
「おめーじゃねーよ!」

「ボブッ!!」

俺は軽く藤木を殴った。
すると殴った拳が痛かった、ということはやはり俺は夢を見ていたのか・・・・。
軽いため息が出た。

「やっぱり・・・ありゃ、夢だったのか・・・・・」
「夢って？」
「いや、なんでもない・・・・・ん？」

しかしその時、俺はまた股間に謎の違和感を感じた。俺はおそるおそる股間の方に手を当てると、なにかもっこリしたものに触れた。まさかと思い、俺はズボンの間からパンツの中を見てみて驚いた。

「マジかよ・・・・・・」

それは紛れも無い、俺の息子だった。
突然の出来事に俺は言葉を失った。

「オレ・・・元に戻ってる・・・・！！よっしゃーあッ！！」

俺は終に男に戻った。嬉しさのあまりそこから飛び上がり、車の天井に頭をぶつけて痛がった。
それを見ていたアキラと藤木は笑っていた、とりあえず俺は藤木を殴る。

もともとあるかないか分からなかった自慢の胸は引っ込み、キ○タマが元に戻った他は、長い髪はそのままだった。
ふと撃たれた傷を確認すると、傷はまるで嘘みたいに綺麗になくな

っていた。

「そうか・・・・そうだったんだ！俺は一度死んだんだ！！そして生き返った！！だから男に戻れたんだッ！！」
「まぁ・・・・要はそういうことだな・・・・」

秀子さんはなにやら怪しい口調でそう言った。俺は歓喜に溺れた。でも内心は女の子の姿のままはまんざら悪くは無かったのでそこはちょっと残念な感じもあったが、まぁ結果的にはこうして元の姿に戻れたのだから俺はそれで十分だった。

俺は車から降りて表に出ると、そこは人里離れた郊外のどこかの道の駅の駐車場だった。

「はぁ～、シャバの空気は美味いぜ・・・・。」
「サツキちゃん・・・・？」
「へ？」

ふと声のする方へ目をやると、そこには藤崎さんの姿があった。男に戻った俺を見てどうやら驚いている様子だった、反応がすげぇな・・・・。
すると藤崎さんは俺の元へと駆け寄り、体中あちこちを触りだした。
変態だッ！！

「うそーッ！！ホントにサツキちゃんなの！？」
「は・・・・はぁ・・・・あの、そんなに触られると困るんですが・

・・・・」

「あぁ！ゴメンなさい・・・・ちょっと信じられなくて・・・・・・あまりにも突然で・・・」

俺だってあまりにも突然触られりゃ驚くわ！！

同じくしてちょうどそこに詩織さんがお手洗いから帰ってきたようだ。俺を見て驚いている。

「サツキくん！！元に戻ったのね！！」

「まぁ・・・・あはは、おかげさまでこの通り・・・・。」

俺はセクハラにならない程度に自分の股間部に軽く手を当てて叩いた。その俺のジェスチャーに彼女は軽く笑ってくれた。

「でも外見から見れば女の子に見えるよね・・・・・髪の毛は元に戻らなかったの？」

「うん、そうみたいっす。でも他は胸とかは引っ込んでしまってｗ」

「元の姿に戻ったことだし、この際バッサリ切っちゃう？」

「うーん・・・・・いや、まだこのままでいいっすよ。こっちの方がいろいろと都合がいいし・・・」

「そう？、あッそうそう！さっきあそこのお店で鯛焼き買ったから一緒に食べよう！」

「はい！是非いただきます！！」

ニヤニヤと怪しい笑みを浮かべて俺たちは車に戻った。

運転席では秀子さんが地図を広げていて位置を確認している様子だった。

後ろの席に乗り込むと、詩織さんが買ってきてくれた鯛焼きをアキ

ラと藤木にも分けて食った。

「詩織さん、ゴチになりまーす！」
「いただきまーす！」
「あッ先生と藤崎さんのもあるんでどうぞ！」
「サンキュー笹本！」
「ありがと」

鯛焼きを皆でなかよく食べた後藤崎さんに地図の確認を頼み、俺たちの乗った車は一路山梨県へ向かって走り出した。
やっと家に帰れる、俺は気が少し軽くなった。
まさか生きて帰ってこられるとは思ってもいなかった、その日俺は久しぶりに深夜アニメを見て癒された。

三十八、男に戻った！！（後書き）

つづく

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0164j/

スランプ・マスター

2011年11月17日07時05分発行